

---

Governor's O&D Season 1 ~ “ さと ” とは、 “ くに ” とは ~

北条忠節

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Governor's O&P;D Season1} “さ  
と”とは、“くに”とは

### 【Nコード】

N6784M

### 【作者名】

北条忠節

### 【あらすじ】

約5・7万人の人口を抱える、典型的な地方の小規模な市を舞台に、膨れ上がった財政赤字の責任をとって市長が辞職した。市制施行後初の事態となる“出直し”市長選が、その後の市の運命を揺るがす嵐の前触れとは、果たして誰が想定できたのだろうか？

## 南国動乱（前書き）

貴方がた1人1人が、地方再生の目撃者になる！空転、驚愕、憤慨  
…見えぬ炎が燃え盛る南国の地！

## 南国動乱

平成18（2006）年6月17日、北海道から全国へと真の二コースが瞬く間に流された。

「北海道夕張市、財政再建団体の申請意向を決める」

今、都道府県・市町村が抱える最大の懸案は長年放置されてきた財政赤字体質：それをわかつていながら、政府は対策として市町村の全国規模での再編を促した。

しかし、夕張市は再編の波にさえ乗れないままだった：それであるがゆえ、財政再建団体への転落は必然と見る論客あり、また国や夕張市ほか全体の問題であるとして警告を促す政治家あり、当時は喧々諤々とまではいかず、まるで北海道ローカルの特有事情として意図的な情報操作をも感じるマスメディアの報道に、ますますの不満を抱く者まで出てきた。

意図的な印象操作のオーラを感じ取れなかったのか、合併特例債という金の麻薬「ヤク」を魅力的なものであると取り付かれた魑魅魍魎な我が国の地方の状態をさらに加速化させ、多くの町や村が格が大違いになつて皆に見られることを承知のうえで“市”になつていった。

未だ、その麻薬は全国にはびこつたまま：そして、役所関係者・政治家はもちろん住人各自にも麻薬の副作用は我が身に跳ね返つているにもかかわらず、服用を続けるかのような“総マゾ”の状態は続いている。

「それでは、テープカットを宜しくお願いいたします！」

意気揚々なるMCの声が庁舎に響き渡る…この日、新たな自治体が誕生した。というより、そこは門出というよりは延長線上にすぎない。かつて“下新莊郡浦阪町”だったが、現在はお互いに隣同

士にして産業もほぼ合従連衡しあっている漁野市の一地域になった。そう、式典会場はいわずもがな旧・浦阪町役場：今日からは“漁野市役所 浦阪分庁”である。

人口にして約4.5万人と約1.2万人の2市町が1つの自治体となつて、人口は約5.7万人。地政学上の戦略観点も踏まえて、この合併は人口減少時代の影響をまともに喰らっているご当地としても、絶対に成功をアピールさせたかった。しかし、現実はそのうはいかなかった。

当初、旧・浦阪町は“平成の大合併”と通称されている第3次市町村再編の折に、自らの自治体が抱える比率にして巨額とも言える財政赤字をネックに、周囲の下新莊郡・上新莊郡各町村との合併実現の際に、真つ先に蚊帳の外にされるほどのひどい状況だった。何日経とうとも、その状況は改善どころか悪化の一途をたどるのみ。

県はこの浦阪町が外されている状態に業を煮やし、自ら再編の主導役たりえるように漁野市との2市町合併を間接的に打診する…：当時、そこまでの権限が県知事になかった以上、このようなギリギリの妥協手段しかなかったのだ。漁野市としても、浦阪町と同じく旧・下新莊郡にあつて地方の核たりえる存在を確固たるものにしたいたいと思惑があり、2市町の利害が一致して今日の状態に至った。編入合併につき、浦阪町はなくなって財政赤字対策に専念できるかと思いきや、漁野市側は早々にその善意を裏切られる形を思い知る。赤字額が公表されていた以上の額にのぼり、並大抵の対策では付け焼刃であることをデータで計上してきたのだ。

折りしも、その日は秋も深まつて浜風がいつそう冷たく感じるようになってきた。漁野市役所本庁舎の玄関には、全国紙から地方紙・週刊誌までそうそうたる大手メディアの記者たちが集結していた。

「岡村敦規市長が辞職か？」

小さな町が揺れる…昭和29（1954）年に市制が施行されるから、未だかつて1期・4年間のまっとうできなかった市長はいない漁野市で、初の事態が襲い掛かるうとしている。そして、そのメ

ディアの餌食たる岡村の心境とは如何なるものであつたらうか…入つていく市役所職員、そして市議会議員らにも容赦ないメディアスクラムが襲い掛かつてくる。そんな中に立たされ、市長室では岡村が苦悩している。

「ここまでの沙汰になろうとは…」

それもそのはず、岡村は今まで2期・8年間に渡つて市政で辣腕を振るいつづけてきた。漁野市で生まれ育ち、予備校や大学での空白の5年間を除いて漁野市とともに人生を歩んできた実直者にして、愛郷心の裏付けと呼ぶに相応しき行動派であつた。そして、現場を目で見てきた上で政策を常に考え、そして市議会との運営方法にも失策なく、時には対立を生みながらも信念をもつて取り組んできた。そして今は3期目に入り、市長就任から10年のときが経っている。10年間はなんだったのか、裏切りへの恨みは少なからずあるう。

「…浦阪にやられた、ということですか？」

入つてきたのは、市長公室長の諏訪智興…岡村が気がかりでならず、今日で2度目の市長室への入室だ。

「いや。そうではない、案ずるな」

「…隠さなくても宜しいですよ。私にだけでも、本音を」

諏訪がすかさず返す。

「人がよすぎる…笑っているだろうな、浦阪の連中は」

岡村の心はすでに憔悴しきつている…かつての行動派が、もはや見る影もなき体格の差だ。オーラも全くない…岡村を長年見てきた諏訪には、その岡村の憔悴ぶりを見逃すはずがなかった。

「浦阪はもちろん、県にも責任はあります」

「いや、責任転嫁はいかん。なにより、その悪意を読み取れなかった私の非が全てだ」

誰が悪い、それが悪い…そういうことを言い合う場が、岡村には苦手だった。そういう心を読み取って行動しないと、あとで自分に必ず返ってくる。市町村再編、特例債という甘い言葉の応酬に乗つた自分がそもそもの原因…そう考えてこそ、今の岡村の心境は少し

晴れることができる。

「…諏訪くん」

立ち上がった岡村は、そのまま窓へ向かい漁野の街並を眺めている。

「明日の午後3時、定例会見で見解と私のことについて語りたい…マスコミにはそう伝えてくれないか？」

悲愴な目を隠して、諏訪にこう話した岡村：言い終わりには、目頭が少し赤くなっていた。

「…はい」

岡村の覚悟をビシビシと感じた諏訪は、それに圧倒されるほかなかった。赤字の遠因は、再編に乗った自分が全てである…岡村の漢らしき背中、哀しき地方政治改革者としてのあまりに呆気ない幕引きであった。

東京：都心の一角に『日本新聞』と書かれた、小さなビル。社内がせわしくなっている。

「なに？…ああ。わかった」

なにやらビツクリした様相で電話に対応する1人の若い男：清水耕輔、この新聞社の政治部デスクにして若きジャーナリストのホープである。清水の仕事ぶりは、社内でも右に出るものはいないといわれるほどの現場主義者だといわれ、例えデスクであろうとも自らの見たものしか信用せず、また理詰めで文章をまとめて原稿を計上することを是としている信念がある。電話を切った清水は、すかさず部下を1人側へと呼び寄せた。

「深江！…こつち来い」

手招きを交えて、清水が呼んだ部下の1人：若い女性のようだ。

「…はい」

「お前、『はい』じゃねえだろ。なんだよ、この誤字・脱字だらけの記事はよー！」

さっそく、清水から説教を喰らう女：深江友璃子、入社2年目の

まだまだ新米の記者だ。

「…やっぱり、載せられませんか？」

「当たり前だ、こんなの載せられるかよバカヤロウ！…ったく、うちにや大手と違って校正担当とかいねえんだぞ。俺がいちいちチェックしなきゃ、記事の1つも書けねえのかよ！自分が責任もって最初から最後まで手作りの記事を読者に届ける…それがうちのモットーだってこと、お前も忘れたわけじゃねえだろ！」

「…すいません」

しよげる深江をよそに、乱暴に記事の原稿を放り投げる清水である。

「まあ、いいわ。呼んだのはさ、そんなんじゃないよ。お前さ、けっこういい記事は書くんだけどな…」

「ありがとうございます！」

一転して記事内容を褒められていると思った深江は、すかさず喜びを顔に出す。

「馬鹿、喜ぶとこじゃねえだろ。お前、俺と一緒に社主のところにこうか？」

突然の誘いに、今度は一気に顔をこわばらせる深江である。

「オイオイ、お前ってほんとに顔が正直に出るよなあ。馬鹿、セクハラとか考えてねえよ…うちの社主、そんな女たらしじゃねえのわかるだろ？」

「…すいません！」

深々とお辞儀する深江をよそに、さらに清水は続ける。

「実はさ、高知のとある小さな市が大騒動になってるんだとよ」

「…え？」

「あ、お前さ…ネットとか、テレビでもニュースとか見てねえだろ？」

まさに凶星、という感じの顔をまたも出す深江である。

「ともかくさ、うちからも一刻も早く高知に…と思ってたんだよ。こだけの話さ」



最後は、ぼそぼそ後えて深江にしか聞こえないように声を絞って清水は言った。

「え？」

「馬鹿、声でけえよ！…ま、今は下がつとけ」

そう言つて、深江を自分の席へと戻らせた。その姿を確認して、すぐさま清水は席を立ち上がる。

「はい、みんな聞いてくれ。ビッグニュースが垂れこまれたぞ！」

手を叩く仕草を見せて、気をひかせようと必死になる清水…深江はもちろん、その場にいる政治部の記者らは注目していた。

「高知の漁野つて市で、市長の岡村敦規が辞めるみたいだぞ」

一同、その空気をひんやりとさせる。

「その市はな、未だかつて任期満了を果たしてない市長はいなかったんだ。岡村も前に2期連続、任期を全うしてた。なにがあつたか、俺にもさつぱりわからねえ。岡村が失態を犯したか、そんなのも全く不透明だ。でもな、ここをチャンスだと思わねえでいつチャンスが来るんだ？…そう思わねえか！」

さらに清水は声を上げて、話を続ける。

「俺、今から社室室に行つて高知へ記者を1人送りたいと思つてることを告げに行つてくるわ」

まさか、その1人とは…深江なのか。とうの深江は、もはやどきまぎとした心境が支配しており、それどころではない。

「深江！…行くぞ」

いきなり深江の側に寄つて、肩を叩いて促す清水。どきつとするも、すつくと席を立って清水についていくほかなかった。

『日本新聞』社室室…ノックの音が聞こえてきた。

「…失礼します」

社室室の声を聞くまでもなく、入ってきた1人の男…清水だ。

「どうした？」

「折り入った話がありました…」

社主を相手に、ざつくばらんに話す清水…その姿に、深江はビツクリするほかなかった。

(社主って若かったんだ…しかも、デスクと何の関係なんだろう?)  
そう思うぐらい、清水と仲がよい友達感覚に見える社主・村井典道は、清水ともどもこの新聞社を発起した1人である。日本の新しいメディアを築くと意気込む、新聞業界のベンチャー企業…それが今の『日本新聞』の実態である。

「で、耕輔…折り入った話ってなんだ?」  
「実はですね…」

高知県漁野市の市長辞任をめぐる騒動を、村井社主に相談する清水がそこにいた。

「で、漁野に記者を張り付かせるってえのか?」

「うってつけのヤツが1人…」

そういって、深江を指差す清水。

「まさか、彼女を高知に?」

「…ええ。止めても無駄ですよ…本気「マジ」ですから、俺は」

こうなると、清水を止められない…あっさりと村井は折れて、深江に辞令を交付することを決めた。

「深江友璃子…明日付けにて、高知支局政治部への異動を命ずるものなり」

「…え?」

辞令を交付されるや、明日付けとは想定外だと言わんばかりの深江の表情だった。

「そういうこと。さっさと荷物をまとめて、高知に行く準備しろ」

清水は、またも深江の方をポンと叩く。

(そんなこと言われても、高知なんて…)

深江はただただ、戸惑うほか道がなかった。

翌日、深江は高知に向かっていて、すでに到着していなければならぬのだが、まだ着いていなかった。残酷にも時は過ぎ、午後3

時をさしていく。その時間は市長の定例記者会見の時間にあたる…。それはすなわち、岡村市政の終幕を意味する。それを悟っていた記者たちがこぞって、市役所本庁舎へと駆け込んでくる。

「本日をもって、辞表を市議会議長宛に提出いたしました。その旨、ご報告いたします」

ついに岡村は辞意を表明したことになる…。多くのフラッシュがたかれる、記者会見場である。漁野市の市制施行後の歴史において、初めて人気をまっとうできなかった市長となった岡村の無念さは如何ばかりか。その記者会見場にも、深江の姿はどこを探してもいなかった。午後4時を過ぎて、やっとの思いで深江は高知に入ることができた。

「号外です！」

地元新聞の号外がさっそく配られている…。記者会見終了後、すぐさま対応したことで配ることが可能なのだ。

「…え？」

遅かった…。後悔しても、もうどうにもならない。一步も二歩も出遅れた…。深江は焦って、携帯電話を取り出した。

(デスク、出ないかなあ…)

その電話に、すぐさま清水が対応してくる。

「おう、どうよ?…岡村は」

「…辞める、とのことですよ」

憔悴しきった表情で答える深江…。しかも、片手に号外を見たまま。「とのこと、つてお前…記者会見を見たんじゃないかねえのかよ?」

「間に合いませんでした…」

「ったく、なにやってたんだよバカヤロウ!一步も二歩も出遅れちゃったぞ、まあいいけどな。ここから先は俺たちの得意分野だ…岡村敦規を徹底的に調べ上げる。周囲のコネとか、寄ってきやがった野郎どもとか…ほかには黒幕とかよ。絶対に何かあるぜ、この辞任劇はよ。いいか、頼んだぞ…社主に頼んだ手前なんだからな」

そう言って、慌しそうちに電話を切った清水…ますます深江は焦っ

てしまう。

「それ以前に、高知支局は一体どこにあるのよオ~~~~~!」

時を同じくして、深江の側を通っていた1人の男がいた。漁野市議員、桑島庸介。最年少当選記録・新人最多得票記録を塗り替えての堂々たる初当選を果たした、漁野市議会の期待のホープである。深江の大声に、一瞬にして凍りついた桑島。

「…何？」

桑島と深江の出会い、それはまさに最悪の形であった。お互いに「誰だよ、こいつ」

という印象を与えるほかないものであったから。

「あなた、高知に来たの初めて？」

「え、ま、まあ…」

事情を話せないまま、深江は黙って桑島のペースに流されるほかなかった。

「待ってる、宿ねえだろ。俺、車とってくるわ」

そう言って、桑島は鍵を取り出してその場を去っていく。また、どうしようもない焦燥が深江を襲う。

(なんなのよ、あいつ)

全くもって、無礼にも映りかねない桑島の態度。しかし、そうこうしているうちにあつという間のことだった。“ホンダ・クロスロード20X”で颯爽と桑島が現れる。

「…乗りなよ」

何のためらいもなく、車に載せようとする桑島の態度に深江は半信半疑になるほかなかった。

「おい、いやらしいことなんて考えちゃいねえよ。俺んちに案内する、つつつてんの!」

きつく言われ、言われるがままに車に乗り込むほかない深江であった。

車中…西へ、さらに西へと車は進んでいく。沈黙を破ったのは、桑島である。

「あ、そういえばさ…あんた、高知支局がどうか叫んでなかったっけ?」

「あ!は、はい…」

「もしかしてさ、どっかの新聞記者?」

「…はい」

「どこ?」

そう言われると、偶然にも赤信号で停止中であるがゆえに深江は躊躇なく自らの名刺を桑島に渡す。

「…日本新聞?聞いたことねえぞ」

あっさり、桑島が答える。もしかすると、高知支局というのはどこにあるのかわからないままだというのか?

「あるとかないとか以前だろ…あんた1人、つてこと。あ、それとさ…その号外、岡村市長が辞めたとかだろ?わかるぜ、それであんたがその新聞の代表で高知に送り込まれた、つてわけだろ?」

桑島の問答に、深江はひたすら頷くほかなかった。

「おそらくさ、岡村のこと調べても意味ねえと思うぞ。あの人、あそこで言ったのは本当のことが多いと思う…言い振りがまさにそれだったしな」

「え?じゃあ、どうすれば…」

「どうするつたつて…あんた、市長が辞めるつてことは次に何があるよ?」

「…選挙?」

「そう、市長選。そのことしか、ネタになるもんがねえだろ?」

「岡村さんは出るんですか?」

「岡村が出るわけねえだろ。出るとすれば、岡村の後継を名乗って出てくるヤツ。それと共産党系…まあ、二者択一つてことだな。こんなところじゃ、変なのが出てくることはまずありえねえしな」

「…変なの?」

「俗に言う“泡沫候補”「ホウマツ」」、つてとこ。あんた、政治部の記者のくせしてそんなのも知らねえの？」

こんな問答を繰り返しているうち、車は桑島の事務所 兼 自宅に着いた。その先にある、桑島事務所の看板を見て深江はビックリした。

「い、漁野？」

「…ああ。漁野」

「…え？ウソツ！」

「嘘も何も、あんたのほっぺ抓ってやるうか？…漁野市議会議員、桑島庸介つてんだ。宜しく」

桑島のおっけらかんとした態度に、ただただ深江は呆気に取られっぱなしだった。清水が言っていた、話題の地・漁野市…わけもわからず、場所も何も把握できていないまま、深江はあっさりと入ることができたのである。

「…なにボーツとしてんだよ。宿ねえんだろ？…入れよ」

桑島に促され、そのまま深江は大きな荷物を抱えて桑島の事務所へと入っていく。

「…1人だけなんですか？秘書さんとか…」

「いたつて、煩わしいわ鬱陶しいわ…邪魔なだけだよ。他人「ヒト」に俺をPRさせられる、つてのがどうも苦手だな」

あっさりと、淡々と答える桑島。呆気にとられるほか、深江はとるべき手段がなかった。

「それにさ、秘書つて…高知市とか県ぐらいでなきや、一辺倒野郎の俺にやそれ以前にそんな金ねえよ」

付け加える桑島…給与体系は、市議会との対立劇も多少あったのだが大幅に見直された。岡村市政の実績の1つである。

「あ、テナントなら漁野の駅前まで行かねえと見つからない。あんた、しばらく漁野「ここ」に留まったほうが取材しやすいだろ？」

「…あ、そうですね」

呆気にとられるほかない、相変わらずな深江の表情：桑島は、見ることもなく冷蔵庫を開けて、大きなペットボトルに入ったミネラルウォーターを豪快に飲み干している。

「荷物、邪魔だろ？…ここに置いてけよ。駅前まで連れてってやるからさ」

桑島が鍵を取り出し、また事務所を出て車を取り出してきた。このまま居候は嫌だという深江の心理を見事に見透かしていた…桑島の頭内には、なにやら人の深層心理をいとも簡単に読み取れるものがあるのか、それとも単に深江が正直に顔へとその心理を見せてしまっただけなのか、ともかく桑島は市議会議員と呼ぶには得体の知れないものが宿っているオーラを感じる。

桑島の事務所から車で行くこと5分：わずかなドライブで、市のセンター街である高知旅客鉄道（KR）・本線『漁野』駅前に着く。現況は全く異なり、センター街ではあるものの寂れているのは誰の目にも明らかで、市役所本庁舎の位置関係もあつて現在は同線内にある一駅前の『新漁野』駅前のほうが栄えているのが、漁野市の抱えている産業空洞の現状である。いわば、2つの異種異風のセンター街を抱えて対立劇も煽らんとする状況を追認してきたに等しい岡村市政に反旗を抱かれても、何ら不思議のない内部対立である。「この不動産屋なんてどうだ？…俺のアパートもここで決めただ」

そう言われて、駅前商店街内にあつて駅からもすぐに位置する不動産屋を指差した桑島についていく深江：アパートじゃなくて、テナントなんだつてば。深江は文句の1つも言いたいのだが、なにせ漁野は全くわからないので仕方なく桑島の腰巾着の如くついていくのであった。

「お、いらつしやい…桑島くんじゃないか。珍しいな…これ？」

不動産屋の主が、小指を立てて桑島に話し掛ける。

「そんなんじゃないやしません！」

「怒った顔が可愛らしい、いじらしいっていつのかな？」

「…セクハラで訴えますよ」

思わず顔をむくれさせさせる深江…勝手に見ず知らずに等しい初見の男を彼氏呼ばわりされて、黙っていられないのが本音だろう。

「悪い悪い。で、その彼女の宿だろ？…要件は」

「おやつさんもわかるねえ。兼ねて、テナントも所望だつてよ」

すかさず桑島が、主にざつくばらん話し掛けた。アパート紹介時より、その仲はまるで父子関係のようなものである。

「…テナント？」

「この子、新聞記者なんだとよ。聞いたことねえとこだけど、1人で取材しなきゃならねえみてえだぜ」

「…偉いねえ。やっぱ、市長さんが辞めるってことを聞いて？」

「…だよな？」

顔をすぐに深江へと向ける桑島…深江も、桑島に目線を合わせて頷く。

「偉い！…格安のテナントを紹介してあげるよ。で、どこの新聞なんだ？」

「日本新聞…」

主の質問にすぐ答える深江…申し訳なさが、ぼそぼそ声ではあるが。

「…え、清水耕輔のいるところ？」

「デスクです…」

「清水耕輔？…あの若い、一匹狼みてえな理詰め論客の？」

桑島も思わず口を挟む。新聞の名は忘れていても、清水のインパクトが離れられないらしい。

「ああ、あの清水耕輔のねえ…あの切れ味あるテレビ討論、忘れられねえよな！」

「そうそう、忘れられねえよな」

清水の話題は、漁野でももちつきりになるほどの衝撃を与えていた…内心、深江には複雑なよう嬉しきことでもあるが。現に、日



本新聞のEースであって屋台骨も同然の清水の現状をふまえると当然の評価ではあるが。

「あ、それはそうと…テナントだったよな？ここなんてどう？」

主はさっそく、格安の物件をさっそく紹介してくれた。

「…すごい！…安ーい！」

「な！おっちゃん、サービスしちゃう！」

と、家賃の欄をいきなりマジックペンで消して、金額を変えた。

「おいおい、鼻の下が伸びまくってるぞ」

「いいじゃねえかよ。ま、これでどう？…住居もばっちり！」

所望の物件を一発で探し当てる、さすがは脱サラして漁野市内の不動産を扱って30年のベテランである。深江は、迷うことなくその物件に一発サインを済ませる。

「おい、あんたもいきなりサインかよ！」

桑島が、今度は呆気にとられてしまい、思わず突っ込む。

「思い立ったら吉日、っていうじゃないですか。時間ありませんから」

「時間ない、ってあんた…」

「桑島さん、事務所に戻りましょ。荷物をこっちに移しますから」

「…おい待てよ、あんた運転できねえだろ！」

嫌々そうに、桑島は鍵を取り出して鳴らしながら車へと向かう。

そうこうしているうちに、深江の引越しは桑島を巻き込んで何とかその日の夕方…間もなく、日が暮れる段階になって完了することができた。

「ありがとうございました！」

深々とお辞儀を済ませ、桑島に礼を尽くす深江。そして、さらに続ける。

「あ、晩ご飯とか…一緒にどうですか？」

「…俺？別にいいぜ、いつも1人だからさ。商店街の中にさ、美味

い店いっぱい知ってたんだ。ついてくか？」

「…はい！」

あっさりと了承する桑島と深江の2人。善は急げ、といわんばかりに2人はその足で漁野駅前商店街に向かう。桑島についていく深江は、心なら頭の気持ちもあつて気分が躍っている。

「宿決まって、ほつとしてるみてえだな。ま、あんたの場合は明日から大変だけどさ」

「いえ、全然気にしていません。頑張りますよ！」

大きな仕事や記事に際し、気合を増して挑む積極的な性格が清水の白羽の矢に止まったのだらう。桑島はそれを言うまいと思つて、無言で先導をしていく。

「…お、ここがいい？」

「全然。気になさらずに」

とある大衆食堂のような雰囲気を出す、老舗のオーラを見せる店が1軒立っていた。自動ではないドアを、片手でガラガラと開けて店内へと入っていく2人。

「おばちゃん、いつもの頼むわ…2人前」

手でピースサインを交えて、桑島は深江を誘導して席へと座らせる。

「築50年、味そのまま。役所時代から、ずっと世話になってんだよな…昼飯時なんて、走って来てたんだぜ」

桑島はかつて、漁野市役所で働いていた過去があり、それ以来の好といったところ。雑談に明け暮れ、お互いに盛り上がっていたところに、ちょうどいい感じに仕上がった定食2人前が、2人のテーブルのところに持ってこられた。

「はい、どうぞ」

食堂の“おばちゃん”こと、中村初枝：今年を持って齡・77とは思えぬ達人ぶりである。

「…ありがとうございます」

「お姉さん、観光？」

「…いえ、仕事です」

「仕事？…珍しいねえ。何やってんの？」

「…こういう仕事してます！」

そういつて、名詞をまたもとりだして初枝に渡す深江。

「おい、渡さなくてもいいだろ！」

「いいじゃないですか。これからお世話になるかもしれないのに…」  
すると、ガラガラとドアの音が響いて一人の二枚目な男がポスト  
ンバッグを片手に担いで現れてきた。

「いらっしやい」

「ここでもいいですか？」

男は、ポストンバッグを傍らに下ろして席につく。

「これと…あと、これもお願いします」

「かしこまりました」

初枝は淡々とメニューをとって、厨房へと向かう。

「…気にすんな。折角の飯が冷めちまうぞ」

「あ、そうですね。いただきます」

男に構うことなく、桑島と深江は定食を口にします。男の分は、

定食ではないために早くも用意ができ上がっていた。

「はい、どうぞ」

「…あんた、それだけじゃ足りねえぞ。夏と違って、夜は長いんだ  
からよ」

めいつぱいほおばりながら、桑島は男に話を振ってくる。

「僕の場合、これで十分なんですよ」

「やけに他人行儀じゃねえの？…改まる必要なんてナッシング！」

親指を力強く立てて、男に精一杯話を振ろうとしている。

「…政治家は行動も言葉も慎まなければ、足もとをすくわれますよ  
「なに？」

なぜ、政治家だとわかったのか？…男の素性を無性に探りたくな  
ったのか、桑島がほおばりながら立ち上がって男の近くに寄って  
くる。いったい、何者だというのか？

「…申し遅れました。名刺交換でもどうですか？」

いきなり名刺交換だと？…何を考えているのか、ともかく名刺を交互に交換する。男の名刺を見た瞬間、桑島は一瞬だけ体を硬直させた。

「…桑島さん？」

深江が不思議に思い、桑島の側に寄る。思わず、そこで桑島は正気に戻っていく。

「あ、悪い。これ、あんたも貰いなよ。もう一枚あるだろ？」

「…ええ。どうぞ」

桑島の問いにすかさず答え、それに応じるかのごとく深江にも名刺を躊躇なく渡す。深江もまた、名刺に凝視している。

「…黎明党？」

「聞いたことないねえ…」

初枝も、深江がポロツと言った“黎明党”という言葉に反応する。「あんた、つくづく政治部の新聞記者として勉強不足だな。ま、そりゃよほどじゃねえと黎明党「ここ」を知らないのも無理はないんだけどさ…選挙ごとに出るとかとか言って公募者を募っておきながら、選挙に出たことは1度もない。もちろん、夏にあつた参院選も同じことを繰り返した」

「…何が言いたいんですか？」

「おい、幹部の1人ならなんか言わねえとな…釈明とかよ。おう、政調会長の横谷佳彦さん？」

“横谷”と呼ばれた男は、徐々ににこやかな表情の内心に動揺を見せるかのごとく語気を少し荒げる。

「…だから、意図が読めないんです。一言一句、言いたいことを全て吐き出してもらわないと回答できません」

「答えは簡単だ。単刀直入に言うぜ…あんたらは“チキン”ってことさ。そのチキン野郎の一味が、漁野にいつたい何の用だよ？」

桑島は、国会に議席を持たない全国型政党（厳密には、公職選挙法第86条の規定を満たさないので“政治団体”が正式な表現では

あるが）を“底辺政党”と名付けて、彼らの政策や構造・党内体質などを人脈をフルに活躍して常に情報収集をしている。黎明党もその1つで、他のどのような政党にもない政策を掲げているが、その政策があまりにも苛烈で売国的なものだと映った桑島は、明確に敵意をインターネット上で表明している。選挙にいつまで経っても出ないで、公募者に手を汚させて幹部は手を汚さずに隠れとおす“チキン野郎”と呼ばわれても、周囲では何ら不思議はない。桑島はここに絶対的な自信を持っている。

「何も見ないで、組織を“チキン”とは笑止千万…そういう貴方こそ、僕には“チキン”ですよ」

「売り言葉に買い言葉、つてのはテメエのためにあるみてえだな。本性を馬脚しやがったか…リアルでもよ」

思わず食って掛かりそうな桑島だったが、察したのか横谷はすつくと立ち上がり、代金を持って初枝に直接渡して、そのままポストンバッグを担いで帰ろうとする。

「…断っておくが、出直しとなる今回の漁野市長選に黎明党は公認候補を立てて参戦することが決まりました」

「信じられねえな。またそう言つて、出ねえ気じゃねえだろうな？…ま、あんたらみてえなのが出ても出なくても結果は一緒だ。あんたらの当選確率なんて、限りなく0だ…俺のここにたっぷりと貯まっているデータじゃ、どうひっくり返つても逆転ホームランはないぜ」

帰り様の横谷に、目一杯の皮肉を返す桑島…いや、皮肉というより怒りもかなり混じっている。桑島は、人差し指で頭を指しながら言った。

「興奮しないほうが身のためですね。また議場で会いましょう…」  
手を挙げて、横谷は食堂を出た。実は、問答の前に完食していた…空になった皿や椀が目立つ。桑島はじっとその横谷の後姿に見入るほかなかった。

市制施行後50年以上の歴史の中で、初めてのこととなる”出直し”漁野市長選は間もなく告示される運びとなった。

有言実行とでも言うのか、市議会議員の大物らの斡旋もあってか前市政の後継を謳う者あり、そして野党として一貫して前市政の路線と戦いつづけてきた共産党系の候補者もあり、今はこの2人だけなのだが、桑島はまだ引つ掛かっていた。

(あの目つき、あれ見ちまうとな…本気「マジ」で出る気か?…勝ち目0だぞ、出てくるはずがねえよ)

新市政は、果たして誰の手によって担われるのか?…前代未聞の醜悪な選挙戦が、これから始まる漁野市政の混乱の序章にすぎないことを桑島をはじめとして、誰も全く気づく様子はなかった。

「2話へ続く…」

## 南国動乱（後書き）

テーマはズバリ、“地方再生”です。

国から力学的にトップダウンで変えていくのではなく、この時代に求められるのは地方自治体をはじめ住人たちの底力…これらを併せもって、化学反応を起こしてボトムアップ型での変貌を遂げねばならないと思っています。

その思いをふんだんに凝縮させ、かつ都道府県や市町村が抱える財政赤字体質に対し、如何なる手段が必要か…そして、選挙によって選ぶ都道府県知事・市町村長や各議員を如何様に見て、かつチェック機能を充実・強化していくのか、数々抱える課題への本質と解決策を見出せてくれればと思っています。

要は、“応用社会派”であって硬派な“政治ドラマ”という位置付けです。

今回は初回ですから、まだまだメインキャストの顔見世（とはいえ、横谷は最後の最後にちょこつとだけ出たのみの単なるミス터리アス野郎だけどね。ノ笑）とこれから始まる大動乱の序章に過ぎない内容なのですが、内容の苛烈さと皮肉はたつぷりとこめたと自負しております。

漁野市が抱える財政赤字の根もと、そして初の出直しとなる市長選の動向、そして桑島ら市議会議員も選挙の動向を巡って離合集散を繰り返していく攻防劇、また深江の記者魂など第2話以後に大いに伏線を張らしてみました。まあ、張らせなければダメなんですけどね…本当は（笑）。

あと、参考文献は現在のところ1冊だけなんですけど、私自身としてはあと何冊か

「これだ！」

という本を探して購入して、読みながら展開させていきたいと考えています。

のみならず、感想を書かれる際やメールでの感想投稿の際に推薦できる本があるという方は、随時受け付けておりますので宜しくお願ひします。

最後に…桑島 vs 横谷の1stラウンドのときに流れるBGMは『The Force of Gravity』（『ライアー・ゲーム』オリジナルサントラの#3に収録されています）がイメージですね。

漁野市の前市長・岡村敦規<おかむら・あつのり>役には竜雷太さん、漁野市役所市長公室長・諏訪智興<すわ・ともおき>役には近藤芳正さんをイメージしました。

岡村役に竜雷太さんはもったいないかなあ？…再登場もあるかもしれません。



## 奇怪前哨（前書き）

出直し市長選、それは数多の陰謀と野望が支配する魔物との終わりのなき心理戦である…いざ、中土佐・秋の陣へ！

## 奇怪前哨

岡村敦規が市長を辞職した…漁野市の合併に尽力するも、騙された赤字を背負わされたようなものだから。しかし、まるで対策を考えていなかったのか、万策の尽きた無力感に支配されたのか、ともかく岡村の市長辞職は“逃げ”とも捉えられて不思議はない。

俄かに慌しくなる周辺…否が応にも、市長の空位は赦されない。

“出直し” 漁野市長選は公示される前なのに、まるで公示されたかのごとく熱が籠っている。

「…ったく」

ここは桑島の事務所 兼 自宅…苛立っているのか、テレビを消してむべにリモコンを放る。

「騒がしくなりましたね」

「…いい迷惑だぜ、こつちにゃ」

桑島はこのところ、歩けば歩くほど取材を受ける…漁野市議会議員の1人として、いったい岡村前市政をどう見ていたのかとか、市長選への態度表明はまだなのかとか、ともかく桑島からすると雑音ばかりが耳に入ってしまう。記者の1人として、深江もその無節操な行動の数々を桑島が受けていることに、決して他人事ではいられない。

「…横谷さんはどうなるんでしょうか？」

「馬鹿、いちいちあんな野郎に“さん”付けしなくていいんだよ。

まあ連中が万一にも出てきたって、何もできねえで最下位落選は確実…それも、ぶつちぎりだな」

横谷佳彦…あの後の動向がどうにも気になる。素っ気無くあしらっている桑島だが、実は彼とてその後のことが気になってしかたがない。いや、食堂をあの不敵な笑みを浮かべた顔をして去っていったのが気になるのだ。まさか、本気で市長選に挑むのではないかと。

「興奮しないほうが身のためですね。また議場で会いましょう…」  
この横谷の一見は捨て台詞ともいえよう言葉が、未だに脳内にこびりついている。

「ちよつと出かけてくらあ。あんたも、俺にばっか腰巾着みてえに引っ付いてつとハイエナどもに狙われるぜ」

何かを思い立ったかのごとく、すつくと立ち上がってドアを開けて外に出ようとする桑島…マイカー“ホンダ・クロスロード 20X”のもとへ駆け寄り、ドアの鍵を開けようとした矢先…幾人かの報道記者らが、桑島を瞬く間に取り囲んだ。

「今回の騒動の件に関して一言！」

「岡村市長の意図を聞かせてください！」

次々と質問を浴びせる記者たち…桑島の気持ちなど、全くもって無視だ。これこそ“メディアスクラム”と呼ばれる、昨今のメディアが抱える倫理問題であるといわれる一端である。

「あのお、岡村の意図なんて俺に聞いてどうするの？」

素っ気無く桑島が返し、そのまま車に乗り込もうとするがそうは問屋が卸さない。

「市長選、桑島議員が出るとの情報もありますよ！」

さすがに、桑島はその質問を投げかけた記者の前に寄りかかる…そのときの形相は、まるで鬼神が宿ったかのごとく。

「馬鹿か？…そんなデマ、真に受けてんじゃねえよ」

「…デマだと断言されるからにはここで宣言してください！」

ますます桑島は顔を不機嫌にさせる。いったい何様なのか、最近の報道記者というのは。自分の意見がそのまま、国民や住人の意見や要望であるなどと思いが上がっていると思えない、横柄なものの言い方だ。

「俺は、市長選なんて出る気はない。100%…いや、150%以上の確率でな」

「…」

本当に宣言するとは思わず、きょとんとする記者たち。無駄な問

答など、今はしている余裕はない。そのまま車に乗り込み、颯爽とその場を去っていった。

「どうかお願いします！漁野市を救う力を、私にください！」

桑島が車で走っていると、浦阪との境目にあたる海岸線まで出てきた…そのさなか、海岸線を自転車で走って地声を張る1人の男と出会う。

（あれは…）

男の名は米田幹雄：共産党所属、前・漁野市議会議員。もともと漁野市における共産党の勢力は決して強いわけではなく、議会において18人中たった2人のうちの1人であったが、桑島が初当選した前回の選挙で惜敗して議席を失ってしまった。今は古巣も同然の漁野民主商工会（民商いさりの）のメンバーとしての活動をしている。思わぬ形での選挙：“出直し”漁野市長選への出馬を予定している行動である。

（米田か…共産党系ね。あとはもう1人…）

岡村前市政の後継を名乗る候補が出てきてもよからう…これで2人、駒があつという間に揃う。すると、ふと桑島の頭内に横谷の顔がよぎった。ふつとブレーキを踏んでしまう…車は何もない場所で急停車した。

（なんで、俺があんな野郎のことを…）

我に返ろうと、車を降りて砂浜へとへたり込む桑島だった…するとそこに人影が近づいてくる。

（誰だ！）

…なんと、横谷ではないか。その姿を見て、桑島は思わず身構える。

「…奇遇ですね」

しれっとしたような微笑を浮かべて、横谷は桑島の隣に座り込んだ。桑島は、ただ顔を強ばらせるほかなかった。

（横谷佳彦…）

「なにを身構える必要があるんですか？…僕は何もしませんよ」  
「…」

横谷の顔を見たくないのか、桑島は顔を反対の方向へそむける…  
無言のまま、2人の間には冷たい空気が支配されていく。

「…帰ったんじゃねえのかよ？」

「どうして帰る必要があるんですか？」

「ほんとにああ言えばこういうんだな、あんた」

すると、横谷はポストンバッグの口を開けて1枚の紙きれを取り出した。

「…これですから、僕は帰るわけにはいかない」

なんと、それは公認状であった…『右、公認する』とあり、その公認候補を送り込むといった張本人である横谷が自ら市長選に出馬するのだという。

「…なに考えてんだよ。そんなの人前で見せるもんか？」

常識なら、そんなことはまずしない。“第三候補” 気取り、とでもいうのか。ともかく、相も変わらない横谷の態度に次第に桑島は不機嫌になっていく。

「未常識の世界を導入することこそ、今の窮状を救う最大の手法なんです」

「…未常識、なんて言葉ねえよ。非常識の間違いじゃねえの？」

同じような言葉を、どこかのカルト団体が言っていたようなことをふと桑島は思い出す。横谷は相変わらず、横で微笑を浮かべたままだ…その横谷の顔を見たくない桑島は、すつくと起き上がった車のもとへ戻ろうとする。

「3人目の駒はここにいますよ…お忘れなく」

「…ああ」

横谷の問いかけに振り向くことなく、海岸をあとにする桑島であった…“出直し” 漁野市長選の公示は近い。

漁野市内の各地を、工具を持ちながらせわしく回る市役所職員ら

…もとい、市選挙管理委員会の人たち。そう、“出直し”漁野市長選の公示日まであと3日と迫っている。市内の学校や主要公共施設、公民館、漁協など各地にはポスター掲示場が次々と建てられていく。『日本新聞 高知支局』と手書きされた立て看板：テナント 兼 住宅といえる物件、中では懸命に記事を書く深江がそこにいた。漁野市長選の特集記事を編集しているのであった…誰かが読んでくれる。そう思うと、深江は一層の気合を文字の1つずつに込めて書いていく。

「よし、できた！」

そして、プリントアウトしてもう1度読み直す…“誤字・脱字の女王”返上も兼ねているのだ。すると、携帯電話が鳴る…発信主は、やはり清水耕輔だった。

「はい」

「おお、どうだ？…高知は」

「どうもごうも…今は忙しいんですよ」

「はは、わかってるよ。漁野市長選、もうじき公示なんだってな。

お前のことだ、特集記事でも書いてみんなに読んでもらおうと思っただら？」

さすがに清水、心理はあっさり透かされてしまった。

「ちゃんと立候補予定者の全員分、書いたんだろな？」

「ばっちりです！…ちゃんと、公平に取材してきました！」

「…頼むぜ。日本新聞「ウチ」は分け隔てなくどんな候補でも公平に取り上げる、つてのが社訓だからな。それ破ったら、社主にどやされるどころじゃすまねえんだぞ」

清水は政治評論家の顔ももっているがゆえ、選挙事情にも詳しい…そして、選挙による大手メディアの報道姿勢にも疑問を通り越して憤慨したこともある。

「あ、でもな…やっぱ、特集記事を載せなかったら公示日当日なんてどうだ？…前後に出すと、どうも厄介なことになりそうなんだよ。いいか？…頼むぜ」

そう言って、せわしく一方的に電話を切る清水…デスクとして、評論家としての顔を掛け持ちしているがゆえ、深江を心配したくてもできないのが実情だ。

公示日が前日に迫り、深江は相も変わらぬ地道な取材を始めようとしていた…いつものとおり、漁野駅前のコンビニに立ち寄って昼食を調達する。すると、目に止まる1つの新聞があった。

「…市長選特集？」

それは、日本新聞を発起した社主・村井が激しく敵意を抱いている我が国の最大手新聞・毎朝新聞の朝刊である。このご時世、コンビニでも容易に手に入れられるとは考えモノではあるが、取材費と割り切って深江は何のためらいもなくそれを1部とってレジにいた店員に昼食用のおにぎりやお茶などと一緒に渡した。代金を払い、コンビニを出るやすぐに見ようとした瞬間…1台の車が駅前に現れた。“ホンダ・クロスロード 20X”、そう…桑島だ。

「今日も取材でかけまわんのか？…だったら、乗っていきなよ」

「あ、桑島さん！…いつもすいません」

桑島もまた、市議会議員の有志の集まりに急遽呼び出されたがゆえ…そのついででもある。市長選に関して、態度を聞かれるのである。桑島の態度は、もうとっくに決まっている…単騎、自主投票。但し、彼の選択肢に横谷は微塵もない。

「…それ、毎朝新聞か？市長選特集だつてな」

深江が手に取っていた新聞に気づいた桑島…さらに桑島は続ける。

「どうせ、その中にや2人しか書かれてねえよ」

「…わかるんですか？」

「…どんな馬鹿でもわかるよ」

毎朝新聞は、新聞メディアとして最大手であることを鼻にかけて、選挙報道に関しても自分たちのルールを法務省の官僚らと共謀して数々の悪事を働いてきた…それは今でも全く変わらない。若きジャーナリストら、特に清水と村井はその巨悪たる組織に敢然と戦いを

申し入れている状態が、近年の新聞業界の構図だ。なぜ清水も村井も、毎朝新聞にだけは極端に敵意を示すのか…まだまだ未熟者の深江には、それが未だ理解できないでいた。

「ま、どうせあんたのことだ。横谷も取材してんだろ？」

「…はい」

「どうせ出たつて勝ち目はねえんだ。好きにさせてやりやいいんじやねえの？…あ、でもあんたが先に特集記事載せてたら、こうはなつてなかったかもな」

そう言つて、コックピット上で笑い飛ばす桑島…なるほど、清水が当日まで記事を書けるなどといった理由が深江にはやつとわかつた。「なんでもな、毎朝は1番じゃなきゃ気がすまねえ…つてとこ。で、横谷は事務所をどこに構えてんだよ？」

「ここです」

そう言つて、地図らしき紙切れを渡す。その位置に、桑島はビツクリして思わず車を路肩に止める。

「…馬鹿じゃねえの？浦阪の、それも奥土佐村に寄つてる境目のとこじゃねえか！」

漁野市浦阪町赤邑…もう少し北へ上つていくと、上新莊郡奥土佐村に出てくる。そんなとこに事務所を置くなど、前代未聞の話だ。普通ならありえないことをなぜ平然と横谷はやってのけるのか、未だに桑島にはわからないでいた。

「“奥土佐村”というところと合併する、ということですか？」

「いや、それはないね。浦阪の比じゃねえよ…あそこの赤字体質はあんなとこ吸収しちまつたら、完全にオダブツだぞ」

そうこうしているうちに、浦阪との境目にあたる市立南公民館へと車が入っていった。

「あんた、そこで待つててくんねえか？…すぐ済むと思うんだ。それからでもいいだろ？」

そう言つて、車から降りる桑島…颯爽と市章バッジを見せて、中へと入つていく。その中には数々の老齡な男、女が次々と消えてい



く…全員、漁野市議会議員である。5、6人ほどといったところか。  
(いったい、何するんだろ?)

市議会議員同士でいたい、なにを語り合うというのか。桑島が呼ばれそうな感じの人らには、深江には見えなかった。

公民館の小会議室…桑島をはじめ、市議会議員の有志はここに集まっていた。

「であるからして、今回の市長選だが…」

口をあけた1人の高齢議員の男…最も高齢で、“長老”と恐れられる議長を経験した原幸治である。原は齢からは想像もできない健康ぶりで、饒舌が冴え渡る。

「そこでだが、この方針を各会派に持ち帰ってもらいたい…」

「でもさ、俺は会派にすら所属してないっすよ」

すかさず桑島が突っ込む。しかも、この集まりに呼ばれていない議員もいる。どういうことか?

「ま、君にも念を押ししておきたいってことじゃ…桑島君」

「貴方に念を押しされるまでもない。間違った投票行動なんて、俺はしませんよ」

桑島の答えをさらっと流して、毎朝新聞の特集記事の即興コピーを各自に配っていく原…やはり、候補者は2人しかいないかのような記事内容だった。

「答えはわかるよな?…横田寿彦君、そして敵とはいえ議会の一員だった米田幹雄君」

横田寿彦…横谷佳彦と語呂が似ている。桑島の目つきが若干変わった。

「ワシんところは、横田君を推しますよ!」

「あたしんところも!」

次々と有志らは、横田への支持を表明する。得意げな顔を見せる原は、さらに続ける。

「さらに民自党のセンセイ方も明日、さっそくながら応援に駆けつ

けるそうだ。明日は頼むよ、じゃあ解散！」

会合はわずか10分となかった。民自党の連中？もしや、何を考えているのか？それほど重要な選挙とも思えない。露骨な利権選挙の匂いがしてきた。

「待たせたな。行こうぜ」

コックピットに颯爽と乗り込んだ桑島。傍らの深江は、すっかり夢の中のようだ。

「行くぜ。横谷んとこ」

気持ちよさげな眠りの中にいた深江を、無理矢理に現実世界へと引き戻すかのごとく小突く桑島。ここから浦阪の北部にあたる赤邑地区にある横谷の事務所へ向かうには、桑島の車は必要なものである。

「眠りこけてると、途中で放り出さず」

車は所構わず、山道をひたすら走る。そして浦阪町赤邑、その地区へと着く。人も殆どいなさそうな、そんな静けさが残る街並に事務所を立てる横谷の心理は、未だもって2人にはわからない。

「遠路、はるばるとお疲れ様です」

右往左往する2人の前に、横谷が現れる。

「素晴らしい街並ですね、ここは。事務所にはもってこいの場所です」

「どうして、こんな山奥に？」

「すかさず、記者魂を見せて深江が質問を投げかける。

「山奥だからこそです。僕は、東京の高尾山というところに農場を持っていました」

横谷は、自ら農場を経営しているのか？。全くの初耳である。しかし、やはり漁野どころか彼の口から高知に関する話さえ出てこない。聞いてはみるが、桑島も深江も事態を飲み込めない。深江はただメモを取って、彼の言動に集中するほかない。

「僕の農場では、いろんなことを試しています。例えば有機農業。」

ほかには、そうですね…水素エネルギーを独自に開発することも進めていますね。そして、インターネットでの僕のサイト上で減価機能を持つ地域通貨を試んでいます。これがことのほか大反響で…」

我が国の通貨は“円”で全国共通…地域通貨、などという概念は認めていない。それがなぜ出回る？…反響を受ける？…ありえない。桑島は、冷静に横谷の言動を分析しようとする。だが、行き着く答えはたったの1つだった。

「…ここが日本ってことだけが、あなたのラッキーなところだな。もし中国とかなら、国家反逆罪だぜ」

日本には直接的に“国家反逆罪”はないものの、“外患罪”“内乱罪”という罪の規定は未だに刑法に残っている。

「国家反逆罪？…心外ですね。貴方のほうが、むしろそれでしょう？」

完全に横谷は微笑を浮かべて、桑島を挑発しているようにしか見えなかった。何を言っても無駄だ…ああ言えばこう言う、屁理屈を交えて。桑島と横谷、誰がどう見てもあの場で横谷に味方する者などいない。

「…ここで何をしているんです？活動は何かされているんですか？」  
メモを取っていた深江が、また質問を投げかける。横谷自身は今度の出直し市長選に出馬を予定している…だが、そのわりには市内のどこを見ても活動の兆候は見当たらなかった。かたや、共産党系の米田とはまさに対照的だ。

「公示されるまで何もする気はありませんよ。公職選挙法の規定を知らないんですか？…ふふっ、それでよく政治部の記者がつとまるものですね」

落ち込む深江に、すかさず彼女の方を叩いてフォローを入れる桑島。

「こんな馬鹿の言うことに、いちいち落ち込んでんじゃねえよ。時間の無駄だ、俺は帰る」

そう言って、車を出そうとする桑島。

「桑島さん、勝手に帰らないくださいよ。まだ取材は終わっていません！」

「歩いて30分ぐらいかかるけど、バス停がある。漁野駅前まで出てくるバスだ…けどな、あと2時間ぐらいで終発だけだ」

桑島はそのまま、車に乗り込んでそそくさと事務所へと戻ることに…深江と横谷、この2人が赤邑の奥地に残った。

「…いったい何が目的なんですか？東京の人がなぜ高知に？」

「決まっているじゃないですか。この愛する日本がダメにならないうちに、僕が動くんです。そして、変えるんです」

「…何を変える気なんですか？さっきの公職選挙法がどうだとか、米田っていう人はそんな中でも市内を精力的にまわっていたんですよ！」

「…」

深江の質問、それに答えては沈黙する横谷。だが、横谷のその顔に浮かぶ微笑は不気味なオーラを最後まで放ちつづけていた。

「最後に言います。私が市長になれば、漁野市は日本一…いや、世界一の自治体として甦ることになります。とある1つの手段をもって、あつという間に…」

そう言いながら横谷は事務所の中へと消え、ドアを閉めた。世界一の自治体？…国を越える規模の自治体、ということか。ともかくメモが多くなった…今までであった取材対象の面々の中で、横谷は一癖も二癖もあるかもしれない。得体の知れない不気味なオーラを読み取るうとする。帰ろうとした矢先、また横谷が事務所のドアを開けて顔を出してきた。

「そして、選挙方法も驚かれることでしょう。明日が楽しみです…」  
そう言っつて、また事務所内へと姿を消した横谷。やはり深江には、横谷の人間性は最後まで理解できないと見た。

その日のうちに深江は無事にバスに乗り込み、なんとか夜遅くにはなつたが帰宅できた。

そうこうしているうちに、日は暮れて…そして明ける。いよいよ、“出直し” 漁野市長選の幕が上がる。市政施行後、初となる今回の出直し選挙には3人の候補が期限内に漁野市選挙管理委員会宛に届け出た。

「岡村前市政が切り拓こうとした、行政・財政改革の流れを決して止めてはなりません！」

さつそく、早朝の新漁野駅前で絶叫を展開する1人の男…漁野市出身、農林水産省四国農林局の幹部であった齡・47の横田寿彦候補。

横田は目下、市議会議員らの秘密裏な支援を得ており、今回の選挙戦でも岡村市政の10年間の功績を称え、その岡村が築いた流れを継承することを早々に宣言し、行政府の急激な変革はないことから徐々に名が浸透していつている。いわば、彼は本命である。

「岡村市政が失ったものはあまりにも大きい！…福祉を容易に切り捨て、産業再興と称した税金の無駄遣い。これらをやめることを皆さまにお約束いたします！」

こちら市街地を貫く国道を、自らのマイクで自転車越しから絶叫する1人の男…10年ぶりの市長席奪還に燃える共産党は、桑島が初当選した前回の市議選で惜敗した齡・63の前市議会議員、米田幹雄候補を擁立した。

横田に米田、そして横谷の3人…だが、深江の日本新聞を除いて横谷を取材・報道するメディアはやはりなかった。

「よし、書けた！ようやく完成だあ〜！」

日本新聞高知支局のテナント…深江は1人で記事を仕上げ、ようやく完成させた。不動産屋の主の紹介もあって、記事を輪転機にかかけ、さつそく漁野駅前の通りがかりの人らに手配りを始める…これらの作業、彼女1人でやらねばならない。

「お願いします！」

ピラ配りのように真剣に刷りたての記事を配る深江…購読者が全くない現状、これしかPRの手立てはない。そこに1台の車が現

れる……「トヨタ・センチュリー」、1人の大物国会議員が降りてきた。

「あれは……？」

民自党の幹事長、瀧本太郎：原が言っていたのは、このことだった。瀧本は付き添いの秘書やSPに案内され、横田の演説している選挙カーへと近づき、容易に入っていた。

「どうも、瀧本太郎です。民自党の幹事長を仰せつかっております……総理・総裁より、伝言を預りました。『成長を実感に！漁野に活力をもたらす、確かな成長をお届けします。横田寿彦さんなら、必ず皆さまにそれを実現できることをここに堅くお約束します』……とのことです。以上」

幹部にしては実に素っ気もなければ呆気ない演説だが、一瞬の人だからが大物の証……そして、颯爽と瀧本は選挙カーを降りて用意された車に再び乗り込む。彼に暇はない……また東京へと帰らねばならない過密スケジュールだったのだ。

一方の横谷：浦阪町赤邑の事務所から動こうとしない。じっとテレビを見ている……傍らには、1人の謎の男がいた。ふと、横谷はテレビ越しに呟いた。

「これは面白くなりそうですよ」

「3話へ続く……」

## 奇怪前哨（後書き）

さあ、いよいよ始まりましたね：“出直し”漁野市長選。本当はですね、この回でもう結果を出したかったんですが、どうにも釈が間に合いませんでした（笑）。

では本題に入りました：こんな小さな市の市長選に大物国会議員をよこすなど、まずないでしょう。とはいえ、市議会議員の密約は本当にあるそうですよ：議会を円滑に進めたいから。いや、もとい市長を操りたいのでしょうか。地方議会つて、腐っているところはとことん腐りきっていますよ：単なる市長への『マンセー機関』とでも申しますか、チェック機能を破壊されているわけですよ。

他には、選挙に関する報道のあり方にもストレートに首を突っ込んでいく節があります：官憲と共謀しての報道操作など、往々にしてよくあること。特にテレビでは、有力政党以外の候補はろくに扱ってくれない。無所属でも有名人でなければ、また実績がなければ公平な報道など程遠い扱いですよね？：もとい、宮崎県知事選での東国原英夫（そのまんま東）現県知事もまた、初期はそんな感じだったようなのを聞いたことがあります。

『日本新聞』発起の理由など、徐々に想像できる方がここで早くも出てきそうなわけですが、それは徐々に謎を紐解いてまいります。これを通じて、報道とはどうあるべきなのか？：私なりの持論や現実直視ゆえの理想の形など、『日本新聞』を通じて言いたいことは山ほどありますから。ともかく、そのためのスケープゴートたる存在が『日本新聞』だと思ってくれれば幸いです。あ：ですから、毎朝新聞と日本新聞の際限なきバトルは今後も注目しておいてください。

バトルといえば、ほかにも出てきそうなおーラはありますね：横谷は相も変らぬミステリアス、どうやって選挙戦を戦うんでしょう

ねえ？早くも不気味なオーラを放っております。なお、市長選公示日の3人の候補者紹介のときのBGMは『Breakthrough』（『라이어・ゲーム』オリジナルサントラの#9に収録されています）なんてどうですか？

漁野市議会議長を経験したベテラン市議会議員・原幸治くはら・ゆきはるく役には奥村公延さん、前・漁野市議会議員にして市長候補（共産党推薦）となった米田幹雄くよねだ・みきおく役には地井武男さんをイメージしました。ほかの人は…横田寿彦くよこた・としひこく役は考案中。ほかにもイメージがある人はバシバシ垂れこんでください（笑）。



## 妖牙乱舞（前書き）

最も醜悪な一週間が幕開く時…利権と策謀、たった1つの玉座を巡る椅子取りゲームの終着点は？

## 妖牙乱舞

漁野市の市制施行後、初となる“出直し”市長選が公示された：横田寿彦・米田幹雄、そして横谷佳彦の3人の候補者らは、支援者やボランティア各自を伴って、秋の夜長をも感じさせぬ熱い選挙戦を繰り広げていた。

しかし、世論調査において公示から3日経った今でも、横田の圧倒的優位は変わっていない。米田はセンター街や、住宅供給公社が焦がした工業団地跡の住宅街の住人らを中心として少しずつ支持を広げるも、全域に広がりきれず苦戦は必至。横谷に至っては：もはや、どうなっているのかさえ知る者は殆どいない。いや、公平に地道な取材を続ける深江友璃子を除いては、誰一人として知らないのだろう。

その深江もまた、せわしく市長選に関する記事を書くのに忙しい日々を過ごしている：今日も各候補者の一日の動き、そして発言の数々をメモにとって、いつになく記者らしい真剣な眼差しで彼らを見ている。対して桑島はどうなのかと言うと、何をするでもなく自分の仕事を淡々とこなし、市長選にはどこ吹く風ともいうべき態度をしている。いや、その中でも桑島は深江から新聞を拝借しては、市長選に吹く流れを感じ取るうとしていた：外に出て、事務所に籠って。その繰り返しの日々、というのが妥当だろう。

(やはり横田が圧倒的に優位、と見るしかねえなあ：ま、つまんねえけど)

横田に勝たれても、別に市議会とはなんら影響があるわけでもない。市議会の“長老”といわれる大ベテラン議員・原幸治が横田を推し、また議員らも次々と横田を推す。もはや、議員の周囲の票において共産党系を除くと横田にほぼ一本化されたのは言うまでもない。

(岡村のやり方を継承する、って…芸がねえのかよ、横田の野郎は)  
岡村市政の改革路線は、予算においても急激とも言えよう歳出の見直しとカットの繰り返しであった。また公立保育所や学校給食の従事者、市立中央体育館は次々と民間委託へ移行していった。そして市立会館も統廃合を重ね、残った会館は地元の地域町内会に管理権限を移行させ、一部の議員や米田が煽った不安などものともせず、じっくりと強力に市政改革を順調に行い、財政赤字を少しずつ圧縮していた…その矢先、県からの指令もあつての浦阪町の編入である。折角の努力さえ水泡に帰すほどの赤字の増額に、岡村としては為す術がなかったのだらう。

そんな思いとは裏腹に、3候補の状況などを事細かに記事にしていた深江…すると、携帯電話が鳴る。

「はい」

「悪いな…俺だ」

気掛かりだったのか、電話の主は清水耕輔である。

「しかし、田舎の市長選つてえのは何かにおうよな…特に漁野は。初の出直し、やりすぎだぜ」

「…本当にそう思います。どの陣営も決死の選挙戦を展開していますね」

「馬鹿、どの陣営も…って、横田寿彦と米田幹雄の一騎打ちだろ！」

どの新聞の高知版を見ても、今回の漁野市長選は横田と米田の一騎打ち…だが、そこは小規模な市であるがゆえオール与党系と共産党系の対決である。大都市圏と異なり、まだまだ共産党系の不利は否めない。やはり、さすがの清水の冷静な分析をもつてしても、横田の圧勝と見るほかないのだからか。

「でも、このままでいいんでしょうか？」

「大丈夫だ。でも、残るもう1人…横谷佳彦、だったかな？」

「私も取材してるんですけど、どうにも…」

横谷の選挙戦は、横田・米田の両陣営と異なつて極端な省エネ作戦とでもいうのだからか…ともかく、ポスターを貼った箇所は漁野

市役所本庁舎の周辺5箇所と、自らが選挙事務所を置いた浦阪町赤  
邑の1箇所のみ。しかも、横谷本人が謎の男を伴って2人で漁野駅  
前での長時間に及ぶ辻立ちを、休むことなく3日連続で敢行してい  
る。

「でもさ、意外と…その横谷ってヤツ、俺は大穴だと思うんだな」

「どうしてですか？メディアでは報道されていないどころか、存在  
さえ無視されているのに…」

「馬鹿、ネットの話だよ…横谷のこと、ネタにしてるヤツがいるん  
だよ」

さらに、清水は深江に衝撃の推論を返す。

「それに横谷ってヤツ、俺は今から言う2つの可能性のうちのどっ  
ちかだと思うんだ。1つ、すでに勝ちを諦めて開き直ってやがる。

もう1つ、すでにヤツなりの勝算を汲んでのことである。どうだ？

…その真意を最後に暴けるように、そこから先はお前次第だぜ。頼  
むぞ」

そう言い終わるや、慌しく清水は電話を切った。横谷の真意、果  
たして本当に勝つ気にいるのか？…それとも、敗北を承知でからか  
いの立候補なのか。それとも、政策などを鑑みて田舎の自治体には  
めったに現れない“第三候補”たりえる存在なのか。

いてもたってもいられない深江は、その足で再び市内を駆け回る  
ことになる。

この日も漁野駅前や新漁野駅前を中心に、市内各地を所狭しと横  
田・米田両陣営の選挙カーが動き回る。そして、横田の辻立ち演説  
には民自党高知県連の幹部や、地方議員出身の国会議員らも軒並み  
集結してエールを送るなど、まるで県知事選並みのスケールの大き  
さにまで発展している。選挙戦も中盤から佳境へと差し掛かる4日  
目、まさにスパートをかけるには絶好の時期である。

対し、メディアの下馬評では完全に蚊帳の外を通り越して存在な  
き者の扱いさえ受けている横谷は、動じることなく淡々と今日も漁

野駅前で辻立ちを朝から敢行していた。傍らには、のぼりを持った謎の男を伴って。いや、厳密には数十人程度のサクラらしき若い女性らも伴っていた。

深江もその場面に出くわす。日ごとに、女性の数が増えているのが気になっているのだ。そこに、深江の肩を叩く1人の男がいた。

「おう！」

その男は、やはり桑島だった。3日ぶりの再会である。

「桑島さん！ビックリするじゃないですか！」

「馬鹿、声でけえよ！」

思わず、大声で叫んだ深江を黙らせようとする桑島。なぜ焦るのか？

「話はあとだ。もうじき横田が漁野駅前「ここ」に来るぜ」

横田と横谷が鉢合わせになる、というのか？…とうの横谷は、選挙期間中はずっと9時から17時まで8時間ぶつ通しで辻立ち演説をやるのがお決まりだ。たとえ、誰が入ろうとも一度辻立ちした場所から離れることはない。下手すると、この2人が最悪の事態を巻き起こすともいうのか？

「そんなんじゃないよ。楽しみとかじゃなくてさ…」

「いったい、それだと何が目的なのか？…深江には、未だに桑島の目的がわからなかった。」

「選挙は公示のときやあ、すでに流れが決まるといわれている。いや、そこで決まらなかったとしても期間が1週間なら最初の3日間が肝心だと…現にそうだろ？俺や共産党の1人を除いて、議員周辺の集票は完全に横田がつかんでる。岡村のやり方を踏襲する、と宣言してる以上は行政の急激な変革は万に一つもないからさ。こんな田舎くせえ市じゃ、急激な変革も議会との険悪な対立も住人自身が望んじやいねえこと…だから、世論調査なんかで横田は完全に凶に乗ってやがる。もはや、横田自身が圧勝を疑っちゃいねえしな…米田なんて眼中にない。ましてや横谷なんて、存在そのものさえメディアは裏協定で抹殺状態…ただ1人、あんたを除いてな」

その頃、米田も市内有数の観光地の1つである「軀沢」をめぐらざわ「海岸の周辺を選挙カーで走っていた。市境にも位置する軀沢地区は、中世史における悲劇の舞台として有名であり、長年にわたってオール与党系の牙城といわれている地である。岡村市政の影響もまともに喰らっている以上、米田は今までの共産党の持つ組織力での集票のみでは横田に負けるどころか屈辱的な完敗を喫してしまう。米田自身は焦りもある。はや、3日目にして淡々としている横谷を除いて動き始めているのだ。

「俺は、この日が今回の選挙戦におけるたった1つのターニングポイントだと思う。ここを逃したヤツが、この選挙の敗者だ。…」  
その敗者の中に、すでに横谷はいるのだろうか？…深江は、清水の発言が気になってしかたがない。

「台風が目か、開き直りか？ま、こんな市にや“第三候補”ってえのはめつたに現れねえよ」

桑島があつさりと答える。…オール与党系でも共産党系でもない、どんな支援さえも受け付けない純粋な候補者であり、かつ明確な政策をもって挑む。そういう候補を、桑島を中心に“第三候補”と呼んでいる。…この“第三候補”の存在は、大都市圏では選挙戦の更なる流動化を招き、予想を非常に困難にさせるほか、共産党系にとつては脅威の存在でもある。

「横谷さんは、その“第三候補”の概念に当てはまらない？…とでも？」

「…ああ、全然な。こんな田舎の市長選に“諸派・新人”で出る馬鹿はいねえよ」

桑島と深江：2人が小声で会話を重ねているうち、1台の選挙カーがこの漁野駅前に現れる。

「お、主役のお出ましだぜ」

横田が車から降りる。…付き添っていた高級車からも、何人もの男たちが降りてくる。

「オール与党というより…」

「まるで民自党のマリオネットみてえで滑稽だな、横田の野郎」

そして、横谷と対峙するかと思いきや横谷とは反対側に陣取って演説の準備を始める。最悪のシナリオを想定していた深江は、ある種でホツとした心理であろう。

「ホツとしてる暇ねえぞ。問題はそこじゃねえ」

何が問題か、じつと横谷を見る桑島：「もしや、横谷が墓穴を掘るといふのか？」

「最初の時点で、墓穴を掘っちまってる…勝つ気がねえなら、はじめから出てくんなよな。あとは横田…あいつもどうにかなんねえのかよ」

いわば、横田も横谷もどっちもどっち…どっちに票を入れようが桑島からすれば損得勘定も加わらざるをえない。ということは、横谷に票を入れても何の得にもならないと思いつつある…いや、横谷が市長になれば漁野市は確実に破綻の道をまっしぐらに進むだけだろうとも考えているのだ。

「それにさ、あんたも聞いてたろうけど…どう考えても横谷は勝てる確率0、逆転ホームランなんてないってな」

確かにそうだ…深江を除いて、まともに横谷を取材しているメディアは何一つない。その現状をふまえても、知名度は横田どころか米田にさえ遠く及ばない…実際、演説の際にも横田に覇気は感じられず、どこか勝利を確信しているような感じの言動が目立つ。すると、横谷がいったん演説をやめた…小休止、といったところか。のぼりを持った謎の男と2人、駅前のコンビニへと消えていく。

そして10分ほどが経ち、饒舌に横田が演説をしていた傍らで横谷と謎の男が戻ってきて、再び演説の準備を始める…そして、マイクを持った横谷は、滑らかに淡々と自説を主張し始めるのだった。

「皆さん、現世は驚くほどまやかしによって操られている…そんな風に思いませんか？思うだけじゃないんです、本当に現在置かれている現状がそうなんですから」

いきなり何を言い出すのか?…まやかし、とはどういうことか?  
「前市長・岡村敦規は、決して責任をとったんじゃないのです。自分勝手に、自らの欲だけで市長をやっていただけに過ぎないんです。だから、辞職と称して簡単に逃げられる…そうじゃないですか。とっておきの特効薬があるのに、それを使おうともしないで辞めていく無神経な男なんですから」

口を開けば、今日は岡村に毒舌を振りまいた…いや、この次元になると一歩間違ったら誹謗中傷の範囲に首を突っ込んでいるかもしれない。そんな言葉を、表情を変えることなく横谷は淡々と喋っている。不気味なオーラを感じ、桑島はもちろんのこと深江も首を傾げつつあった。

とっておきの特効薬がある?…財政赤字を立て直すためのだろうか。やはり、横谷という男の人間性は全く読めない。その苛立ちが、桑島の心を次第に支配していった。

「北海道夕張市…財政再建準用団体の申請を決定しましたね。負債が500億とも600億とも言われる大赤字を抱え、降参したとでも言うところですか?…いや、降参したじゃないんです。進化の道を選んだんです。私は、市長の決断を英断として称えたいと思っています。市民の皆さんも、この英断を称えようじゃありませんか」

この発言には、その場にいた面々…横田はもちろん陣営の面々、そして桑島も深江も耳を疑った。何を言い出すのか?…無神経にもほどがある。財政再建団体は、別名として“赤字再建団体”と揶揄される代物…過去に何度か、この“赤字再建団体”に転落した地方自治体はあるが、例外なくその自治体に待っているのは住人をはじめめとして、公共サービスへの多大な影響を受けてしまう。そのような自治体の死を意味する行為に対し、英断だと?…称えよ、というのか?なぜ称えねばならないのか。むしろ叩かれてしかるべき行為ではないか。

ここまでくると、桑島はもはや嫌悪を通り越して憎悪にまで発展するかのよくな顔つきで、横谷を横目で見るほかなかった。



（それじゃ、次のヤツら…生まれてくるかもしれねえ俺らの子供の未来はどうなつてもいいつてのよ。ふざけてんじゃねえぞ…横谷の野郎！）

そんな思いは露知らず、批評を通り越した誹謗中傷の領域の発言は、今度は眼前にいるはずの横田へと視線を向けられる。

「今の世の中、小手先の手法なんて通用しません。それは既存概念に支配されているからです…永遠の成長を続けなければならぬ、それこそが呪縛なのです。停滞してもいい…衰退してもいい。将来に渡って栄えれば、それでいいことじゃないですか。そして、そのような劇的な手法が世界にたった1つだけあります…私はそれを実践して、この窮地に陥っているとされる漁野市へと降り立ってきたんです。このたった1つの手法で、できないとされるものまで含めて全てを改革できるんです。信じてください…私はやりませぬ。漁野市を日本一…いや、世界一の誇れる強い自治体へと生まれ変わらせます。そのための第1段階として、財政再建準用団体への早期の申請を敢行します」

現場が一瞬、凍りついた。“赤字再建団体”への転落を公言したのである…ついに政治家を志す者として、パンドラの箱を堂々と開ける行為に出たのである。言つてはならないことを、横谷は堂々と発言してしまつたのだ…意味を全くわかっていない。それでも、横谷の饒舌は止まることなく無表情に進められようとする。

傍らで見ていた桑島は、もはや憎悪から殺意へと変わりそうな形相で横谷をグツと見ていた。確かに横田には芸がない…岡村前市政のやり方をそのまま踏襲、聖域のない財政再建を口実にした経費の削減を敢行するというのだから、確かに横田はその猿真似を指摘されても不思議はないだろう。黎明党が1度も選挙に出たことがなく、この横谷が初の参戦とあつて息巻くのも無理はないのだが、それでもやりすぎている。

何が財政再建準用団体の申請だ…騙されるものか。それは、いわば自治体に対する死の宣告だ…そう、横谷は自爆してしまつた。

「…桑島さん」

そんな機嫌の非常に悪い桑島に、何を思ったのか小声で深江が声をかける。ぎつと睨む桑島…

「恐いです」

「…あ、悪い」

急にしれつとした顔に戻す桑島だが、やはり横谷の発言は胃酸の出る思いが引つ掛かる。

「横谷さん、公示の日からずっとあの調子なんです。9時から5時まで、8時間ぶつ通しで漁野駅前だけで辻立ち演説。まるで新興宗教の説法みたいな感じですよ…」

「みたいな、じゃねえよ。新興宗教そのものじゃねえか…」

9時から17時まで8時間連続ですつと演説…しかも、どこにも行かずに漁野駅前ですつと辻立ち。正気の間人がやる選挙戦ではない…なおさら、選挙をなめているとしか思えない行動の数々に心が躍っているのは、横谷の周りを囲む節操なきサクラだけである。

時はあつという間に過ぎ、投票日前日に発表された毎朝新聞主催の世論調査の結果は以下のとおりである。

【漁野市長選挙 直前世論調査】

『貴方は、今回の“出直し”漁野市長選の投票に必ず行きますか？』

82・47% はい

17・53% いいえ

『上の質問で「はい」と回答した方…では、意中の候補者は？』

36・17% 横田寿彦（無所属・新）

20・97% 米田幹雄（無所属・新、共産党の推薦）

0・49% 横谷佳彦（諸派・新）

42・37% まだ決めていない。

そして、運命の投票日当日を迎えた…その日の漁野市内は、朝から雲ひとつない快晴だった。

(すげえ眩しいな…)

桑島の朝は、日曜日といえど6時に始まる…否が応にも、今日の深夜には新しい漁野市長が決まる。横田寿彦の圧勝…さすがの桑島も、それしか思いつく答えがなかった。

(ふん、勝ち馬に乗ってやるか。そのあと、どうするかな…)

一方、東京の日本新聞が入っている小さなテナントビル…静けさが残る政治部の部屋にたたずむ1人の男、それはもちろん清水だった。

(どうすつ転んでも、逆転はねえな…ちっ、つまらねえ!)

持っているのは2枚の紙…毎朝新聞の直前世論調査の結果、そして深江が必死になって書いた記事である。どう見ても、横田の圧勝…やはり番狂わせも何もないのか。それはさておき、漁野市内の投票所に指定された小学校や公民館などには、朝から投票の入場券を持った有権者らが多く来ていた…おそらく、前回の市長選よりも投票率は上がるだろう。

注目の横田と米田も、各自に投票を済ませる…桑島も早朝、7時過ぎにはすでに投票を済ませていた。

(ま、戦場で待ってるぜ…横田寿彦。別に俺は、あんたの味方でも敵でもねえよ…)

だが、投票会場のどこにも横谷は現れなかった…それもそのはず、未だに高尾山に本籍を持っており、住民票を漁野市内に移していないので、今回の市長選において選挙権そのものがない。浦阪町赤邑に構えた掘建ての事務所で、謎の男と2人で朝からビールなどを飲み明かしていた。

「…いよいよ動きますね!」

「…そうですね。山が動く、そして変わる。今に見ていなさい、フフ…」

不敵な微笑を浮かべる横谷…まるで勝ち誇ったかのように、堂々としたたずまいである。だが、現実には世論調査において本当に微々たる支持しか集まっているとしか思えない低得票が予想され、過去に行われた漁野市長選における史上最低得票数・得票率が大幅に更新されるとさえ囁かれているほどだ。現に毎朝新聞は横谷に関する記事を一切外し、横田と米田の一騎打ちと記事で煽った。いや、他の新聞とて例外ではない…深江の日本新聞を除いて。

そして、運命のとき…時計は20時を指す。そのときを見計らって各投票会場では一斉に投票箱を閉め、総合体育館のメインアリーナに集められる。各自が固唾を呑んで見ている…いや、それよりは余裕の顔も多い。桑島もまた、嘆息交じりに深江と2人で結果を見ようとしていた。

「見たって意味ねえけどな…」

「どういうことですか？」

「…もうじき出るよ。横田の当確、つてな」

果たして、どれだけの得票差か…横田のあの支持の広がりぶりを感じるに、思いのほか大差になっている可能性が考えられるが、それにしても横谷の発言は赦せるものではなかった。わかる人間はわかる…横谷に票は、何があっても流さない。流せば、それは漁野市の“自治権放棄”を意味することになる。国にタダで売り飛ばす…いわば、小規模な売国行為ではないか。桑島はそう考えていた…これが常人の発想だろう。

「…桑島さん！来てください！」

深江は、大きなソファで眠りかかっていた桑島をたたき起こす。いったいどうしたというのか、時間は20時半をまわっていた…だがおかしい。元来なら、20時過ぎにはすでに当選確実の情報が流れているはずだ。前回の選挙、岡村もそのぐらいにはすでに情報が流れていた。そして今回、流れた情報は…深江や桑島のみならず、漁野市の全域を震撼させるには十分すぎるものだった。

『漁野市長選で 横谷佳彦氏（諸派・新）が当選確実』

あまりにも想定外…さすがの桑島も、そして東京にいた清水もそうだ。あの程度の結果しか出なかった世論調査から、まさに一発逆転ホームランを決めたのだ…しかし、なぜ横谷は勝てたのだろうか。今度はそこに考えが移ってしまう…当の横谷は、事務所で謎の男と2人つきりでささやかな祝杯をあげている。

「フッフッフ…皆さん、これをどう見ているのでしょうかねえ？」

「このような結果、私以外は誰も予想できなかったはずですよ」

この結果に対し、圧勝は当然とされた横田の陣営では嘆き声やすすり泣きが聞こえる…現世の生き地獄、とでもいうところか。そして、当の横田も結果を受け止められないでいた。

「うぉあーーーーー！！！！！！！！」

泣き崩れる横田を、誰も慰められなかった…いや、慰めるどころではなく陰ながら応援してきた原幸治をはじめとした漁野市議会議員らは、今後の動向を全く予想できないでいた。

「…どうするんですか？」

「どうするもこうするもない。追い払う！」

「ともかく出迎えはするな」

「そつだ！目にももの見せてやる！」

ここまでくると動揺でもある…中には、常識からしてありえないことさえいう面々さえた。

「まさか、桑島が…」

「あいつならやりかねん！」

作戦を立てるとか、もはやそれだけではなく横谷や桑島への私怨しか支配するものがない冷え切った現場である…相変わらず、横田はその場で泣き崩れたまま立ち上がれないでいた。圧勝といわれ、そのプライドを完全にずたずたにされたようなものだから。

思い思いの夜は過ぎ去り、翌日…横谷が市役所本庁舎に現れる日

がきた。朝9時、横谷は誰も伴わずに1人で歩いて現れてきた。そんな横谷の姿を、市役所職員をはじめ市議会議員でさえ誰1人として出迎える気配を感じない。異常だ…いや、こんな異例の事態はそうそうあることではない。いや、どこの自治体でもありえない事態だ。横谷新市政を歓迎しない…市役所から発せられた声明にも感じ取れる。しかし、それでも横谷の顔は終始微笑を浮かべたままである。

「…やはり、貴方だけでしたか。僕を歓迎してくれるのは」

正面玄関前、1人で立っていたのは桑島…だが、横谷を見るその目は憎悪に溢れていた。

「歓迎？…ケツ、馬鹿なことやってんじゃねえよ」

「…威勢だけは1人前だ、フッフ」

相変わらず、相手を鼻であしらう横谷。そして、桑島がまた口を開く。

「いいか、あんたを市長の座から引き摺り下ろす…絶対にな」

「…できもしないことを言うものじゃありません」

そう言っつて、横谷は正面玄関から市役所の中へと消えていった…その憎らしい後姿を、桑島はグツと睨んで目に焼きつかせていた。

「4話へ続く…」

## 妖牙乱舞（後書き）

一週間の選挙戦を、たったの1話でやってしまおうというのも性急すぎる気がしました。でも、やっちゃいました（笑）。

この市長選、醜悪と言うにはまだ

「どうかな？」

なんて思った…推敲すればするほど。

では、読者の皆さまに質問…

「今回の“出直し”漁野市長選、貴方がたが漁野市民の有権者だとします。横田寿彦、米田幹雄、横谷佳彦…3氏のうち、果たして誰に票を入れますか？」

いやね、これ…私は選挙の現状に不満を大いにもっているんです。あの3氏なら、誰であろうと結果は見え見えですよね？…あとはそう、公職選挙法ですね。選挙のたびに…特に選挙後は、なんだかんだと違反なので逮捕とか、よくニュースで耳にしますよね？…あとは連座制など、専門用語などは次回の話とします。

そして、今回の最大のキーワードは“財政再建準用団体”…俗に“財政再建団体”“赤字再建団体”と呼ばれて地方自治法にも規定されていますが、昨年8月のニュースを覚えていますか？…北海道夕張市が国に申請した自治体財政の破綻制度、それがこの言葉に凝縮されています。

その後の夕張市が、いったいどうなっていたのか？…全国ネットの報道でも、そしてNHKでも特集されましたね。あのとおり、と見てよいでしょう。

要は、あんな急激な衰亡へと横谷佳彦はやると言ってしまったんですね。そんなの、選挙で言っただよいかよくないか？…答えは自明ですね。わかっている人は横谷に票は入れません…横谷はなぜ、こんなことを堂々と言うのか？…清水耕輔の言うとおり、

「勝ちを諦めて開き直っている」「横谷なりの勝算があつてやっている」

そのどちらかですね。普通なら、前者だと思つところが恐く、もしかすると投票率を下げてしまったのでは？…だとすると、あれだけの組織票を固めた横田寿彦が勝たねばおかしくなってしまう。

でも、結果は横谷の勝利に終わった…今後、そのからくりが1つずつ表面化していくでしょう。

公職選挙法と地方自治法は、このドラマを作る上でも重要な法律なので今後ともお世話になることでしょうね…さて、展開が難しくならないようにしないと！

そして、お待たせしました。次回、逢沢大介がやっと登場します…ひよっこりとね。お待たせして申し訳ない（汗）。くわえて…6人目のメインキャラ、ぼんやりと検討しております（笑）。

あ、横谷のサクラが数十人いたと書きましたけど…全員、女性です（笑）。で、イメージは柳原可奈子さんのような人らだと思つていただければ（爆笑）。



内憂組曲（前書き）

恐るべくは横谷佳彦：「抗う者は眼前から消えろ！」  
艶やかな妖  
牙は、容赦なき攻撃性を早くも見せる。

## 内憂組曲

市制施行後初となる“出直し”漁野市長選で当選したのは、予想に大きく反して横谷佳彦だった。その衝撃は、漁野市内にとどまらず高知県内、いや。四国地方から全国へと、大きな衝撃として駆け抜けていった。どこの誰しもが、“いち”泡沫候補扱いも同然の横谷など、当選すると予想するのはよほどの趣味でもない限りありえない。

ここは高知市のセンター街、そびえるは高知県庁。知事室では、今日も職務に忙しい県知事が1人だけ、つかの間をくつろいでいた。「失礼します。知事、お時間です」

県知事は軽く頷いて、机の上に新聞を放った。その新聞の記事において、しっかりと横谷の当選が報道されていた。そのまま、知事室を出て今日も職務に忙しく駆け回る日が幕開ける。しかし、新聞を読んでいたときの県知事の顔は誰にもわかるまい。顔つきは、誰も寄せ付けないほどにこわばっていた。

(どうしたものか。議会を全面的に敵にまわしてしまうぞ)

県知事には、漁野市の今後が見えないでいた。横谷新市政は、果たして漁野市をどう舵取るのだろうか。不安が尽きない。現に、当選証書を市選挙管理委員長より手渡される式典に際して初登庁の運びとなった際にも、職員らは誰一人として出迎える空気さえなく、人っ子1人いない玄関をたった1人で歩いて登庁してきた横谷だった。県知事は、そんな異例の事態を知らないはずもなく、危惧は募るばかりだった。

しかし、それは逆に予想された大混乱は当日にはなく、あまりにも無気味すぎる静けさのもとで当選証書の授与が成されたということである。

そして、その次の日……ここは漁野市役所本庁舎。平静を装っているものの、市職員の面持ちは総じて暗いオーラを放っていた。戦々恐々とした現場は、市議会事務局でも全く変わらない。

「……おい、どうしたんだよ」

そこに桑島が現れる……この日は、市長の施政方針演説も兼ねた臨時議会の初日である。慌てようは、桑島にまで余波が飛ぶ。

「桑島さん！」

いきなり職員の女が1人、桑島の口をふさいだ。

「苦しいだろ！」

ふさがれた口で懸命に訴える桑島……いったい、なにがどうなっているのか。

「噂ですよ……桑島さんが横谷市長に票を入れた、って！」

桑島が横谷に票を入れる？……何を馬鹿なことを言っているのか。

「はあ？……誰だよ、そんな馬鹿な噂振りまいてやがんの。許さねえ！」

濡れ衣を被せられたまま、黙っている桑島ではない……それは、横田寿彦への支持を懸命に訴えた“長老”原幸治をはじめとして多くの漁野市議会議員らが目を向けていた。1人しかいなかった共産党の議員は、言わずもがな米田幹雄を支持していた。だとすると、残るは桑島……

「横谷へ票を流したのは誰だ？」

と考えると、そう考えてしまうのは短絡だがありがちだ。まして漁野市のような小規模の市だと、どうにも投票行動への粗探しが多かったり、地縁や血縁を持ち出したり変なところで人情を持ち出したりするなど、特異なところもある。だが、神に誓ってもいい……桑島は横谷ではなく、横田に票を入れた。財政赤字対策が必要な今、無用な混乱は避けなければならない。

「それよか、どうすんだよ。議会！」

「……台本は要らない、と言われました」

横谷のこと、それは想定内だ。だが、問題はそこではあるまい。

「職員にも大胆なリストラ、って噂が…」

「採用試験も中止するかもしれない、って！」

リストラ？…この時期になって採用試験の中止？…まさか、何を言い出すのか。いや、横谷なら言いかねない。思い立った桑島は、女の手を払いのける。

「悪いな、議場に行くってくる。あ、ついでに…俺の分の台本も要らねえぜ。そんなのなくても、俺の言葉で言うからさ」

そう言っただけ桑島は、事務局室をそそくさと出る。いわば権力欲の塊も同然で、敵味方の区別しかない横谷なら簡単にできることだ。ここまで盛り上げられる心理戦は、漁野市の規模ではまずそんなにあることではない。ある意味で、桑島にとってはおあつらえ向きの戦場になったといったところか。

議場にはまだ、誰もいない…そんなあまりにも静かな場所に1人の男が入ってくる。そう、桑島だ。その桑島だが、登庁前に深江友璃子から聞かされた言葉をふと思いついて出していた。

「横谷さんの選挙戦のさなか、ゴソゴソと怪しい人がいたという情報がありました」

桑島には目星がついている…もちろん、それは高知県警本部の公安だ。だが、おかしいとは思わずにいられない…なぜ、勝てるはずもない“いち”泡沫候補に過ぎない横谷なのか。共産党系の候補たる米田のほうか、まだマークリストとして辻褄が合う。わからなかった…どうやら、そのゴソゴソと動いていた公安の輩は、上司の命令を無視して横谷をマークしていたのかもしれない。だが、桑島の頭内は堂々巡りでどうにもならなくなる…そんな複雑な心境で席に座り、自らの質問する内容をまとめたメモをじっくりと読み直している。何十分経っただろうか、ようやく別の議員が議場に姿を現してきた。すると、その議員はいきなり桑島に向かって走り出し、胸倉をグツと両手でつかんだ。

「あんた、いったいなに考えてんのよ！」

その怒り心頭の議員は、完全に血が上って思考することさえままならないようだ。

「…苦しいっつうの」

「あんたが横谷に票を入れたのは明白なんだからね！」

「…証拠は？証拠はあんのかよ」

桑島が横谷に票を入れた？…そんなことは断じてない。それに、証拠などつかめるはずがないはずだ。桑島は言葉を続ける。

「…それか？見せるよ」

「ふん、白状する気になったのね！」

そう言つて、乱暴に渡された…桑島は、それを見て思わず顔を緩めた。やはり、偽物だ。

「…議員のくせに、本物と偽物の区別もできねえのかよ。よく読んでみるよ…ありえねえルートだぜ」

市選管が横流し…そんなこと、できるはずがない。もし本当なら、公職選挙法違反の汚職事件にまで発展する。しかし、事前に桑島は市選管に情報屋を放つて情報収集をした結果、そのような痕跡はなに一つなかった。現世にはダブ屋など、功績を焦って隙を見せる政治家たちに偽の情報を流してさも本物のようにアピールして信じ込ませ、一気に奈落の底へ落とそうとする悪どい連中が闇社会には数多くいる。彼らにとつて、漁野市の現状はまさにそれだ…桑島はさらに言葉を続ける。

「こんなB級の罠で俺を落とせるかよ。こんなしてる暇があつたら、さつさと横谷の対策でも練つてろよ」

冷たく言い放つ桑島に、そそくさとその場を去るほか道はなかった…各々、指定の席に座る。時間が経つのは早い…次々と席は埋まっっていく。もはや議会は、横谷への臨戦態勢を整えていたのである。

一方、ここは記者クラブ…もちろん、新聞業界に新規参入という形で殴りこんでいるにすぎない日本新聞に居場所などあるはずもない。大手の週刊誌や写真週刊誌、タブロイド誌でさえも入ることを

うかつに許されない、大手新聞社の談合の縮図たる場所ゆえに仕方がなかった。横谷新市政は、議会は全員が敵…四面楚歌ともいうべき状況で、また桑島の動向も気になる深江は、ただおろおろと市役所内をうろつくほかなかった。するとその時、1人の男が深江の前に立ちはだかった。

「…お嬢さん、いい手があるぜ」

微笑を浮かべるその男は、深江の手を強引にとつて階段を駆け上がっていく。快晴というわけでもないのに、また室内なのに目深にサングラスをかけている…誰がどう見ても、怪しげな風にしか見えない。

「こつこつという場合、君みたいなのは敵の心臓を一気にえぐる作戦でないとな」

そう言つて、謎の男に連れられるがまま深江は議場の前に現れた。いや、正確には傍聴席の入口に来ていた。

「…健闘を祈るよ。記事を楽しみにしている」

そう言つて、男はその場を去っていく。記事？…自分が新聞記者だと気付いている、その不気味さに深江は若干の悪寒を感じていた。「…どうされました？傍聴ですか？」

事務局の女性職員に声をかけられ、やっと正気を取り戻した深江は頷いて、傍聴券を手にして議場に入っていく。もちろん、そんな深江の姿を桑島は見向きもしないで、壇上をじっと見ながら時を待っていた。そうこつこつしているうちに、議長をはじめ事務局長らも壇上近くの席に座り、いよいよ臨戦態勢は整った…議会の様子は、今までとはまるで違う。“横谷佳彦”という、得体の知れない怪物「モンスター」のごとき男がああ壇上に現れるのだと思うと、各々に去来するものはただ1つ…それはもう、敵意とか憎悪とかの類しなくなる。しかし、時間は待つてはくれない…議場の開場まで、あとわずか。

会場の時間を見計らい、横谷が現れた…そして、手にノートを1

冊抱えて無言のまま“市長”と書かれていた席に座る。そのときの議員らに張り詰めた空気は、市制施行後50年以上の歴史では考えられないようなものによる支配がなされていたのである。それもそのはず、横谷が放つオーラは常人の域ではない。彼の政策は、ことごとく岡村前市政の否定を通り越して市制施行後50年以上の歴史……いや、それどころか長年培ってきた土壌をもいと簡単に掘り出し、そして無情にも破壊する“クラッシャー”ともいえる存在にか見えない。まるで殺人鬼を相手にするような目つきで、横谷をグツと睨む議員も少なくはない。だが、1つの懸念は消えた：現れた瞬間からの野次である。日本の議会には、国会・地方議会の如何によらず野次は悪い意味も含めて名物である。しかし、奇妙なまでに野次がない……不気味な空気の1つがそこにあった。

（何を言いやがる……）

桑島もグツと壇上を見つめながら、横谷の所信表明演説のときを待っていた。

「ただいまより、臨時議会を開会いたします」

議長の選出はもめごとなく早々に決まり、いよいよ新議長の第一声が議場に響く。

「それでは市長の所信表明演説をお願い致します。市長、横谷佳彦君」

議長に呼ばれるや、不敵な笑みを消さないままノート1冊を持って壇上に上がる横谷：そして、ノートをゆっくりと開いてマイクを整えた横谷は、ついに謎めいたオーラを紐解くが如く演説を始めていった。

「多大なる約57000人の市民の皆様の民意をもって、この議場に登壇ができませんでした。ご紹介に預りました、横谷佳彦です……」

はじめは実に淡々としたものだが、最初の言葉からすでに誰よりも怒りをためていた男が1人：桑島だ。傍聴席に座っていた深江にも、すぐさま桑島の心境変化が目に見えてわかるほどだ。

（何が民意だ：テメエの操作だろうが！）

構うことなく、横谷は演説を続ける。

「選挙戦におきまして、他の2候補とは違って正々堂々と遵法精神に則って1週間だけの選挙戦で勝利を得た私ではありませんが、かく言う私はここ最近特に思うことなんですが、地方再生などと声高に叫ばれる風潮に違和感を禁じえませんか」

すると、野次が少しずつあがってきた。それもそのはず、なぜ漁野市長になったのかということ詰問されても不思議ではない発言だからだ。

「もともと東京とそれ以外で区別されても宜しいものですか？…私は、他の誰よりも日本というこの国を愛しております。そして、愛するがゆえに憂いております。残念ながら、その憂いは議員には届かないのが現実であり真実ではありませんか。貴方がたも含めて、私利私欲のテメエの都合で動いているだけでしょう。マスターベーションに浸りたいだけでしょ？…所詮はそういう連中だというのは、もうネットを通じて知らない者たちはいません。“自称・保守”などという慮外者集団が支配する地だからこそ、この漁野市が抱える財政赤字とやらは肥大化したのではないかと思わずにはいられません。しかし私は違う：真正正銘の保守主義者こそ、私なのです。そして、私には先見できる素晴らしい能力を持っております：私が任期を全うしたとき、漁野市は国内のみならず海外からも注目され、財政赤字など微塵もなくなり、負の歴史も遺産も全て消え去り、世界各国からモデルとして羨ましがられる自治体へと変貌することでしょう。そのための政策をここに1つずつ、箇条書き方式で述べてまいります…」

すると、ノートを1枚めくって深呼吸を置くかのようなインターバルがさらなる張り詰めた空気を演出する。

「まず、資本主義は限界をきたしております。そのため、この漁野市は資本主義を超えねば事態はより悪化するのみ…資本主義が崩壊した先を見据えられる者こそ、政治家としての資質であるというのが私の信念です。そして、お金だけ使わず置いておくと増えていく。



しかし万物は例外なく、放っておけば減っていく…こんなことも赦される道理がない。お金も置いていては価値を減らすものにして、多くのお金を市中に撒いて流通の活性化につなげようではありませんか。そのために“円”なる統一通貨を市内において使用を停止し、新たなる市内限定の地域通貨の開発と流通を約束します。そして、生きていくためには衣食住といいますが私は住宅を各自・各世帯に須く保障いたします…そのため、市民1人あたりに2500万円を1人残らず漏らすことなく補助いたします。そして、賃貸不動産の早期業務停止を通達して全ての土地を個人の分譲地とします。そして、市長といえはずっと市長室にこもることが是であるかに捉えられておりますが、その概念にも私はとらわれない…市内をくまなく見たいとは思いますが、私にはそんな時間も赦されない。おわりの方は少ないかと思いますが、私は東京の奥に当たる高尾山地の一角において農場を経営しているものです。数多の従事者を抱え、農場を留守にすることは赦されない…それゆえ、市長室の分室を農場内に設置してもらうことを平にご容赦願いたい」

このあたりになると、深江ですらしつかりと聞かないと聞き取れないほどに野次がさまざまのものになっていったのは言うまでもない話だろう。こうなるともう收拾がつかない：“オール与党”ならぬ“総野党”状態をまざまざと示す、横谷新市政はいつ崩壊してもおかしくはない。演説は野次の嵐が吹き荒れたまま、終わっていった…もはや最後のほうは、誰もが聞いていなくなつたろうが1人だけさらなる怒りの念を内に秘めた男がいる。いわずもがな、それは桑島である…

「横谷市政の息の根を必ず止める」

横谷にそう断言した以上、後戻りは赦されないばかりか、演説を聞いてその思いはさらなる確信を固めた。

(議案に全て賛成しろ、だと?…ナメてんじゃねえぞ!)

そう、横谷が一步間違えば暴言なんて領域では済まされない言葉を大いに乱れ飛ばす野次のさなかに発言したことを、桑島は決して忘

れていなかった。その横谷は、底辺政党の1つにして謎の政治勢力“黎明党”の幹部の中の幹部…そんなヤツが、そんな頭がさも狂ったかのような発言の数々を堂々と議場でのたまう。こんなことが赦されるのか？…しかし、傍聴席の一角には目頭が赤くなっている若い女性の集団がいた。各々にハンカチを顔にあて、懸命に涙をふき取るものもいる。

（感動してるのかな…？）

深江はいぶかしげに、その女性の集団をじっと見ていた。不思議でならない…桑島が怒り狂いそんな感覚にいるというのに、なぜ彼女らだけは感動しているのか？…政界では、古い概念がどうだからとはいえポツと新しい概念で挑んでよいというほど単純な場ではない。

「ありがとうございます」

議長がそういうやいなや、このあとさらに衝撃が議員たちに走る。「早速ながら、市長室分室の新設を明記した組織条例の改正案が市長より提出されました旨、報告いたします。つきましては、この本会議場にてただちに採決を執り行います」

漁野市の市議会運営条例によると、議員側から出される条例や規則などは委員会経由を原則としているが、市長から出されたものや緊急性を要する条例案は特にそうであるが、本会議場での採決が優先される。さすがに横谷、政策は有言実行だということなのか…しかし、東京で生まれ育った男がなぜ高知に来たのか。桑島のみならず、全員がそう思っていたはず…深江とて、それは例外ではない。そんなさなか、市長室の分室を新設する旨の市組織条例改正案の質疑応答が始まる…横谷は東京の高尾山系に農場を持っており、自らがそのオーナーでもあることから片時でもおろそかにすることができないという。それでも、彼の口から漁野市という土地に対する愛情その他、似たような表現の言葉は聞かれなかった…そこを徹底的に市議会議員たちが突いていくも、横谷にはびくともせずただ自論をもって返されるのみ。

(膠着状態…いや、押されているかも?)

採決をとるに当たり、横谷はすつくと立ち上がって壇上に立った。  
「議員の皆様…貴方たちに、一言だけ言い忘れえました」

「いったい、なんだというのか?…すると、驚くべき発言が横谷の口からなされた。」

「僕はですね…超能力者なんですよ」

その言葉に、議員はもちろん傍聴席さえもとある一角をのぞいて一瞬にして沈黙と恐怖が走った。

「驚くのも無理はありませんか…でも、本当のことなんです。子供の頃から、僕には何でもできることがわかったんです。いろいろできますよ…そして、一番自信のある能力があるんです。それは…透視。だから、貴方たちが賛成か反対か…どちらに入れるのか、すぐわかってしまうんですよ」

この期に及んで、いったい何を言っているのか?…透視など、普通はできるはずがない。

「ハツタリかましてんじゃねえぞー!」

「…ふふふふ、ハツタリとは笑止千万。本当にありますよ…ほら、貴方が今持っているのは白票(=反対)ですよね?」

桑島を除く、元議長・原ほかベテラン議員らの怒号や罵声もものともせず、横谷は公然と言つてのけた。その横谷の無表情にも見える微笑を浮かべながら答える姿に、熱狂しかけている一部の若い女性の集団を除いて深江は強烈な悪寒を感じていた。

(何かが違う…いや、違うなんて次元じゃない。まるで別世界にいる人みたい、妙な感覚…なんなの?)

妙な感覚というのは、深江なりにまだ抑えた表現だ。深江だけじゃない…その感覚は桑島でさえ、全く同じものだった。

(こいつ、理想にばかり目をやられて原理主義者に転落してやがる…ヤツ自身、まだそれに気付いちゃいないのが幸運なのか。いや、今のままじゃ最悪のシナリオに動いていくほか道がない)

桑島のほかに、議員たちは各位が完全に思惑を合わせていた。“赤字再建団体”転落を公約に掲げていることを知っている桑島の場合、彼らとは答えに至る経緯は違えど一人にその思いを凝縮させている。

（認められるか、お前なんぞ！…何を出そうが、否決させてやる！）  
こうして、横谷の身勝手な都合という空気に支配されたまま市長室の分室を彼が経営しているとされる高尾山の一角にある農場に置くための市組織条例改正案の採決が始まった。しかし、横谷は正面を向けて目を瞑ったまま…しかも、否決の空気に支配されているにもかかわらず、余裕とも取れる微笑を浮かべたままだ。次々と埋まっっていく白票…ここまで、誰一人として青票（＝賛成）を投じた議員はいない。そして最後に議長が、この男の名を呼んだ。

「桑島庸介君」

すつくと立ち上がり、そして歩を地に足つけながら壇上近くにある票決の地へ向かう。その表情は顔に表れないまでも、横谷を見るやいなやグツと睨みながら、何食わぬ顔で白票を投じた。もはや、見る必要もないほどの歴然たる結果…賛成0、反対17。

「開票の結果、賛成0…反対17。よって、本案は全会一致で否決されました」

しかし、横谷はさらなる微笑を薄気味悪く浮かべたままだ。

「ふふふふふ、暴挙に躊躇なく打って出るとは…貴方たちは、実に愚かな人種だ。跡形もなく滅び去ってもらわねば、この漁野市は生き残れないということをもた1つ証明してしまいましたね」

さらに横谷は話を続ける。

「賛成に誰も票を入れないことぐらい、僕が気付かないわけがないでしょう…先ほど言ったはずですよ、僕は透視ができる。しかし、施政方針演説のときに忠告したはずですよ…僕が出す提案は、漁野市が日本国などという狭い領域に留まらず世界一の自治体として誇れる姿に変貌するために必要不可欠なものばかりゆえ、1人の白票を投じる者なく全員の青票をもって制定と即日の施行を宣言させるよ

うにと。それをあつさり破るとは：野次ばかりで、知能がまるで子供のようで覇気がなく遅れすぎた慮外者集団を相手にするのは、本当に心身ともに疲れるというものです」

ここまで誹謗されて、桑島をはじめ黙っている者はいない。一斉に怒号が浴びせられ、もはや議場は乱闘寸前にまで緊張状態が悪化していた。地方議会にして、まして漁野市のような小規模な市の議会においてここまでの緊張状態は、実に久しぶりの出来事だ：いや、久しぶりを通り越して市政施行後50年強もの歴史の間では前代未聞のことであるう。

「……」

市役所本庁の庁舎、そこは玄関口。1台の車が、ずっと停まっていた：「ホンダ・フィット」、実に変哲もない車だ。日常生活でも違和感はない。ただ、唯一の違和感は停めるべき箇所とも言つべきか：ともかく、1台の車がずっと停まったままコックピットに1人の男が、じつと庁舎を見つめたままだ。言い忘れたが、このコックピット内にいる男の名は、高知県警本部警備部公安課公安捜査係の刑事・逢沢大介。公安警察の人間としては、実に特殊な経歴をたどっていた：周りはキャリア組出身が多数、しかし逢沢は刑事や交通・生活安全まで経験したノンキャリアの叩き上げ。もともと公安捜査係は、警備部公安課の中でも指折りの能力が劣る人たちや、素行の問題を指摘されている“問題児集団”の部署というレッテルを貼られている。

「……ヤツは？」

1人の男が庁舎から出てきた：何時間、果たして張り込んでいたのだろうか。それぐらい、気の遠くなるほど根気の必要な張り込みから解放されるやいなや、コックピットから出てきて男を通せんぼする。

「……どけよ。時間ねえんだからさ」

「市議会議員、若手にして新進気鋭のホープ。“中土佐の一匹狼”、

桑島庸介：「そうだろ？」

なぜ自分の名を知っているのか？…公安であれば、さもありません。別に造作もないことだ…すると、逢沢はサングラスをとって品性のよい顔立ちを桑島の眼前に晒す。

「何かあつたな？」

「見ず知らずのあんたに、話す義務なんてない」

「…新聞記者の彼女にでも聞こうかな？」

深江のことか？…ますます、疑惑と困惑の視線を逢沢に向けていく桑島がそこにいた。そう、桑島が1人だけ庁舎を出てきたのには意味がある…闇雲な作戦を直感だけで敢行するほど、桑島は馬鹿ではない。並々ならぬ恐怖感と、想定外の出来事が起きる…それゆえ、桑島は準備を整えていた。“熟慮断行”…戦国時代の関東地方を席卷した大勢力・小田原北条氏の第三代当主、“東の謀将”北条相模守氏康を思い起こす。

庁舎内は騒然としていた…議場周辺が慌しくなる。まさか、議会の開会初日に議員側が伝家の宝刀をいきなり使ってきた。いや、横谷の前ではまさに先手必勝といったところか。何かと言われれば、いわずもがな“不信任決議”を提出したのだ。頃合をしっかりと、桑島の知らないところで原たちは根回しで提出のタイミングを画策していたのだ。議員側を代表して、“漁野のマドンナ”と呼ばれていたベテラン女性議員・中道彩子が議場に立ち、長い演説で次々と横谷を口撃する。横谷の透視能力とやらも空しく、決議は1人の反対者を出さずにあっさり可決・成立となった。その休憩時間、妙なオーラを感じ取った桑島が出てきたという流れだ。いったい、そのときの議場はどうだったのだろうか？…逢沢は追いかけて、桑島の前に再び立つ。手をしっかりと、逃げられないように握り締めながら。

「このまま、横谷佳彦を市長の座に居座らせる気か！」

逢沢の声がこだまする。横谷の名を聞いた桑島の表情がこわばる

のは、無理もない話だ。沈黙を赦すまいと、逢沢は言葉を続ける。  
「…彼女が記事書いてくれるだろうよ。隠しても無駄だ…俺にだけ話せ。そこらへんの素人情報屋どもと違って、お前のことまでわかるように口外なんてしない。したら、俺の場合は今度こそクビになっちゃうがな」

手を離せといわんばかりに、逢沢の腕を指差す桑島…

「ある程度のことしか言えないぞ。あんたを信用してるわけじゃねえんだしさ」

桑島と逢沢、この2人のお互いの出会いは最悪な印象をもたらした。桑島はついに、重い口を開く…あの議場での出来事を。

「5話に続く…」

## 内憂組曲（後書き）

長らくお待たせしました…ここからが本番といったところです。そういうことで、地方自治法と公職選挙法はじめ、法律も含めた政治用語・警察用語・隠語が頻発していきます。

そして…いらっしやるかどうかはさておき（笑）、お待たせしました。逢沢大介がようやく登場です。この登場のしかた…どうなんでしょうねえ。一歩間違えると、どこかの変質者のような印象ですよね（汗）。まあ、普通に生きていればこういう人に付け回されることはないわけで…桑島や深江の情報がわかつているというのも、ある種で恐い連中ですよ。公安は果たして敵か、それとも味方か。さてさて、荒れましたね…初日からこの調子とは、予想されていたでしょうか？…不信任決議の審議の経緯は次回に持ち越されまして、たけど、“漁野市長”横谷佳彦の議場デビューは皆さまの目にはどう映りましたか？…施政方針演説の中身に、果たして共感できますか？

仮に市議会議員の1人だしたら、横谷市政を存続させるべきか。そして不信任決議が議会の開会初日に提出されて、どういう対応を取るのか。また、桑島は関わっておりませんが元議長・原や不信任決議を提出した会派を代表して演説した中道ほか、

「決議の提出を巡って根回しをしている」  
とのことです。鳥取県の前県知事・片山善博氏が指摘してしまいたけど八百長議会とも翼賛議会ともいわれる運営でしょうか。

案件に関する賛否さえも、会派をまたいで拘束する…無所属、且つ会派にさえ属していない桑島がその点で羨ましく、自らの意志で賛否を決められるわけで、運良く横谷に対する反旗に関しては一致していたのが幸いであるべきか。とまあ、私にはそういう見解で進めさせていただきました。



あ、ちなみに最初のほうで桑島に食ってかかった議員さん…まあ、明らかに女性ではありませんが中道とは全くの別人ですのであしからず（笑）。

横谷へ不信任決議を突きつけて、壇上で正当性を演説した市議会議員・中道彩子くななみち・あやこ>役にはあき竹城さんをイメージしました。

もちろん、柳原可奈子さんをイメージしたと前述した彼女率いる“横谷佳彦親衛隊”たる女性サクラ集団も出ております。高知県知事…もうバレバレかも？（笑）

加えて、6人目のメインキャラの構想が固まりましたので報告します。さらに横田寿彦（主に第3話で登場、市長選の大本命といわれていた元・農水省官僚）役も板尾創路さんのイメージで固めました。そして次回、新たな勢力が漁野市を席卷します…ヒントは『参院選』『政治右派・経済左派』『底辺政党』『明治時代に対する、過剰なまでのロマンティシズム』『穏健派と行動派（過激派？）』です。

## 左右狼狽（前書き）

不信任、のち想定外の秋：それでも不敵に嗤う市長の自信の裏に潜む、“成り上がり”政治勢力と相対するのか？

## 左右狼狽

「横谷佳彦を市長の座に居座らせる気か！」

強い口調で桑島に言つてのけた、1人の男：公安の刑事、逢沢大介。何も知らないまま、おめおめと本部には帰れないという強い意志も伝わる。横谷の名を聞いた桑島の顔が、こわばるのも決して無理な話ではない。だが、横柄にしか見えない逢沢の態度に、桑島は不信感を露にする。

「ある程度のことしか言えないぞ。あんたを信用してるわけじゃねえんだしさ」

重い口をついに開く…つい先ほどまでであった、議場における紛糾劇を。

「議長！」

「…中道彩子君」

2時間ほど前であろうか、横谷が提出した“市長室の分室を彼が経営しているとされる高尾山の一角にある農場に置くための市組織条例改正案”が全会一致で否決された矢先のことだ。

「議長、僕の提出した案はまだ終わっていない」

「…市長は静粛に」

ここでもう流れは決まった…桑島はまわしていたシャープペンを止め、じつと議長を見る。やはり、原幸治ほか桑島を除く17人の議員らが議会の始まる前に極秘で集まって、横谷を追い遣る作戦を練っていたのだろう。こんなことになっても、桑島には想定内であった。ただ、一抹の不安は消えないままだ。

（まさか、初日に出すとはな…吉と出るか、凶と出るか）

珍しく、じつと中道の答弁に聞き入る桑島…それもそのはず、横谷への不信任決議が提出されるのは想定内だ。しかし、議会の初日に提出されるとはさすがに想定外だ。自分以外の17人の総意は、

やはり一刻も早い横谷市政の終幕なのだろう。彼らとは異なり、横谷の嘗めているとしか思えない選挙公約への反旗が主な原因である桑島だが、最終的には横谷の市政からの退場を願う気持ちは全く変わらない。

「先の市長選におきまして、市長は民意によって選出されたと仰られましたか…」

中道は饒舌に、目の前に置いた原稿を見ながらではあるがその演説は止まることがなかった。そして、中道は続ける。

「私たちは、とても民意に反した結果が出たという認識で一致しております！」

そこで大勢の議員が、割れんばかりの拍手をもって中道に援護射撃をする…しかし、桑島だけはやはりその輪に加わりうと言つ気になっっていなかった。中道が氣勢よく演説を続けていたとしても横谷にはダメージすら与えている印象がないのが不気味に映るからだ。

(おかしい…)

自分の立場が危なくなる、というのに横谷は平然と中道の演説を聞いているのか否かわからないままの態度を続けていた。いや、よほどの自信があるのかもしれない…すでに不信任決議提出は想定内、といわんばかりに。事実、桑島を除いた17人の議員たちは市長選の結果を受けてすぐさま市内センター街某所にて極秘裏に会合をもって、横谷への議会開会後の不信任決議案即刻提出を満場一致で合意にこぎつけた。そんなことは、会合に出席しなくても桑島にはお見通しだった…全力で横田を支持し、かつ選挙戦にも介入してきた連中がおいそれと横谷を認めるはずがない。単なる情緒先行か、政策の否定か…この差はあるが、漁野市議会議員18人の総意は

「ノー、横谷新市政！」

で完全に一致している…大きなベクトル、という面においての向きのみではあるが。そして、中道の饒舌は佳境を迎える。

「そこで、先の市長選にも大いなる疑問があります！」

確かに、横谷の選挙活動そのものが疑問だ…本命とされた横田寿

彦、そして共産党系の米田幹雄の2人と大きく異なり、横谷が選挙活動を始めたのは公示日からである。だから、2人と違って活動時間がたったの1週間…いや、もつと言えば実質はもつとなかったかもしれない。しかも、横田や米田は無所属で出たのに対して横谷は『黎明党』として戦った…漁野市のような田舎町の典型を行く場所で、元来だと横谷の付け入る隙など全くないはずだ。それなのになぜ…桑島さえ、疑問を挟む場所だ。

「なにゆえ、このような不利といえる状況で…逆転などありえない中で、このような結果が出るのか？結果に、不正があると思いません。市長、貴方の選出はどう見ても悪意ある不正が潜んでいると思えない！」

中道の饒舌はさらに激しさを増し、ほかの議員たちも乗じて拍手などを送っていた…どう見ても、不信任決議案の流れは決定的なものである。桑島さえ賛成するだろう…上段の傍聴席にいた深江には、ありありとわかり出した。

「以上をもちまして、市長に対する不信任を決議するに至る経緯であります！」

拍手は最高潮…もはや流れは決まった。その趨勢に逆らうことなく、桑島までも投票の際に堂々と賛成票を掲げてまたも17対0の満場一致で可決した。割れんばかりの拍手が議場の空気を支配する…

（横谷新市政、早くも滅びたり！）

横谷を市長の座から追い遣る目的はありありとわかった…しかし、横谷は可決の瞬間から薄気味悪い微笑を浮かべつづけていた。その薄気味悪い空気を、ただ1人…桑島だけは察していたのだった。

（あいつ！まさか…）

そのまさかかもしれない。浮かれる暇があるなら、とそそくさに議場を去っていった。そう、不信任決議案が可決した場合に市長が採れる選択はたった2つしかない。可決した日から10日以内に自

らが市長を辞職するか、もしくは市議会を解散させるかだ。前者を目的とした原や中道らであるし、桑島とて前者であればなおさら嬉しいことだ。しかし、

(想定している最悪のシナリオになっちまった…)

桑島は議場を去って、庁舎を出る頃には後援会の会長に電話して選挙の準備にあたるように命じていた。最悪のシナリオ、それは横谷が市長という権力の座にしがみつくこと…すなわち、採る選択が市議会の解散だということ。ほかの誰もがそのようなシナリオを予想していない中、桑島はただ1人予想していたということになる。案の定、議場では…

「ふふふふふ、ふはははは！」

歡喜の空気を一気に沈黙させる、大きな笑い声を発しだした横谷…なにがおかしいのか？そう、桑島の予想は全く外れていなかったのだ。

「こんな真似をして、ただで済むと思っっているのですか？…政治の世界から去るのは僕じゃない。貴方たちですよ…」

壇上に立った横谷は、不敵な笑みを浮かべつつ議員たちに豪語した。

「衝撃の宣言を今すぐしまししょうか？…不信任決議の提出は僕にとつて、全て予想できたこと。前にも言ったはずですよ…僕には透視ができる。ありありと、そのオバサンの手に持っていた不信任決議に際しての代表質問の原稿が見えました」

今までにない、殺気にも似た怒号が鳴り響く。一方、感激しているのかサクラの女たちが泣き出ししている。深江には相変わらず、横谷の心理が読めないでいた。

「そして、もう1つの衝撃を与えましょう…この衝撃は、貴方たちにとって精神的なダメージは計り知れないものになる」

そう言つや、一呼吸おいた横谷が言葉を続けた。

「……議会を解散する！」

現場の空気が一気に凍てついたのは言うまでもない。とても、万

歳三唱を唱える心理にはなれない17人の議員たちである。

「…また選挙かよ」

経緯を聞いた逢沢は、あっさりと桑島に言つてのける。

「俺たちの仕事、増やすなよな」

「…そんな気はねえよ」

逢沢の仕事が増えようが、桑島にはどこ吹く風だ。ともかく、もう1度議場に戻らないといけない。そうでないと、今度こそ横谷の横暴で漁野市が名実ともに破綻するほかないからだ。桑島の決意は固かった。

「長話なら付き合えないぜ。俺にや、やるべきことが山ほどある」

そう言つて桑島は、そそくさと逢沢に背を向けて去つていった。もう選挙の準備かよ、と逢沢は半ば呆れ気味だった。とはいえ、横谷が市議会の解散を採るとはよほどの自信があるのだろう。もう、彼のブレーンをはじめとして支持者らが集結しているかもしれない。逢沢にとっては、恰好の資料を再整理するためのサンプル集めとしか思っていないのだろう。しかし、本心は違つていた。逢沢は、横谷の台頭を心底恐れている心理がかなり強いといえよう。

（横谷の裏にどんなとんでもない思想が、宗教が潜んでるか。わかつてないんだらうな、あいつ）

ともかく、2人の第一印象はお互いに良くないどころか悪いままで終わつてしまった。このとき、果たして2人が横谷市政を打倒するために意気投合するとは誰が予測しえただらうか。

自分の自宅兼事務所に戻つた桑島。今までにない緊張感の中に入った疲れか、そのまま眠つてしまった。

そしていく時が経つただらうか。騒々しい声で、桑島は眠りから目を覚ました。こういつときの桑島は、実に不機嫌なものであつて、グツと空を見ながら近場の漁野駅前を見ていると、見知らぬ男たちの集団が轟音にも似た声を張り上げて演説をしているではないか。

「まったく、近所迷惑ってモン考えろよ……」

その矢先、桑島の携帯電話が鳴る……駅前商店街の不動産屋の主からだ。

「助けてくれよ、恐えよ……」

いったいどうしたというのか？……ただの轟音じゃないのはわかった。いてもたってもいられなくなった桑島は、すぐさま不動産屋へと足を運ぶ。猛ダツシユで向かったがゆえ、すぐさま不動産屋についた桑島……姿を見るや、主は一気にすっ飛んできた。

「おいおい、どうしたんだよ……」

「さつきからおかしいんだよ、あいつら……」

あいつら？……なるほど、あの轟音がなり立てて演説している連中だ。直感でなくても、桑島にはすぐわかった。なにより怒りが彼の感情を支配する……すぐさま、店を出ようとした桑島を主は必死になって止める。

「離せよ！」

「なにやっつてんだよ、あいつらヤクザだよ……」

ヤクザ？……確かに口調はそれだ。でも、なぜ利益もへったくれもない漁野市なんて場所で街宣する必要があるのか？……ともかくじつと聞き入るほかなかった。それどころではなく、中身さえ把握していなかったのだから。

「良識ある漁野市民の皆さんは、今こそ立ち上がるべきときなんですよ！」

メガホンから轟音混じりの声で演説する1人の男……そして、その男を私的に護衛するかのような布陣で立ち位置にいる数多の男たち。いずれもスーツ姿とか、ともかく喋りだけでは右翼だ暴力団だとかいうオーラは感じさせない。桑島には、それが異様に見えて仕方がない。

「横谷佳彦市長は今、懸命に利権をむさぼるだけの市議会議員どもと争っているんです！ たった1人で、四面楚歌の中で！」

同じ意味の言葉を2度も使うな……そういう突っ込みはさておき、



男の饒舌は留まるところを知らない。

「今や、この高知県漁野市という場所は全国に数多増えている愛国者の熱い眼差しのもとにあるのです!」

愛国者?… いったい誰のことだ?

「街宣右翼なんてものではない!我々は、この日本を所狭しと動いて憂国を説く愛国者なのです!いわば、保守の新しい運動の道を提供しているのです!」

… だが口調が“街宣右翼”そのものではないか。またここで、突っ込みが桑島の脳内で2度目の炸裂となる。

「この日本、外患勢力が今か今かと国内で蹂躪を展開しようとしている非常にまずい状態です!我々はそのような勢力と、断固として戦いを挑んで勝利を掴まねばならないと使命感を持って挑んでおります!」

それが漁野市とどう関係があるというのか?… 男の演説はまだまだ続くようだ。

「横谷佳彦さんの漁野市長への就任は、まさにこの漁野市という場所が外患の猛威から守るための最善の選択であるという認識を否定しません。漁野市民の皆さんの良識が、議会にカウンターパンチを浴びせたのです!では外患とはどういうことか?… 直近にある国々を思い出せばすぐわかることです。どのような愚民思考でも、すぐにはわかるでしょう?… そう、その国とは中国・韓国・北朝鮮!この特定アジアたる3つ以外、果たしてどこがあるというのでしょうか!」

いったい何を言い出すのか、この男は脈絡なく喋っているようにしか桑島には思えない。次第に怒りも甦ってきた。

「しかし、そんな横谷市長を市議会議員どもは1人残らずいじめたおしたんですよ!… まったく、人のやることとは!まして日本人の純粋な血筋を持つ者らのやることとは思えない所業にうつて出た!… これは横谷市長に対する最大の叛逆にして、無謀な挑戦としかいえません。こういうのをです、日本人の面を被った下賤な支那・

朝鮮民族の質そのものなんですよ！…醜悪なまでにその姿を晒してくれた市議会議員という怪物どもを蹴散らし、純粹なる日本人の手に漁野市政を取り戻す絶好の機会を横谷市長は与えてくださったのです！」

まるで中国人や朝鮮半島系人種のような扱いを議員らにするその男に、通りすぎる市民は内心怒りを隠せないでいた。ただ、相手が相手ゆえに静かな怒りと表現したほうがよいだろう。とても漁野市民という空気を感じない…桑島にはありありと、それがよくわかる（どっからどう見ても、人種差別主義じゃねえか…）

しかも、漁野市のことなど微塵も触れておらず、ひたすら自分たちの主張と絡めたり横谷支持を訴えているだけにしかない。市長選の段階でもそうだが、桑島のみならずほとんどの市議の取り巻き方面に横谷へと票を流した面々はいない。

「横谷市長の義挙を支持しましょう！漁野市民の宿命にして義務です。貴方たちが選んだ市長でしょう？…だったらわかることです。漁野市を潰そうと画策する支那・朝鮮の工作員を代行しているだけにすぎない市議会議員どもを1人残らず議場から追放できる、そんな正義の1票を市議選の当日に発揮することではありませんか！」

「そうだそうだ！」

「大陸やら半島やら、帰りやがれ！」

「ゴミはゴミ箱に入れるんだぞ、小学生でもわかるぞ！」

何がゴミだ…桑島はもう怒りなんて次元ではない顔つきになっており、主さえも恐れおののくほどだった。そんな感情を表に出していた桑島だが、裏でこそつと動く空気を見逃さなかった…そう、逢沢だ。いや、逢沢だけじゃない…ほかにも多くの空気を感じた。

（公安？…もしかして、マークか？）

主の制止を振り切って、桑島は演説する男たちを尻目に逢沢の元へとしれつと近寄っていく。もちろん、逢沢は桑島に見つかって舌打ちをすかさず見せる。

「俺もまだまだ慣れないな…」

「慣れてもらいたかねえよ。正直、俺かと思っただがな」

「…そんなわけないだろ？」

やはり、桑島は逢沢の人柄を受け入れられない…そんな中、ようやく長かった男の演説が終わる。そう思うや、今度は新手的男がメガホンにスイッチを入れて演説を開始しようとしている。

「中本行弘さん、ありがとうございます。では…私は『中本行弘首相「ソウリ」を実現させる市民の会』高知県支部長を仰せつかりました、異誠直くたつみ・のぶなおです！」

どうやら、先に喋っていた男の名は中本行弘くなくもと・ゆきひろくというらしい…中本行弘、この名を聞いた途端に桑島も逢沢も互いに目を合わせあっていた。

「異誠直…中本行弘の一番弟子を自称している。まあ、これは事実だろうが高知県出身じゃないのに高知県支部長とはずいぶんごむたいな話だな」

逢沢がポロツと桑島に話す…異のことは、それなりにネットや情報屋で情報を掴んでいたが逢沢ほどの情報はなかった。

「あいつら、『』『「ナントカ」市民の会』なんてのを無数に立てているよな？」

「…さすがだな。“中土佐のウルフ桑島”は伊達じゃないな」

「褒めてんのか、けなしてんのか？」

相変わらず逢沢は口が悪い…ただ、逢沢以外の公安捜査係の面々はどうもマークに乗り気ではないようだ。

「無理に引つ張り出したんだ」

「…横谷と無縁じゃねえんだろ？」

「ご名答、と言わんばかりに逢沢が頷く。そうまでして横谷をマークする理由はどこにあるのか？」

「ヤツらはずっと、この漁野に選挙が終わるまで張り付くみたいだ」「どういうことだ？確か、中本つてのは…」

今年夏に行われた参院選で、結党後15年の節目にして4度目の挑戦と相成った右派政治団体『立憲明政党』から出馬した中本だっ

だが、ネット上の人気と反比例するが如くリアルの知名度の壁の前に大惨敗を喫した。もことから、中本が加入した段階から古参支持者や幹部・党員らの不満がくすぶっていたのに、さらに拍車をかける結果にもなっている。まして新体制で中本を党首補佐に抜擢して、前党首支持派を根こそぎ幹部の座から下ろしたがゆえに党内冷戦の前段階にも至る事態だ。

「で、見るも無惨な行動右翼も同然に転落したわけね」

冷静に桑島はことを分析していた。もともと『立憲明政党』の本流と目される前党首支持派の大多数は、他の団体に籍を置く者らとも討議をしあつたり、それなりの愛国・愛郷主義をきつく出してはいたものの、あそこまで乗り越えたレイシズム・ファシズムの次元ではなかった。

「言い忘れたが、あいつらは横谷のいる黎明党とは同盟関係にある」  
逢沢の発言は、桑島にとって爆弾発言以外の何ものにも例えられないものだった。両党は政治的にも、かつ経済的にもベクトルの向きが全く逆向きのはずなのに、まるで極左カルトを抱き込んだとされる民自党のようなことをする気なのかと問いたかったのだ。

「立憲明政党は思いのほか、経済のベクトルがふらふらしている。中本派が加わってから、ますます拍車をかけている…経済政策は、黎明党の政策をそのまま採用するんだらう。過去の綱領とか、そんなもの関係なくなぐり捨ててな」

「要は、立憲明政党の連中が大挙して漁野市議選に参戦して横谷市政の与党を作り上げる…ってえとこだな」

しかし、立憲明政党は四国4県のうちで高知県にだけは地方組織が発足していない唯一の県だ。どうやって候補者を立てるというのか？

すると、巽が饒舌を鳴らしているその場に、真正面から突っ込んでいく1人の若い女の姿を桑島と逢沢は同時に見た…深江だ。

「チッ…あの馬鹿！」

「何する気だ？」

桑島は呆れ、逢沢はその姿にある種で見とれていた。深江はそんな2人の思惑も関係なく、巽の前に現れた。

「…静かにしてもらえませんか？」

それでも、巽はかまうことなく饒舌を続けていた。そして、彼の周りを複数の男が取り囲んでいく。

「なんなんですか、貴方たちは？」

「見たらわかるだろコラ、演説だよ！」

「横谷市長の義拳を称える演説してんだよ！邪魔すんな！」

もはや、深江に対する言葉の暴力とも言つべき怒号を並べ立てていた。まさに、多勢に無勢を通り越した四面楚歌の状態だ。

「どこが義拳なんですか？…権力濫用の暴挙です！」

「テメエ女、工作員かコラア！」

ますますその怒号の勢いは火に油を注ぐが如く、深江に容赦ない罵倒を浴びせていく。

「自分が高知になかなか来られないからって、東京に分室を作れないでわがままです！」

「わがままじゃねえよ！」

「横谷市長は忙しいんだ！市長だけやってんじゃねえんだよ！」

だが地方自治法では、議員に関しては特に兼業は厳しい制限を加えているはず…ほとんど禁止も同然だ。まして市長など規定があるうとなかるうと、そのような暇が許されるほど楽な職ではない。そんな中でも、巽は陰に隠れてしまったがとんでもない発言を連発していた。

「いくら愚民思考に冒されていて、もうわかっていることでしょう？…このままでは何も変わらない。民自党が総選挙で負けて、仮に自平連による新政権なんてことになったら日本は終わりますよね？…こうなったら、我々立憲明政党にお任せください。今年夏の参院選では、高知県で4127票！…うち漁野市でも198票が我々に入りました。たったこれだけでも、我々の方針を支持してくれて

いるとあつては希望が見出せます！…一緒に築きましょう！極右軍事独裁による一党独裁政権で、世界一の力強い軍需大国・日本を！そして道路特定財源から軍需特定財源へ！中本行弘さんは、仮に首相公選制が導入された場合にはすぐさま内閣総理大臣選出選挙への立候補をすでにブログで表明していますし、政策もすでに何度となく公開しています！…そして占い師からは、その選挙で中本さんは勝つて晴れて公選制導入後の初代内閣総理大臣として、力強く日本人を良き方へ指導してくれると言われました。織田信長を思い出しましたか？…彼もまた古い秩序を破壊して、新しき日本の姿を築いた戦国稀代の名将ですよ？彼の言葉を借りれば『天下布武』です！…この『天下布武』の旗印のもと、日本を新しき姿に変えて保ちます！」

巽の傍らにあつた旗が1つ強調される…そこには、確かに織田信長が印鑑に使用していた『天下布武』の4文字と信長の印鑑字体が刻銘されていた。その演説が陰に霞むほど、深江をよつてたかつて大の男が何人もいたぶるかのように困い込む姿に、果たして武士の姿が映るのだろうか？…恐怖と悲哀からか、深江はすでに泣きそうな顔つきをしていた。

(助けて…)

それでも巽は饒舌を止める気はなく、いたぶる深江を逆な意味で援護射撃するような罵声混じりの饒舌を続ける。

「なにが『天下布武』だ、ざけんな！」

「よせ！」

もう桑島には我慢ができなかった…すると、深江にはかり気を取られていた男たちの目線が一斉に桑島に向く。

「コノヤロー！」

「まだ作業員がいやがったか！」

「許さねえ！生かして帰すな！」

大挙して男たちが桑島に今にも襲いかかろうとした矢先、また大きな声が駅前にこだまする。

「おうおう、大の男が集団心理にのまれてんのか？『赤信号　みんなで渡れば　恐くない』って、いい言葉だよな！」

そう言うや、駅前バスターミナルへと降り立つ男1人を含んだ老若男女の大集団が現れる。そして、たなびく旗の数々に描かれている紋様には、桑島が何度となく見て馴染みのあるものが描かれていた。

「あれは…」

そう、“三つ鱗”である。

「北条さん…」

その名を聞いた逢沢は、思わず桑島を見た。そう。今をときめく元・民自党にして、現在は自平連の若手衆議院議員・北条照実<ほうじょう・てるざね>である。

「なんだデメエは！あ？」

男たちの流れが、桑島からその北条という男に目を向けられる。

「あれからなにも進歩してねえんだな…いや、なにも反省してねえんだな」

北条は大挙した中本の取り巻きである男たちを相手にたった1人、しれつと言つてのけた。当然ながら修羅場は必至だろう…身の危険を察した深江は、そそくさとその場を去った。そして、そんな深江の姿を見た桑島は思わず彼女を呼び止め、熱く身を守るかの如く抱擁した。

「もう大丈夫だ…あの人なら。よくやったな…」

安堵か恐怖からの開放か、桑島の胸の中で人目もはばからず泣きじゃくる深江…ますます、あの中本一派への怒りを沸き立つには十分だった。もうすでに、漁野市議選は前哨戦なんて次元ではなかった…もはや選挙戦なのだ。桑島は改めて、怒りを交えて勝つて戻ってくる決意を固めていた。

## 左右狼狽（後書き）

…どうですか？現実にあつたら一大事です（汗）。

横谷新市政、ここまでの混乱は予想どおりでしょうけど議会開会初日で不信任決議というのは想定外かもしれませんが。議会が不信任決議をどうこうすることはできませんが、可決のあとの選択肢というのは案外知らない方も多いのではないかと思います。展開の通り、市議会を解散するか自らが辞職するかのも二者択一なんですな。

ただ思い出してください…桑島の周囲でさえも、横谷に票を流した記憶がなく惨敗だと思つていたら市長になつていた。どうもおかしいと思いませんか？…ある種、中道はその可能性に言及しましたが当然の話ですね。しかし、横谷が決定打をつかませないのも想定内…もうここまでくると、彼ら同士の“ライアーゲーム”でしかない。自分が失脚するかもしれないのに、微笑を浮かべるわ可決のときに高笑いするわ、透視がどうだとか。そんなことを平然と言う男に市長なんて、普通はありえない話です。今後の漁野市を巡る、長い戦いの序章でしかありません。

そして、新たな勢力が席卷しました…『立憲明政党』ですね。桑島や横谷はじめ、今後の鍵を握る勢力でもありません。政治的にも、経済的にもどつちもベクトルの向きが互いに逆向きの政党が同盟関係とは、まるでどこを皮肉にしているかは想像できるかと思えます。ええ、野合そのものです（笑）。まして、1度は永田町を目指した男があのような発言をする…これね、モデルが現実にいるんです。そして、ああいった饒舌は地元が地元ゆえ実際に見たことがあるんです。いやはや、どうという印象を与えるか…地元の市議会議員をまとめて、あんなレイシズム丸出しの発言で罵倒してもね。どうなるかわかったもんじゃないです。



というか、首相公選制に踏み込んで首相を目指す右翼活動家とその取り巻き集団とか横谷のバックにいる宗教の存在とか…もう、木村拓哉さんが主演するCX系列・月曜21時枠ドラマ『CHANG E』とは全く違うダークでドロドロな地方政界を、今後も手がけてまいりたいと思います。はっきり言います、もうお気づきかと思いますが

「新旧問わず、利権に対しての立憲明政党（とりわけ中本派）はど  
うしたいのか？」

その答えは、展開にある台詞の中にしっかりと隠しておりますので  
（汗）。

さて、メインキャストですが…もう6人から9人に一気に増やしました。そのうち、もう2人までのこの回で一気に出しました。

北条照実と中本行弘、互いに永田町を意識する勢力ですね…ただ2人の境遇は天地ほどに違うわけで、次回に控えるであろう修羅場に期待を寄せられる方は多数いらっしゃるでしょうね（汗）。ちなみに中本の弟子・異誠直くたつみ・のぶなお>役のイメージはま  
いど豊さんです。異の発言と倫理は、中本以上に許せない！（怒）

## 少数激戦（前書き）

史上空前の市議選、幕開く…果たして何を“保守”するか？  
わずか1週間の短期決戦、悲喜交々が小さな漁港町を覆う！

## 少数激戦

漁野駅前は騒然としていた。駅前で街頭演説をする、中本行弘が率いる『立憲明政党』やその支持者の面々と高知1区選出の現職衆院議員・北条照実とその支持者の面々が互いの旗をなびかせて一触即発の空気を醸し出している。

「この売国奴が！裏切りやがってよ！」

「あ？…別に裏切っちゃいねえよ、てめえらなんざ」

売り言葉に買い言葉、北条が言い返せば今度は中本の一番弟子・異誠直が即座に感情まじりに反論する。

「自平連こそ、日本を滅ぼすんだ！」

何を寝言を言っているのだろうか。自平連に参画した勢力の中には、立憲明政党の結成にも無縁ではないのを北条は知っている。ぐだぐだと、過去の縁を簡単に切れるようなことを公然とよく言えるものだ。

一方、桑島は深江をしつかりと抱きしめていた。

「おい、守りたいのもいいがスキヤンダルには気をつけるよ」

特に毎朝新聞にとでも言いたいのか、せつかくの雰囲気は逢沢がぶち壊す。

「それに、このままだとお前の選挙戦にも影響が出るかもよ」

そう言って、逢沢は場を去る。…というより、北条と中本ら駅前で街頭演説でのいざこざの観察と収拾に向かうといったところか。

(つつたく、なんだよ)

相変わらず、逢沢という人物像が読めない桑島だった。選挙とは戦である、勝って祝いの酒を飲む。そして、酒を飲み尽くしたあとに公益に尽くせ。愛するものとはなんなのか、偽者のそれにとりつかれては政治家の価値はない。ましてや地方議員であれば、なおさらそれに気付かないといけない。桑島の決意はさらに強く固まって

いた。そう、もはや戦の幕開けはあの漁野駅前の騒ぎを見れば一目瞭然なのだ。

(ターゲットは、俺だろうな……)

横谷なら、十分に考えそうなことだ……桑島さえいなくなれば、あとの市議が全て生き残ったとしても桑島と比べれば工作など容易にできるからこそ、執拗に狡猾に狙おうと思えば十分な状況証拠だ。ただ、中本らの動きを見れば容易に彼らが漁野を去ると思えない……いや、横谷の意向を受けて東京から援軍も同然にやって来たのであろう。彼らの退散を望むのではなく、これを横谷との対決の延長線上に置くほかない。宣戦布告も同然だ……桑島は、こうして絶対に負けられない戦いに向かうのであった。駅前の騒乱も、逢沢の前で騒いだ一部の参加者を公務執行妨害の現行犯で逮捕した以外は思いのほか事態が進展せずに済んだ。中本らはそそくさとその場を去り、車に一樣に乗り込んで高知市方面へと去っていった。解散による、漁野市議選の公示日は近い……現職・新人ほか18人の枠に対して何人が出るのか?……先の市長選に出馬した、共産党の米田幹雄元市議も復帰を狙うのか?……市長選のインターバルを置かず、またしても漁野市の熱い秋の選挙戦が幕開くことになる。

あれから数日が経ち、桑島の選挙時のみに使う臨時事務所の周辺も慌しくなる……方々に情報屋を抱える桑島は、おおよそ地方議員とは思えぬ博識を兼ね備えており、すぐさま中本一派の動きも把握していた。

「ただ、あそこで北条さんが現れたのは妙だな……」

情報屋の1人が事務所立ち寄り、桑島と2人でひそひそ話をしていたところであった。

「……思ってるより、横谷って狡猾じゃないかもな」

「結論を出すにや、まだ早えよ」

それと、情報屋は思わぬ情報を桑島にもたらした。

「やっぱ間違いないね、中本と横谷はグルだ」

もちろん、桑島には想定内の答えだ…さもありません、そうでなければあのタイミングで漁野駅前での演説は敢行しようがあるまい。ただ、それでも何か引掛かって仕方がない。

「偶然にしちゃあ、できすぎてるぜ…俺だけじゃねえ、市議全員がターゲットかもしれないぜ」

桑島は本心を吐露する…黎明党の公式サイトに、はっきりと書かれていた一文が頭にこびりついてた。

「まずは首長を我らが手におさめ、その勢いさながらに周囲を寵略して自治体に乗っ取る」

黎明党の選挙心得というものだそうだ…市議ではなく、市長選に参戦する理由。漁野市議は桑島を含めて、18人全員が横谷市政に反旗を翻している有り様…その体制がそのまま続くようであれば、さすがに横谷も危機感を表すだろう。

「じゃあ、今度の市議選は…」

「下手すると定数分の独自候補を立ててくるか、それとも…」

「…それとも？」

「いや、なんでもない…」

そう言つて桑島はトイレへと、その足をめぐらせていく…市議選の公示まで、また日は縮まる。

「…クソつたれが、どういうことだ!」

一方、中本・横谷の陣営も焦っていた…どういふわけか、独自候補を立てるだろうという桑島の予想はあたっていたものの、結果としてはその独自候補を送り込めない状況になってしまっていた。

「また、あの男の仕業か…」

「あ？」

あの男と口走つた横谷に対し、議場にサクラとして動員した横谷の御側人たる多くの女たちが制止しようと側にさらによつてくる。

「ダメですよ横谷様、あの御方の名を出すのは…」

「いいから出せよ。別に誰も言う気はねえんだからさ」

迫るのは中本：結果を焦るのも無理はない。前回の参院選で自らとしては不覚の大惨敗を喫したこともあり、自信をもってついてきていた多くの候補者たちを奈落の底に突き落とす結果に導いてしまったことから、かつて本流とされた面々からのきつい目線を目の当たりにしている強迫観念に支配され、もはや一刻の猶予もないと思っ  
ているのである。漁野市長選、そして今回の解散に伴う市議選とステップアップで再興を謀る目的がありありとわかる。

「すべて、ヤツにはめられた：まだ掌の上、ということか」

「そいつが黒幕なんだな？」

「：なんのために、僕はヤツから権限を根こそぎ奪ったと思っ  
てるんだ？」

中本の介入も無視して、側にいた体格の豊かな女に話し掛けてきた。その女こそ、リーダー格といえる雰囲気を見せている。

「とにかく作戦を変更する必要がありますね：中本さん」

「いまさら、どうにもならねえんじゃねえのか？：全部狂っちゃまったよ」

「そう言わずに、僕を信じてくださいよ」

不気味に微笑を浮かべて、横谷はすつくと席を立つ：横谷の姿がなくなるや、すぐさま巽が中本に寄ってくる。

「大丈夫なんですか？」

「：大丈夫も何も、横谷を信じるしかねえだろ。信じてついていく、今の俺たちにやそれしかねえよ」

その後も横谷の怒号が鳴り響く：どうやら、横谷が手配したはずの独自候補の選考がなぜか外部に漏れて、公職選挙法の規定により選抜された18人全員が立候補できなくなったのだという。そして中本一派は高知市内へとその足を運んでいた：横谷の指示であろうか、それとも彼らの独断専行なのか。真意はまだ凶りかねるが、彼らは新たな街宣先として高知市のセンター街を選び、立憲明政党の地盤を高知にも築こうというのだろう。どのみち、市政与党を独自候補を擁立して構成する目論見が外れた横谷は、舵取りの変更を

迫られているのだ。

( 龍略してやる、と選挙心得に書いたのが間違いだったか… )

よもや、現職が全員当選したときのシナリオまで想定せねばならないとは、横谷には想定外だった。いや、龍略するといつても桑島だけは取り付く島もあるまい。

「お前を市長の座から引き摺り下ろしてやる！」

この言葉を片時も忘れていない横谷だが、本格的に牙を向けて叩き潰しておかなければ憂いを断てない。自宅に籠りつきりで考え込む、そんな横谷を尻目に中本や巽たちは高知市内に乗り込んで、センター街に程近いはりまや橋にあるホテルに固まって泊まりこみ、明日の街宣に備えて鋭気を養うためだとして夜の街へと繰り出して、酔うなどして大暴れしたそうだ。

夜がふけ、朝を迎える…漁野市議選の公示前日にもあたる。はりまや橋の交差点付近、許可もないままに男や女が大挙して、メガホンなどを準備している。

「まもなく、“日本のメシア”中本行弘先生によります、憂国の街頭演説がここ…高知市は、はりまや橋におきまして、開催されます。日本の現状を誰よりも憂い、そのために神々が地上にもたらした救世主の最高の訓示が開かれます。そのあとになります。立憲明政党の入党説明会および漁野市議会議員選挙の展望予想を兼ねた2次会も開かれますので、皆様ふるってご参加くださいませ」

1人の女が、行き交う通勤客や観光客らに必死に宣伝する…商店街の裏手には、三つ鱗の家紋が描かれた旗を持った者らが何人かいた。そう、北条の後援会員の面々だ。

「メシア？」

「…ただのプータローオヤジじゃないの？」

「北条先生の言うとおりだね…」

小声ながら、節々に中本の悪口でそこだけ盛り上がる…もちろん、北条が内偵のために送り込んでいるのだ。そうこうしているうちに、

中本が準備を終えてメガホンを受けとる。ついに、あの怒号が高知市内にこだますることになる。

「ま、メシアって言われるとくすぐったい気もしますけど…英語だからね。救世主、って意味だそうです…日本は不況に苦しんでいるゆえに救世主が望まれる。なんて考えじゃないんですね…実は。外敵から日本を守り、救うために私は立つたのです。皆さん、どうして私を国会に送り込んでくれなかったんですか？…皆さんの選択は大いに間違っています！民自党の議員の中には、私と思想を共有する多くの人たちが外敵と戦っていますよ！…雇用がどうかとも無縁じゃない。皆さんの職場に、支那人や朝鮮人はいませんか？…それとわかる人もいっぱいいるでしょう？」

何を言い出すのか、脈絡が相変わらずあるようでない。外敵と雇用、どんな関係があるのか。

「衝撃の事実を、メシアと呼ばれている私から皆さんに通告しましょう…彼らは本国の密命を受けてやってきた、工作員なんです！揺るがない事実なんです！」

いきなり何を言うのか、中本は真顔で彼らに向けて演説を続けていく。

「移民構想が先ほど、民自党の勉強会から発案されたと報道がありましたね？…あれの真相もつかんでいます。一部の自平連の議員と構想をまとめて国会で審議にかけてクロスボーディングを活用して可決させようと陰謀をひそかに企んでいるんです！…その陰謀に加担しているのが、ここを地元としている北条照実なんです！…これで餌を得た支那や朝鮮では、早速本国で工作員のオーデイションをやっているんでしょうね！」

おかしい…北条は、超党派の若手議員の会合の場で移民構想をバツサリと斬り捨てた。少子化対策を放棄する気か、と。あらぬ疑惑をかけてきた中本に、後援会員が殺意にも似た憎悪を抱くのは自然のことだろう。それに、北条が民自党から自平連に転籍したのも、過度に民自党が盲目親米とも言うべき路線が本流を成していたこと



に対し、失望を抱いたからだ。

「中本さん自身が思っていることじゃないと思います…」

陰に隠れていた後援会員らに突撃を試みる1人の女…深江友璃子だ。きよとんとする面々…もちろん、名刺も渡して新聞記者だと承知させてもらい、かつ懸命に説得して取材をついに試みた。もちろん、彼らのことを思うと北条の大学での後輩にあたる桑島の名を出すのは必須なのだが。

「そもそも、昨日の夜はあの人たち…相当、暴れていました」

「なんだって？」

「逮捕者まで出たらしく、高知中央署に抗議街宣まで…」

「現行犯だろ？…当たり前じゃなかよ。不当逮捕とでも言いてえのかよ…」

「そんな感じでした。警察の人に腕をつかまれたら、『痛い、痛い』とかわめくように…」

「オイオイ、どこのカルト集団だよ！」

大声になってしまったが、さらに大声での街宣の声にいと簡単に消されたために不幸中の幸いだ。しかも、中本と横谷はグルだという証拠はないものの、偶然にしてはできすぎている。漁野市議選に関わることであれば、選挙区が異なるとはいえ北条とて無傷ではいられないところがある。

「北条先生も、気になってたところがあるからなあ…漁野市議選」

演説を終え、夜はまたもふけてゆく…翌日、ついに漁野市議会議員18個の椅子を巡る選挙戦は本番を迎える。桑島の選挙事務所にも、さんとさんと朝日の光が注ぎ込まれていく。真ん中には

『祈 必勝』

の張り紙が無数に貼られている。そして、目立つところには

『衆議院議員 北条照実』

と左下に申し訳なく書かれている1枚が貼られていた。もともと、桑島と北条は同じ大学の同じサークルに属していた。北条は桑島の

先輩にあたり、若気の至りで突っ走る桑島を指導もしたりしたこともあるのが北条だ。気がかりだといっていたが、桑島は明確に横谷に敵対宣言を公然と表明した。それが災いするかもしれない。この1週間、桑島には眠れない日々は続く。

「おはようございます」

そこに深江が現れる。しかし、ソファのうえで羽毛布団を羽織って桑島は気持ちよい眠りの中に未だいる。しかも、起きる気配は全くない。

「下手に起こしてやるんじゃないよ…」

「あ、どうも…」

顔を覗かせたのは、桑島と親しい不動産屋の主。深江にも仮事務所を紹介した男だ。

「戦いに備えて、鋭気を養う。…つてえとこだね」

「そうですね。取材しようと1番乗りしたんですけど」

「ほかにもいつぱい来そうだからね。今回は大一番だからな！」

大一番なのは、なにも桑島に限ったことではない。横谷への不信任案には全員が賛成票を投じた。しかも、その前職18人のうち病気を理由に不参戦を表明した1人を除く、桑島を含めて17人が立候補した。あの横谷のことだ。脱法行為も承知で妨害を仕掛けてくるかもしれない。もはや、同じ党派・党派であっても迂闊に接触もできないし、互いに信用しきることさえできないでいる。…疑心暗鬼だ。すると、不意に携帯の着信音が。深江の携帯電話だ。

「…おう。今度は市議選だったな」

電話の主は、もちろん清水耕輔。実に久々だ。いったい、どうしたというのか？

「予想外でした。市長選のあと、インターバルもおかずに…」

「馬鹿かお前、横谷にとつちや都合のよすぎるほど順調なシナリオなんだよ！」

「いったいどういうことだ？…やはり、横谷は妨害を仕掛けるとでもいうのか。」

「妨害とか思ってたら、その時点でまだまだだな。意味をもう1度よく考える…選挙って、タダでできるかどうか？」

タダ？…お金のことだろうか。そうだとすれば、確かにお金をかけないということはありえない。はっと返ろうとした、その矢先に清水は矢継ぎ早な言葉を残す。

「街宣だつてタダじゃねえんだぞ…」

どういうことだ？…さらに、街頭宣伝だともいうのか。演説にも、色々な器具が必要だ。最低でもメガホンがないとやっていけない。まさか、中本も漁野市内に張り付く気でのだろうか。そこに横谷…そして、北条とて無縁ではない以上は何が起きてもおかしくはない状態を容易に想像せざるをえなかった。深江は伝えることなく、他陣営にも取材を申し込んだりして精力的な取材行動を続けていた。快く対応した者ら、邪険に扱った者ら…悲喜交々の漁野市議選は、この日の朝8時から1週間の選挙戦に突入する。議員としての生死を賭けた、例年にない壮絶な戦いの火蓋がきられたのだ。

漁野市の市制施行後50年以上の歴史の中で、市議会が解散に追い込まれた過去はない。立候補者は皆が皆、前職の17人も新人の6人もあわせて完全に手探りの選挙戦を余儀なくされている。組織票で固めたくても、よもや横谷が解散に打って出るなどというシナリオは桑島にとつてもある種で想定外だった。

「こういうときはな、大手よりも地元メディアに注目してみるのも一つの手だ」

清水は深江に、こうアドバイスしたらしい…確かに深江の言うとおり、さすがの最大手たる毎朝新聞もなかなか情勢把握とまではいかず、かつ高知ローカルに張っていられるほど暇ではない。仮事務所ですと、ローカル新聞に見入る深江…そこに、1人の男が現れる。

「ここでよかつたかな？」

現れたのは、なにを隠そう北条だった…

「あなたは…？」

「あ、紹介が遅れたね…」

そう言って、北条は名刺を取り出してさっさと深江に礼儀よく手渡す…もちろん、深江も自らの名刺を北条に交換する。

「衆院議員…」

「ああ。桑島は、俺の大学の後輩だ…サークルのな」

「え、そうなんですか！」

「なに、あいつから聞いてないの？…つたく、肝心なときに！」

いきなり北条が現れてビックリするほかなかった、というところなのだろう。

「てか、もうじき公示か…あ、やべえ！事務所に戻らないと、今日は会合だった！」

なんと、合間を縫って現れたというらしい…漁野市はもともと高知3区に属しており、高知1区選出の北条にはいくら切り崩したい票田があっても関係ない。そそくさと、その場を去っていく北条を見送る深江…

（なにしに来たんだろう？…桑島さんが気になるみたいだけど）

桑島は前回の市議選では、7位で当選している…漁野市議会の議員定数は18。それと桑島の議員活動を思うと、どう見ても桑島は安泰としか思えない。どこも心配するところがないじゃないか…清水といい、北条といい、いったいなぜ桑島のことを気にかけているのかわからない。そもそも、この市議選が今後の政界の鍵を握るとも清水は言っていた。しかし、その意味さえ把握できずにいるまま、時の流れは止まることなく予定どおり、この日の午前8時半に漁野市議選が公示された。立候補者の総数は23人、そのうち現職は17人と新人が6人。定数から見れば、競争倍率は低いように思える…しかし、実態は少数激戦である。まして、横谷が解散をもって仕掛けてきた選挙戦…誰にも予想のつきにくいシナリオは容易に想像できる。しっかりと桑島は、意気揚々と市内を駆け回っていつている…引つ掛かる点を抱えながらも、深江も取材に奔走していく。

一方、高知市センター街：北条の姿はそこにあつた。自平連の高知県連が入っているテナントビルの入口：車を降りた北条が、見かけた人影にグツと見入る。しかもその目つきは、まるで眼前の大敵を睨むかのような形相だ。

「…先生？」

「人払いを」

「…え？」

「先に入ってくれ、ってことだよ」

1対1でなければ無理なのだろう：場を読むことだけは、北条の御側にいる男女たちはさすがに国会議員秘書とだけあって非常に長けている。すぐさま、北条の側を離れていく：ただ、上がるうとしてた矢先に1人の男が北条に話し掛ける。

「しかし、護衛まで離すのですか？」

「自分で銃を向けられない、盾にしなければならない貧弱な護衛なんて、むしろ要らないくらいだ」

そういわれると仕方がない：無言のままうなづいて、男もビルの中へ消えていく。

「…邪魔者が消えて、ようやく本心が言えそうだな」

「その傲慢な態度は、前とちつとも変わっていないな」

「傲慢なのは、むしろお前だろう？…照実」

「年上のヤツに対する口の聞き方、なんとかしろよ。家訓とか無視かよ…」

「そう言つなよ、照実。これでも、俺はお前を謙遜しているほうだ」

ああ言えばこう言い返す：きりが無いほど、北条と相対する人影は憎らしげに映る。

「金沢から何しに来たんだ？…邦憲」

北条が正体を明かす：人影の正体は、北条邦憲くほうじょう・くにのり。照実とは、同じ“三つ鱗”の家紋を持つ家系として血筋をわけあつた仲だ。ただ、照実の高尾北条家と違って邦憲は加賀北

条家…太祖は同じ北条氏康だが、開祖は互いに氏康の息子の氏照と氏邦で異なる。しかも、邦憲は照実と同じく御家の御曹司でありながら性格も180度違えば、態度も非常に問題児といえる。正社員として働いた過去はない…いわば“フリーター”とでも言うておこるか。

「漁野市というところに、やばい売国奴が降り立ってるって聞いてな…」

「さあ、誰のことだろうな？」

「しらばっくなくても無駄だ、正体はある程度つかんでいる。単刀直入に言う、現地に俺も入れさせる。ヤツらの息の根を今ここで止めなければ、いや…止め損なったら日本という国そのものが滅亡する」  
「…そこだけは、利害が一致しているんだな。俺もそう思っていたところだ」

「だけど、お前には行動力がない…俺が動かなきゃ、お前の後輩が落とされる。あっちには、役不足な味方ばかりだからな…あの横谷佳彦って野郎、俺たちから見ても戦国以来ずっと恨み合ってきた大敵なんだからな」

「…わかってる。しかし、俺とは選挙区は別だ。どうにかしたいと思っても、どうにもならん…」

「その甘さが命取りなんだよ…後輩が戦死するのを、黙って見てるってのかよ！」

邦憲は激高し、照実のスーツをグツとつかむ。しかし、じっと目を見る照実…

「血走ってたら、折角の作戦も全て水の泡になっちまうぞ。それでもいいなら、行け」

「…そんな薄情者だとは、知らなかったぜ！」

怒り任せにスーツをつかんだ手を乱暴に離れた邦憲は、すぐさま場を去っていく。照実とは、前回逢って以来ずっとこんな空気だそうだ…政治に首を突っ込みだした途端だ。やはり、政界には国や地方を問わず悪魔が住み着いているのだろうか。照実が呆然と立ち尽

くす中、1台の車が道路を県庁へと走っていく…照実の向く方向とは逆方向だ。

「…そうですか」

車内で携帯電話を片手に話す1人の男…民自党の若手衆議院議員、広島3区選出の毛利俊就<もつり・としなり>である。照実と毛利は、ともに同じ選挙で初出馬・初当選を果たした同期の桜…そして、両党の互いのホープである。広島から、なぜ高知に？…民自党も会合を持つというのだろうか。毛利は、このときちらつと照実の立ち尽くす姿を目撃していた。

(すみませんね、北条さん)

さすがは苗字からも想像できるが、毛利はかの有名な長州藩宗家にして、戦国時代は中国地方全土や九州・近畿地方の一部にまで及ぶ広大な統治領域を誇った“西の謀将”毛利元就で有名な毛利氏の血筋を引くだけのことはある。ますますもって、漁野市議選は他人事では済まされない謀略合戦の渦中に巻き込まれていくのである。

照実も、邦憲も、そして清水も…なぜか気掛かりにする今回の漁野市議選。その実態は、やはり騙しあいとしかいえないものだった…投票日まであと3日、ラストスパートといえるところまでさしかつていた。最後の中間調査が、地元メディアから報道される。深江は桑島の仮事務所に籠ってじっとそれに見入るのだが、そこには驚愕の中身が書かれていた。

「…嘘でしょう?」

言葉を失う深江…なんと、桑島は当落線のところまで順位が下がっていたのだ。この事態をほくそ笑むのは横谷しかない。市長室で景色を眺めながら、こう呟く。

「だから言ったでしょう?…僕に逆らうと、みんなこうなるんですよ」

驚く深江…言葉を失い、不意に涙まで浮かべそうになる。誰も助けられないのか…そこに、1人の男が入ってくる。

「なにを哀しむ必要がある？」

そう、邦憲だ…照実から桑島の情報屋の話をひそかに聞き出して単独で接触し、深江の仮事務所の場所を捜し求めていたのだ。切羽詰った状況で、いったい何をしようというのか？

「…ちよつと、あなた誰ですか！」

「時間がないから、単刀直入に言う…桑島ってヤツだけには、何があっても議員の座を守ってもらう。俺たちの仇敵である横谷の息の根を止めるためには、ヤツの議員としての生死が大いに鍵を握っているんだ。ヤツを死なせたら、漁野市はそこでゲームオーバーだ」

「…仇敵？」

「400年来の、な。ヤツのような独裁者は、日本の政治には必要ない」

横谷が独裁者だと？…いきなり現れて、こんなことを言う邦憲を当然ながら深江はいぶしがる。

「…独裁者？」

「黎明党ってのはな、民主的な政党じゃない。全然それとは真逆…横谷の独裁政党だ」

つまりは、自分に盾突く者は容赦しない…自分が公権力を持っていたら、その公権力でその盾突く者はどうにでも処置を施せるというのだ。ぐずぐずしている暇はないから、早く行動に移して横谷の鼻をあかさないといけない。邦憲はさらに、横谷が市長になったトリックを使って市議選を自在に操ろうとしているという。しかし、深江はおかしいと気付く…当然だ。桑島も含めて現職は全員が“反・横谷市政”のはず…どうやって自在に操って、横谷は市政運営をしていくというのか？…そこに桑島が戻ってきた。邦憲を見た桑島の目つきが、異常なまでの殺気に包まれたものだったのは言うまでもない。

「…誰だお前？」

「お前が桑島庸介…か。なるほど、照実から聞いた噂どおりのヤツだな」



「いきなり土足で入り込んで、失礼な野郎だな。北条さんまで呼び捨てにするとはな…下の名前だよ」

「売り言葉に乗る気はないんでね。今日からこの俺、北条邦憲が選挙参謀につく…お前に拒否権はない。拒否すれば、お前は議員の座から引き摺り下ろされる。横谷の手によってな…」

場が凍りつく…邦憲の真意を知りたい。邦憲の掌の上に乗れば横谷とまた戦える…ともかく、横谷は邦憲にも共通する敵だということらしい。この手はつかえないはずがない…桑島は不意に微笑んだ。あと3日で、果たして桑島は自らの政治生命の危機を脱せるのだろうか？

## 少数激戦（後書き）

またも時間が空いてしまいました。苦心の末に書き上げることができました。…どんだん顔すな方向に向かっていく漁野市です（大汗）。

さて、この第6話における小さなテーマは

「全く共感できないモノ」

です。現状の政治の流れに対する、有力6政党に対してはなおさらですがあらゆる部分にアンチテーゼといえよう部分がありますね。

貴方の地元で、もし仮にそう言っていないにしても、自分の選挙区から選出された議員を無名の右翼活動家に売国奴といわれて黙っている人はそうはいないと思います。気分が決していいものではありません。我が国では、欧州や米国で当たり前と言われる運動もまだまだ浸透していませんし、むしろ逆効果になっている現状が否めません。この作品における、またこの第6話における高知市センター街で暴れまわる中本らの行動はどうでしょうか。そして、彼らの行動を自制させることさえできない『立憲明政党』の現状は体たらくと見るべきか、彼らに利権談合共産主義に冒された偽装国家である我が国の行政権を持たせて、実質国家へと向けるために利権と抗うことができるでしょうか？…これもまた、おおよそで想像可能かと思えます（汗）。

また、実を申しますと…いや、これはもうすでに気付いている人も多数いることでしょう。横谷こそ、黎明党という存在にこそ実のところは鍵が隠されています。『立憲明政党』のモデルとなっている政党以上に、私は『黎明党』のモデルとしている政党を嫌っています。いや、嫌っているなんて次元じゃないです…似非保守どころか、郷や国を滅ぼす勢力だと思っています。どうにかして、彼らの

息の根を止めて2度と彼らが政界に対する欲を持たせないようにしたいと本気で思っているくらいです。私の周りに、『黎明党』のモデルとしている政党を紹介すると、ほぼ100%の確率で嫌われるでしょうね。きつい表現もありますが、私の本心もどこかに隠れています。

想像してみてください…党首の周りにはイエスマンばかり、誰をみてもそんな雰囲気かビシビシ漂う政党を。一方で、利権破壊を訴えながらも利権を自分たちに分けると言っているだけにしかなくて、いないヤツらだとわかったときの失望感と置き換えても、それは決して私は嘘をつきません。ちなみに言いますと『立憲明政党』と『黎明党』との同盟関係とありますが、政治的に経済的にもベクトルの向きは互いに逆向きを向いています。何度も言うことになります、私は野合と日和見が嫌いです…虫唾が走るほどにね。

メインキャストですが…またも、9人から10人に増やしました。しかもその増やした1人、北条邦憲の出演幕は早くもこの段階でとなります。意味深に高知県庁前を車で通り過ぎていく形で、一瞬の出演幕しかなかったものの“西の謀将”の系譜を継ぐ毛利俊就も初登場です。毛利はともかく、邦憲の登場シーンも上記の小テーマに沿った感じを少し出しています（汗）。おかげで、桑島の出演幕が真ん中でごっそり抜けてしまいました（大汗）。

予告しますが、北条照実& a m p ; 邦憲と毛利俊就の3人も今後の漁野市政の展開に大いに関わっていきます。この漁野市の問題は決していち地方で済む問題ではなく、財政問題や外交も含めて我が国の縮図を少しずつ表していきたいと思っております。

## 土佐蹂躪（前書き）

国会でも話題騒然、漁野市政の迷走は決定打に迫る！ 北条一門と  
横谷、両者に秘められた400年来の因縁とは？

## 土佐蹂躪

「選挙参謀？」

「…ああ、今のお前は横谷に踊らされている駒に過ぎない」

北条邦憲の口調は変わらない…桑島に危機感を持ってもらうため、かつ横谷の底知れぬ独裁者としての恐怖を思い知らせるために。

「漁野市議選は、あくまでも序章にすぎない。その序章さえ突破できないヤツに、横谷は倒せない」

まるで桑島が落選すると言わんばかりに、邦憲は言葉を続けた。

「馬鹿言っつてんじゃねえよ、俺は…」

「感触だけに踊らされてどうする？…これだから議員つてのは単純なんだよ」

まるで自分以外は馬鹿だといわんばかりの口調に、さすがの桑島も機嫌を損ねて当然だ。他の議員であれば、もはや一触即発である。「…俺を当選させる、つて言っつたよな？」

「桑島さん、この調査を見てください」

邦憲と桑島の間にとりと割って入る深江…こういう調査は、新聞記者として慣れている。新聞を手にとって見入った桑島の姿が、この後は容易に想像がつく。

「…どういうことだよ？」

感触は間違いなく良かったはずだ…どこでもそうだった。しかし、結果が反比例しているとかいえないものだった。

「感触は本当だろうな。あくまでも、感触…それだけだ。裏にまわれればどうなるか…」

暗に操作の可能性を示しているとかいえない、邦憲の言葉である。

「てめえ、さつきからなんなんだよ！…俺の参謀になるとか言っつたよな？」

「…紹介が随分と遅れてしまったよな？」

「する前に、お前が土足で入っていきなり話し始めるからだろ！」  
「…俺は、北条邦憲という。おっと、照実みたいな甘い考えのヤツだと思つたら大間違いだ」

憎らしいほどにクールな口調で自己紹介する。

「北条さんを下の名で呼び捨てとは、ずいぶんと偉そうな態度だな」  
「…当たり前だ。血筋は、太祖まで遡れば照実も俺も全く同じだ」  
小田原を本拠に関東の一大勢力に上り詰めた北条宗家の血筋を分け  
ているんだよ。紹介はもういいか？…本題に入らせてくれ、時間が  
ないんだ」

そこで、横谷のことを邦憲は話し出す…もともと、横谷の家系も  
戦国時代は関東地方北部にあたる上野国（今の群馬県全域）のいち  
国人であつたというらしい。横谷氏は1度改姓しているので、彼ら  
がその血筋にあたると悟られるものは何も残っていない。北条氏と  
は、遅かれ早かれ国人らとの対決は不可避…しかし、北条氏は降伏  
しても先祖代々の土地は全て安堵されると聞くや降伏をしてきたの  
だという…小田原城にて氏康と面会するや、降伏と恭順の意思を伝  
えるも氏康は予想外の行動に出た。

「その者を斬首せよ」

そついうや、奥の居間へと引つ込んだ氏康…すでに下心を見抜い  
ており、抱えれば北条宗家の存亡に関わる事態になりかねない危惧  
を一瞬で読み取った結果であつた。そんなこんなもあつて、所領を  
全て失つて御家断絶の寸前に追い込まれていった。

「どうして殺しちゃつたんですか？」

「下心が丸見えのヤツを抱えたら、軍律も何も意味が成さなくなる。  
北条家では、宗家であれ分家であれ軍律を破る者は家臣団における  
序列の如何によらず、足軽・雑兵に至るまで厳罰に処すとある…い  
わば、斬首・晒し首だな。氏康公は規律に非常に厳格な御方だつた  
という…」

横谷は北条氏への復讐と言わんばかりに、といったところか？

「…その要素の否定はできない。照実が国会議員として君臨してい

るのもあるしな」

邦憲はすぐさま疑問に答える：「ただ、それだけではないだろう。」

「“愛国心”を安易に叫ぶヤツは信用できないし、むしろ胃酸の出る部類だ：そういうヤツほど、俺たちの郷や国を滅亡に追い遣ろうとしていることに全く気付かないのだからな」

まるで誰のことなのか、深江にはパツと中本行弘の顔しか浮かばない。

「その女：新聞記者、だったよな？中本を思い出しただろうが、ヤツが本丸だと勘違いしちゃいけない：所詮は横谷の操り人形にされているだけだ。経済的なベクトルの向きがあちこち振れるから、簡単に横谷の口車に騙される」

深江の考えていることなどお手の物：知能は並大抵ではないようだ。その邦憲の博識はバツチリと当たっていた：驚愕の表情を隠しきれない深江がそこにいた。

「というか、いい加減に本題に入らせる。桑島庸介の“政治家”としての生命を断たれなくなったら、ここから俺たちも仕掛ける」

邦憲は、まず桑島を当選させるための短期戦略を敢行するという：現状、税金の使い道に敏感だったり高齢者向けの政策にも人口形成をふまえると有効な手段だという。現に、漁野市の過去の選挙における投票率は世代別で見るとやはり老年層や主婦が主力といえる結果を割り出していた：若年層は全くもって振るわない。誰かが桑島のお株を奪う政策を掲げているのだろう：それを上回る、かつ突拍子ではない政策を練る。簡単なことだが、実に難しい：そこで、邦憲はアドバイスを桑島にする。

「政令指定都市に昇格するとか、そんなネタを持ち込んで市議選に挑んだヤツはことごとく落選している。大きなところばっかり見るな、まずは小さく：一番の難題を突け。そして、不安を払拭させる：ここまで言えばわかるだろ？」

「：でも、漁野市が高知市に編入されても、高知市の政令指定都市昇格なんて夢の話じゃあ？」

深江の新聞記者とはおおよそ思えない頓珍漢な受け答えに、そういう問題ではないと言わんばかりに、邦憲はもちろん桑島も嘆息を漏らす。高知市に編入されたいと願っては、その瞬間に落選決定である。

「ま、ここまでいえばもうお前ならわかるだろう。…すまないが、俺はしばらく金沢に帰る。結果を楽しみにしているよ。…」

そう言って、傍らのポストンバッグを担いで邦憲は身支度もそのままに事務所を出て漁野駅前に向かう。陸路で金沢に帰るのだろうか？夜行バスなら、せいぜい大阪どまり。そこから乗り換えて帰るのだろうか。ただ、桑島は邦憲を見送る傍らで微笑を隠さなかった。

(ありがとよ…)

邦憲の言葉の数々は、桑島が立候補を決意したあのときを思い出させることになった。そう、漁野市が抱える大きな問題は財政赤字だ。積みも積もったものが、さらに合併で大きくなった。どうにかしなければ、破綻は不可避だ。もちろん、横谷は市長に居座っているのだから引き摺り下ろさないと、それでも破綻は不可避だ。横谷の戦慄の政策を暴露することは、横谷側に隙を与えるだけでしかない。現に原や中道も、相当に苦戦している。もしかすると、世論をも操っているかもしれない。愚直に財政赤字対策を訴えるしかない。残り3日、しかも市民にもわかりやすいシナリオで。仕方がない、夕張を利用しようと考えた。それもいけないと桑島は踏みとどまった。そこで、ふとあの理論を思い出す。公債理論だ。合併特例債でも話題になった。でも、その存在さえ知らないままではいけない。そこでもう1度、振り返る。税金の実に粗い使い方だ。裏金問題は県内市町村で吹き荒れた。漁野市とて例外ではなかった。桑島はかつて、当時の市長でもあった岡村を猛烈に追求した。どうだろうか？…情報屋たちも懸命に知恵を出し合い、そして実践に向けた。言葉はただ1つ。

「僕らの子供に、未来の漁野市に負の遺産と歴史を残すわけにはい



かないんです！」

難しいが、前を見ようと…赤字再生団体への転落を阻止する。脅す気はないが、夕張の二の舞は避けねば成らない。そうなれば、国は助けてくれない。いや、もともと国も税源移譲に本腰ではない以上は自立するほか道はない。世論調査で、桑島の魂の叫びは市民に届いたのか、直前になって再び盛り返した…結果、桑島は無事に二期連続当選となった。

「やったーーーーー！」

「バンザーーーーーイ！」

当選確実と報道されたその瞬間、事務所内の歓喜は最高潮に達した。順位は10位…得票数も得票率も下げてしまったが、当選した18人の内訳は17人の前職と1人の新人…とはいえ、この新人は病気で不出馬だった前職の後継たる存在でしかないのです。横谷市政の窮地は未だに打破しきれていないと見るのが本筋だろう。不利な状況からの逆転劇に、桑島の事務所は歓喜に満ち溢れていた。情報屋たちも、自分のことのように喜ぶ…

「桑島さん！」

駆けつけた深江も、桑島の当選に一人に喜ぶ。

「俺にはつか肩入れすんなよ！」

思わず頬が緩むほかなかった…そこに携帯電話が鳴る。電話の主人は、もちろん邦憲だった。

「…無事に当選したようだな」

「おう！…感謝するぜ、恩人」

「喜ぶのはまだ早い。これは序章にすぎないと言ったはずだ…横谷は、本気を出して潰しにかかってくるぞ。そのときは、逆に俺が攻勢に出て必ずや400年来の決着をつけてやる」

意味深な言葉を残して、邦憲は一方的に電話を切った。400年来、どういうことだ？…それまでの喜びが一気に吹き飛んだ。思えば、確かに邦憲の言ったとおりだ…現に、桑島の順位が下がったのには横谷の底知れぬ策謀があったからだ。そう見るほか手はないだ

ろう…邦憲はその足で、再び金沢から大阪経由で高知へと向かって  
いた。そして、広島からもあの男が…

「そろそろ、動きましようか…」

そう、毛利俊就だ。臨時国会は開かれる気配がないが、漁野市政  
の混乱は永田町でも話題にあがっている。理由なりは、なんとも  
なるだろう…それに、国会の勢力図が臨時国会の召集をそう簡単に  
許すはずがない。そこに照実が揃えば、もはや他人事とも思えない  
事態に発展していくのは必至だ。毛利の真意はどこにあるのだろう  
か?…さすがに謀將の系譜だ。

一方で、桑島の事務所…歓喜のさなか、桑島は新たなる戦いの始  
まりに思いを馳せていた。傍らで見るほかなかった深江…そこに、  
携帯電話が鳴る。

「はい」

「なんとか、片思いさんは無事に議席を死守したみたいだな」

電話の主はもちろん、清水耕輔…

「ち、違います!」

「…ま、それよりもさ。今後はもつと動きが激しくなるぜ」

「…桑島さんも、そんな気持ちだと思えます」

「真正のジャーナリストとして成長する絶好の機会だ。桑島にばっ  
ちり密着していけ…横谷のヤツ、やっぱ1枚も2枚も食わせ者みて  
えだ」

「そこに北条さん…」

「照実か?…それとも、まさか邦憲とか言っんじゃねえだろうな?  
ズバリだ…いや、正確には照実も邦憲も密かに関わっていると  
言っただけだ」

「やばいぜ、それ…横谷と北条つてのは、互いに戦国時代からの因  
縁が渦巻いてんだよ。北条照実の実家は、高尾山系の側だしさ…2  
人ともとかって、それは最悪のシナリオだけどさ。横谷もその北条  
氏への恨みが重なって、とんでもねえ宗教に帰依しちまったしさ。」

下手すると、泥沼化すると思うぜ…命懸けの取材になると思う」

そう言つて、すぐに清水は電話を切つた。高尾山…それでは、横谷に恨みを持つのは邦憲よりも照実のほうでは筋道は合うのではないか?…ともかく、想像以上に早く第二幕はすでに始まっているようだ。ただ、桑島の周りには強力な味方がつきそうだ…とはいえ、彼をダシに邦憲や照実は北条一門の名を賭けた横谷との代理戦争を始めようというのだろうか?…そこだけが不安だ。そして、邦憲や照実はもちろん毛利までもが漁野の地に集結する…たったの約5・7万人しかない、団体だけの高知県内では高知市に次ぐ人口第二位の市へ将来の国政を囑望されるだろう男たちが一挙に集まるのだから、これはただ事ではもうなくなっていく証左なのかもしれない。

怒涛の市議選の結果が出て2日後、まるで興奮が嘘のように静かになつた桑島の事務所では人という人が集結していた…いや、集団でという意味ではない。桑島のほかに集まつたのは、邦憲と照実…そして毛利だ。毛利のことは、桑島は照実から名を知っていたりしてすぐに2人は場に溶け込んだ。そこに遅れて深江が入ってきた…「すみません、遅れました」

「…社会人のマナーも知らないのか?」

すぐさま邦憲が立ち上がつて、深江を問い詰めようとする。しかし、深江はそんな邦憲を負けじとグツと睨む。

「まともに働いたこともない人に、そんなことを言われたくありません!」

それを言われると、邦憲には玉に傷だ…ただ、面子は出揃つた。今後の作戦を練るという。

「まずは、生きて帰つて来れたことを祝しよう」

桑島が生きるか死ぬか…それは、政治家として。そう、漁野市議として2期連続当選を果たすか否かである。落選したら横谷への防波堤は崩れて、一気に漁野市は赤字再生団体どころか市そのものが滅亡するという。漁野市民1人につき、2500万円もの現金をば

ら撒く：1人たりとも賃貸住宅で生活する者のいないように、市民全員に何かしらの家を建てられる土地と担保を市が責任を持って保障するのだという。

「市民1人あたり？」

「冗談だろう？」

照実も驚愕するが、毛利に至っては閉口寸前である。2500万円ずつ、約5・7万人に漏らすことなく保障するとなると市の予算の何年分もの額が一挙に撒かれるというのだ。

「バラマキ、そのものですよ」

「そんな次元じゃ済まないだろうな」

桑島の怒りの源はまさにそこだ：赤字再生団体への転落も、横谷は意図的に仕組んでいる。夕張は英断だと、進化の道を選んだ市長を称えようと市長選で横谷ははつきりと言った。照実にも、もはや呆れ顔しか浮かべない状況にあつた。

「しかし、そんな政策を掲げておきながらなぜ：その横谷って人が市長になれたのか、僕には甚だ疑問です。ある種、民自党「ウチ」の幹事長のほうがはるかに上手だというのに：」

「：毛利、“西の謀将”の血筋は劣化してしまったようだな」

民自党の幹事長といえば、サブカルチャー好きで国民人気も根強い瀧本太郎：横谷と比べたら、明らかに横谷のほうが組みやすいと発言しただけの毛利に対して、邦憲の口からは毒舌が炸裂した。

「瀧本なんて、横谷からすれば赤子の手を捻るようなものだ。瀧本ごときで恐れをなしているようじゃあ、先が思いやられるぜ：民自党につくづく見も心も冒されてきているな？」

顔の表情には表れていないが、毛利の心理は察するに有り余るものがある。

「照実、もしお前が総務相だったら：漁野市が赤字再生団体に転落しても、必ずや再生の道へと導く自信があるか？」

「：ないね。助けられないよ」

すると邦憲は思わず微笑を浮かべた：まるで、照実が模範解答を

返したかのような反応だ。

「何がおかしいんだよ？」

「…おかしいんじゃない。照実のが国の本音に近い…漁野だけじゃない。全国どこでも、例外はないからさ」

それだと、横谷が赤字再生団体転落を英断だと称えて乗り遅れるなど煽ったあの演説内容はどうだと言うのか？…最初から答えは決まっていると前置きして、邦憲は言葉を続けた。

「国は助ける気などない。むしろ、自治体の存在そのものを消してもみ消そうとするだけだ…破綻を通り越した、破産という形だな」

「そうになると、孫子の代まで…いや、下手すると一生だな。負担をずっと背負ったまま生きていかなきゃなんねえ…」

「高知市にせよ、ほかの町や村にせよ…後ろめたい気持ちを一生抱えたままになるでしょうね」

現実問題、漁野市が破産とされて市の存在を消されたとしたら規模を想定して高知市への強制的な編入合併がもつともシナリオとしてよく描かれよう。

「現実、欧州でも消された自治体ってのは歴史を遡れば数えればいくらでも出てくる」

「…今回のような大赤字に、さらにはら撒いて止めを刺したところも現実にあります」

「ちよ、ちよつと…毛利さん、それ嘘でしょう？」

「嘘ではありません、本当の話です。以後、その自治体の最後の主張が敢行した政策に基づく経済倫理は、欧州各国ではカルト思想の一端として徹底的に弾圧されることになります」

欧州は中東部であれ西部であれ、思想・信条の自由は憲法にて当然ながら保障されている。とはいえ、国家や自治体をむべに破壊するとしか言えない思想や信条はカルトだとして例外的に弾圧しても合憲だとされている。ここで、国の公益という境界線を日本と違つてしっかりと線引きしているといえよう。日本だと、たとえそんな思想であってもむべに弾圧でもやろうものなら、人権侵害で逆に訴

えられるほかない。

「毛利の言ったことは本当だ、桑島…現に、オーストリアで国家的に強制消滅を喰らった自治体があった。横谷と同じ経済政策を敢行して…」

では、横谷の今もっている経済倫理は漁野市を破産・滅亡に追い遣るといことなのだろうか？…邦憲や毛利の話振り返ると、桑島にはそう聞こえて仕方がない。破綻で国の庇護でどうにかなる…そんな次元じゃない。

「では聞くが、予算を組むときに収入の足りない部分を補うものはなんだ？」

邦憲が話を振ったのは桑島ではなく、なんと深江だった。

「予算を余らせていたら、その余剰金で…その…」

やはり、知識がついて来れずに呆れてものも言えない…うなだれるのは、桑島はもちろん邦憲も照実もそうだ。毛利とて、苦笑いを浮かべるほかない。

「自治体で予算を余らせたなら、それだけ仕事を減らされるという恐怖感が支配しているんです」

「予算を使い切らなきゃ、仕事量の維持ができない…ってこと」

「だとしたら、余ってもいないのにどうやってそんな何兆円ものお金をこんな小さな市で？」

「答えは簡単だ、市公債を発行する」

公債？…桑島が頷く。実際、公債費も相当に割合が増している。

「公的機関としては、減税なんてされたら困るんだよ。税収がどうとかね」

「でも、真なる意味で減税が経済効果を最ももたらす経済政策であることは確かだろうな…」

「中本は絶対に認めねえだろうな…国防が外交が、とか難癖つけてよ」

「減税は売国奴の発想、と釘を実際に刺されましたしね」

毛利は誰に言われたのだろうか？…おそらく、民自党の体質かも

しれないし、もうすでに中本を知っているのかもしれない。台詞の一端から、照実はそのを悟る。

「ともかくだ…オーストリアの先例があると、ここで桑島は知識を得た。ほかの連中からは一步も二歩も前に進んでいるのは確かだ…しかし、誰とも共闘できる状況じゃなくなるのはいずれわかる。議員の中に、すでに横谷に魂を売り渡して漁野市を滅ぼす計画に加担しようとしているヤツもいるだろう」

つまりはこうだ…市議会議員らがしつかりと信念をもって望んでいるかどうか、もし仮にそうならば横谷と折り合いがつかねば徹底抗戦はやむを得ないだろう。ただ、往々にして信念が軽視されている…それに玉砕することは、まるで悪であるかのような風潮だ。横谷にはそれが手にとるようにわかる。

「とても厄介な相手ですね…どうして市長選に当選できたのか、そこから探りますか？」

「毛利、やつぱりお前の中にある謀将の血筋は劣化している。哀しいが、はっきり決まったな…俺は、そこそが本丸だと思っているんだがな。外堀だと思っているお前と、内堀の向こうにあると思っている俺の認識の差だ」

「いい加減にしる邦憲、毛利だつてな！」

毛利を罵倒されたと早まった照実は、今までの不満をぶつけるように邦憲に食ってかかろうとする。しかし、そんな怒りの表情の照実を懸命に毛利は全身をもって止めにきた。

「…いいんですよ北条さん。僕の認識が、想像以上に甘かったようだ…やはり、現地に来ないと見えないものもあります」

「ま、そういうことだ照実。それに、横谷を…黎明党を本気で滅ぼしたいと思っているのは俺よりもお前だろう？…隠すなよ」

凶星なのか、照実は邦憲の言葉にたじろぐように動作を止める。

「…本当なんですか？」

「ああ。俺たちの先祖代々の土地の手前にまで、ヤツの農場は無節操に拡張している…今でもその勢いが止まらず、八王子神社の慰霊

祭にまで影響が出かねないほどだ。あれができないとなつたら…高尾山に巢食う、俺たち北条一門の呪いは常に慰霊が必要なのはわかつてるだろ。それを知っているかのように…」

「あ、思い出した！横谷のヤツ…」

「高尾山系の一角に大きな農場を持っている、つて！」

桑島と深江は、市議会初日の横谷の演説内容を不意に思い出した。思えば、高尾山といえは照実の生まれ育った場所…八王子神社は、高尾北条家の長男たる当主継嗣たる照実も無縁ではいられない。

「確信犯としか、この状況証拠ではそう言わざるをえません。とにかく、まずは相手を見ますか？」

「…悔しいが、横谷の動向も倫理もまだ見えない以上は向こうの出方を待つしかないだろう。毛利の言つとおりだ…」

邦憲と毛利のやり取りにうなだれる桑島…ただ、邦憲からはあらゆるシナリオを想定しながら挑んだほうがいいと助言を言われた。

横谷が牙を向けるなら、間違いなく横谷にとつての本丸は桑島…しかも、信念の塊ゆえに難攻不落である。桑島は、少しホツとしている部分があった。すかさず、心理を読み取った毛利が助言を始める。「そんな油断は禁物ですよ。難攻不落、絶対に落ちない…そんな城であっても、戦国時代には多くの城が落ちた。我が毛利宗家の祖先で言えば尼子氏の月山富田城、そして北条氏で言つと日本一の規模を誇る城塞都市・小田原城までも最後には陥落したんです。絶対に油断しないこと…そういう機を見るに恐ろしく敏な男、貴方はつねに横谷という人の周りにいる人らに見られているという自覚から始めなければならぬ。気をも赦せる相手は、我々以外はいないといふぐらいでない」と

この言葉に肝を冷やすも、毛利の指摘は確かに言いつている…邦憲の言つとおり、横谷が市議らに寵略を仕掛けているのだとすれば不信任決議の2度目の可決どころか、桑島以外は全て与党に転落するというシナリオもある。それは、漁野市の赤字再生団体転落に向けた赤信号の点灯に他ならない。情勢をしつかりと目を肥やして見



る…今後の数日間、桑島は緊張の日々を迎えることになる。

一方、横谷の自宅兼事務所…掘建て小屋で作戦会議を練っていた。話が違うじゃねえか…」

中本は妙に不機嫌だった。何がどう、話の違いだというのか？

「…そうですね」

「そうですね、じゃねえよ。もう我慢の限界だ、街宣させる。漁野駅前か？市役所か？高知駅前か？はりまや橋か？」

「焦っていますね、中本さん」

「まずはこの展開をどうにかしろよ！あの桑島って野郎をシメあげりゃいいんだろ！」

焦燥から来る感情的な怒りをもって横谷に食ってかかるうとしたが、そんな中本の右腕をグツとつかんで話さない横谷：妙に力が入っている。中本1人ではどうにもならない。

「いいですか、こうなった以上は龍略に全力をかけます。落選した議員をダシに、中本さんには別働の作戦を全権委任させたいと考えているんですけどね。選挙ごとに必ずある、恒例のあれですよ」

そこでまたも微笑を見せる横谷：中本でさえも恐怖しようとしていた。弟子の異誠直らに至っては、言うまでもない。恐怖による支配関係：典型的な、独裁政党の実験を握る男の様である。そのあと、横谷は手をさつと離して自らの別の部屋へと姿を消していった。一方で、女たちの要らない確執の一端も繰り広げられていた。

「あんだ、どうして横谷様に？」

リーダー格の女が話し掛ける…しかし、話し掛けられた背の高い美貌の女はせつせとメイクを落としてそのまま寢床に向かっていった。まるで聞いていない、と見えかねないように。

「横谷様、あのクソ女にガン無視された~~~~~！」

「…」

「超ムカつく~~~~~！」

だからどうした、と鼻でせせら笑う横谷は読書にふけていた。

「いいじゃないか。新入りで、慣れていないんだろう」

「顔で判断するんですか、横谷様」

一方、寢床ではその美貌の女は掛け布団の中に入ってこっそりとメールを交わしていた。『業務報告』とは、どういうことなのだろうか？…送り主は、“黎明党”の初代党首である長谷川佑次総裁。

その長谷川からの返信には

『貴子へ』

と返されていた。女の名は中浜貴子、またしても波乱の動因が増えた。それぞれの、相手方の思惑を互いに探りながらこの日も夜は更けてゆく。

翌日、日本新聞を除いて毎朝新聞は当然として大手新聞の高知版に躍った1面が市内を賑わしていた。

『光友電工の発注プラントを巡る談合ほか諸問題』漁野市・巨額財政赤字の根？』

天下のグループ、旧財閥の系統を継ぐ光友電気工業が発注して、漁野市を中心とした新莊川流域環境総合センターのエネルギー回収プラントを巡る諸問題が特集されていた。意図も何もなく、突如として出てきたものだから深江も面を喰らうほかなかった。横谷の艶やかな毒牙が及んできたのか、それとも起こるべくして起きた別の意図があるのか？…出遅れたと地団駄を踏んで悔しかったのは、本社デスクの清水耕輔のみではない。深江も初めて、屈辱感を味わったようなものだった。

## 土佐蹂躪（後書き）

第6話と比べると、インターバルの長さは久しぶりに短くなっていますね（汗）。全21話の予定ですので、予定どおりだとするとここで話数だけで言うところの3分の1を消化したということになります。

ちなみに、土佐というのは今の高知県全域を指す旧国名です。あと、漁野市が実は高知市と市境を接していることも察していただけたかと思います。

選挙戦が佳境に入り、不利に：桑島が落選するとなぜ“赤字再生団体”転落の流れが決まってしまうのか？：もう1度、横谷の政策が出て来ましたね。

「市民1人あたりに2500万円を配布する」

というものです。まず、ここから始めると。大赤字で苦しんでいる自治体に、何兆円もの財政出動というのは並外れて常識外な政策であることは明白です。2500万×5.7万：これを計算してみてください。万は、10の4乗ですね。（2.5×10<sup>3</sup>×5.7）×10<sup>4</sup>は？：途方もない数字が出るかと思えます。

要は、横谷の政策は漁野市を破綻どころか破産・滅亡に追いやるものだと私の視点では本気で思ってしまうほどなんですよね。蹂躪の意味はいつたい誰に向けられたものか？：土佐のみならず、もう1人にも関係してくる言葉です。いや、この小説のメインキャスト各位に全員当てはまるところがあるかもしれない（汗）。

桑島の味方がまだまだ少ないとはいえ、北条照実& a m p・邦憲に毛利俊就と国会議員2名とその志望者1名。そして、その桑島の踏ん張りを密着していけと指示を出された深江：ちなみに、照実と邦憲のやり取りで

「国は助けてくれない。それどころか、もみ消そうとする」

とありますが、これが国の本音なのでしょう。参考文献の1つに、しかも表紙に明確に出されています。国にそんな余裕がないのはわかっています…夕張の動向も気になりますね。

ちなみに、桑島はもちろんながらまだ未婚です…おそらくは照実も毛利も、邦憲も当然ながら未婚でしょう（邦憲が結婚していたら、それこそネタでしかない。／笑）。

“赤字再生団体”に転落することは、その当時における当事者にとっては苦しみからの解放と思える要素があるかもしれませぬ…そんなのは甘い考えですが、決して苦しみから解放されるわけではありません。それどころか、借金から解放されるのでは全くな…その借金は1円も残さず返し終えないと、赤字再生団体から脱却することはできない。

まして、今日の社会事情をふまえると1度転落したら最後だという気ではないとダメだろう…何十年と長く苦しまねばならない、そのツケは自分の代だけで終わるものではなく孫子の代にまで確実に響くものです。まして破綻を通り越して、市そのものが滅亡してしまうようなことになれば一生その重荷から解放されることはないでしょうね。そうならないための戦いが本格的に始まる、本当にその直前だと思っただければ幸いです。

ただ、桑島を通じて照実と邦憲が北条一門の名を賭けた横谷との代理戦争ではないかというツツコミは言っているとこがあるでしょうね。あれだけ横谷に粘着されると、慈愛の通じぬ相手には北条一門は容赦しないでしょう。さて、ここからは私から議題を…

「今後の展開の鍵を、真なる意味で握るだろうキャラクターは？」  
今まで出てきたメイン & サブキャストから、これから出てくるであろうサブキャストを予想してみるのも一興かと…感想を載せる際にも、是非とも参考にしていただきたいです。

柳原可奈子さんをイメージしたと前述した彼女率いる“横谷佳彦親衛隊”たる女性サクラ集団の新顔・中浜貴子役は、三津谷葉子さ

んをイメージしてみました。と申しますか、ところどころで気の抜けるような展開を織り交ぜてしまっていますね（大汗）。

## 怨敵北条（前書き）

男は傍らで呟く…「僕の前で、その苗字だけは明かすな」  
時を越えて北条一門vs・横谷の代理戦争だ！  
もはや、

## 怨敵北条

毎朝新聞の一面を眺めて、呟く1人の男…毛利俊就だ。その表情は、やはり固い。

「これはまるで、スクープのようだ」

新莊川流域環境総合センターを巡る問題は、漁野市にとってはアキレス腱にもなっている敏感なところだ。

「毛利さん、朝が早いんですね…」

そこに桑島が現れる…外を見ると、まだ空は明るくなってきたばかりだ。しかし、『新漁野』駅から歩いていける市役所前にそびえる市内唯一のビジネスホテルには北条照実、そして北条邦憲の2人がすでにネットでのこの情報を仕入れていた。

「ホテルでネットとは、な」

「ビジネスマンのたしなみだ。それに、漁野にはここしか泊まるどころがないからな」

高知市内まで戻ると、確かに照実が連れて行かされる高級ホテルなどがあるが、今回は邦憲と2人で行動をともしている以上は怪しまれるのも無理はない。

「横谷のヤツ、本腰を入れて桑島をはめる気だな」

「そうさせないために、北条宗家の血筋を引く俺たち2人がいる。横谷を滅ぼしたい、これが共通した考えだ…ただ」

「ただ？」

「毛利だけは、どうも信用できない…民自党の手練手管を見てきているヤツだ。何を考えているのか、しっかりと毛利だけは見たほうがいいかもしれない。俺が仕入れてきた横谷にまつわる情報を照らし合わせても、毛利を深入りさせるには状況があまりに好ましくない」

邦憲には、いくら照実の頼みとはいえ横谷を打倒する仲間うちに毛利を完全に受け入れるわけにはいかないと考えていた。

「照実、お前も所詮は横谷に対する恐怖でがんじがらめのような」  
「なに？」

「お前には、妹がいたよな？…横谷の毒牙にかけるわけにはいかない。防衛本能が過剰に働く、ゆえにがんじがらめになって横暴を許してきた」

「邦憲、何が言いたい。お前にも姉さんがいるだろう？」

グツと邦憲を睨む照実…互いに女の親族を抱えているという共通点を突く。しかし、邦憲にはびくともしない。

「姉と妹、これだけでも立場は大きく変わるものだな。横谷はお前の弱点を躊躇なく狙ってくる…桑島を助けたくても、お前だけでは本当に役不足だ。あと、あの女記者にも妹に似た面影でも感じているのか？…つくづくシスコンだな、照実」

不敵な笑みを浮かべて、邦憲は部屋を去っていった。何も言い返せなかつた照実…深江に、自身の妹・瑞子の面影を感じているかといわれれば全否定ができない。邦憲にこうも簡単に心理を読まれてしまったことに対する悔しさのほうは、照実の脳内を大きく支配している考え方だろう。憎らしいほどに頭脳明晰…本気で横谷を滅ぼす、そう信じているのだから俺はお前を信じるほかないんだと言われてるに等しい。照実が本気にならないと、横谷を倒せない…その再確認ともいえるのが本当の邦憲の心理だが、混乱しているに等しい照実の現状では容易に把握はできない。

「そうですか…」

一方、横谷もアジトでこの日を迎えていた。しかし、1人だけのようである。携帯電話を片手に、誰かと話し込んでいるようだ。

「本当にあれでいいんですか？」

「疑うな、と言っただろう。僕に間違いなんてありえないんだから」  
「ですが、ヤツの裏には北条…」

「その苗字を僕を相手に口にするのはやめろ、と言っただよな？」

そう言って、電話こししながら語気を少し荒げた横谷…やはり、彼



の血筋がうずくのは400年来抱きつづける北条一門への打倒である。

「それに毛利俊就だ。何を考えているのか知らないが、加賀金沢の北条邦憲：まして高尾の北条照実に味方するヤツだとわかれば、もろとも毛利も滅ぼす。北条と運命共同体で、美名を残してやってやるんだ。それだけでも僕はいい人だろう？」

そついいながら、横谷はボタンを押して電話を切る。そして、すつくと立ち上がってさつと上着を羽織ってアジトを出る。

（僕に逆らうものは、誰であれ絶対に許さない。世の平和を司る神々の代行者たる僕に盾突くなど、愚かしき人間にはできない芸当だと思ひ知れ。400年来の積年の恨み、必ず晴らさせてもらうぞ：滅びるのはお前たちだ、北条！）

「不正選挙を赦さないぞー！」

「赦さないぞー！」

「赦さないぞー！」

「赦さないぞー！」

漁野市役所本庁の前が騒々しい：けたたましき轟音とともに、選挙の無効を訴える集団がある。もちろん、リーダーは中本行弘であり、弟子の異誠直や横谷が仕掛けた女性サクラ軍団も混じって市役所職員らにシユプレヒコールを浴びせていく。

「不正選挙なんですよ！」

そつ言つて迫ってくる男たちとの関わり合いを避けたい心理は当然だろう、市役所職員らは何人もそそくさとその場を去つて市役所内に消えていった。

「コラア！逃げるのか貴様！」

「談合を認めるんだな！」

詰め寄ろうと追いかけていく異たち：明らかに素振りも含めて、彼らの意思を感じられない。むしろ、ますますもって誰かに操られている印象が強くなる。しかし、彼らの目当てはもちろん別にいる

…そう、桑島だ。

「いつまで経つても、きやしねえじゃねえか…」  
するとそこにハイヤーが1台現れる…明らかに市議だと思える風貌が映った。

「不正選挙を赦さないぞー！」

「選挙の結果は断じて認めない！」

「不正を糺し、市議選をやり直せー！」

「そうだそうだ！」

「やり直せー！今すぐやり直せえー！」

奇声と怒号と、どうしようもない雰囲気正面玄関を覆っていた  
…もちろん、そんなところに正面から桑島が現れるはずもなかった。  
(つくづく馬鹿な連中だ…)

桑島だけではない。市議たち各位も、このような心境であろうか  
…負けを認めたくない、腹いせのようなものだといわんばかりに。

役所の始まる時間がまもなく迫る頃、中本たちに詰め寄るとまでは  
言わないまでも主婦たちが数名ほど駆け寄ってくる。

「近所迷惑なの、あんたたち！」

「なに！？」

そのような言葉を彼らの前で吐くなど、よほどの勇気であろうか。  
空気が一気に怪しくなる。

「どこで何しようが自由だろ！」

「街頭演説なら、警察に許可を取ったの？」

「なんだと！貴様、カルトの手先か！」

「そうだそうだ！」

「なんとか言いなさいよ！」

「カルトを高知から叩き出せー！」

もはや話など通じる相手ではないのは、桑島はもちろん照実や邦  
憲・毛利にもすぐわかる。中本派の中には、立憲明政党に党籍を持  
たずに隠れ蓑団体を転々としていたりしている連中が多いので、実態は  
把握しづらい。しかも本丸でないとすると、本腰を入れるわけにも

いかない。勝手に自滅をさせるように仕向ければよいだけの存在：邦憲はこう指南した。それよりもなぜ、今頃になってエネルギー回収プラントを巡る一連の光友電工における諸問題が記事になったかということだ。桑島はちなみに、裏門から入っている：中本であれば、いとも簡単に騙せる。そこで邦憲と合流：照実は、自平連高知県連の総会に出席するためにいち早く漁野をあとにして高知市内に向かっていったそうだ。毛利は桑島の事務所の留守を預ることに：しかし、あと1人足りない。そう、深江だ。

「もしかして…」

「チツ、あの馬鹿が！」

深江のことだ、何を考えているのか未だに理解できない行動に打って出る可能性もある。計画の狂いを嫌う邦憲に、焦りの色が明白に顔に表れてきた。

焦りと言えば、ほかに中本や巽たちにも無縁のことではない。

「本当にこのままでいいんですか？」

立憲明政党の一派閥に等しい『真政行動会』、もとい中本自身が党首補佐という総本部の役職の1つに就任していることから“中本派”と呼ぶのが適当であろう。発足初期は中本自身、同党への入党は前提ではなかった：後方支援組織どまりにしたかった。しかし中本は入党して、参院選を戦った：あとに続けと巽ほか弟子たちも続々と入党した。センセイショナルな展開であるうちに、勢力が拡大して一派閥と呼ぶに等しい状態になった。

「なんか、怪しいんですよね…あいつ」

もちろん、それは横谷のことだろう：中本派とて、派閥内が中本のもと一枚岩ではないの言うまでもない。横谷に疑義を抱く派閥の構成員がいても、全然不思議なことではない。

「だから言っただろ。信じるしかねえ、つてな」

「信じるも何も、俺たちには時間が…」

そう言われると、中本は黙り込むほかなかった：すでに党内は中

本派だけではなく、前党首のブレーンら“旧本流”がついに派閥結成のための勉強会を京都で開催したという。ほかにも、九州でもすでに派閥結成と思われる動きがあり、現に昨年12月の定期党大会における党首選で“第2代党首”の座を巡って、その派閥の長と思われる人物が参戦した。外交での主張は当然として、ほかにも内政にも比類なき知識を誇り、理性を操るのが上手いという、専らの党内評判だ。

「ふん、前党首に取り入って俺を陥れるってか?…恩知らずな連中だぜ」

「恩知らずも何も、俺たちは外様です」

「だからなんなんだよ。譜代も外様も、江戸時代じゃねえんだぞ！」

「用済みになれば捨てられる、と言ったままでです」

「口ごたえするんじゃねえよ！」

巽が懸命に口止めようとすると…どうやら、中本派の立場は思っているよりも安泰ではないようだ。それどころか、一気に外様からの主流派入りを果たし、そのせいか妬みの声が一般党員を中心に日増しに強まっている現実もある。もっとも、中本派の中にはそんな妬みの声などどこ吹く風と言わんばかりか、それとも気付いていないのか、氣にとめない面々のほうが多い。ただ、中本派を除いた残る2つの派閥も、そして無派閥の面々にも中本が横谷の正体にまでは至らないものの、中本が自らの意思ではなく他人に言わされている印象の強いことは容易に察せられている。ゆえに、中本は幹部ならいざ知らず一般党員の間では評判が日増しに落ちていた。

一方、ここは市役所本庁舎…深江はすでにこの中に入っていたのだった。光友電工の過去を暴露して、新莊川流域環境総合センターに絡む談合をはじめとした汚職を暴くことに何の意義があるのか…と。

「桑島さんも北条さんも、何を考えてんのよ！」

憤るのも無理はない…厄介者扱いばかりして、自分でもできるんだという証明をしたいところだ。だから懸命にネットや東京のつて

を使って光友電工の関係者の周囲を調べた。自信はある…横谷との1対1を申し込もうとした矢先、携帯電話が鳴る。

「…はい」

電話の主は、東京本社の政治部デスク・清水耕輔だった。

「…元気そうだな。ま、それでいいけどさ」

「どうしたんですか急に？こっちはこれから…」

「まさか、光友電工のことで記事を載せようってことか？」

あっさりと見透かされた深江の心理、清水はさすがに直属の上司だっただけある。

「光友電工だけじゃ済まねえよ…おう、深江。武田信伴くただけのぶとも、って知ってるだろ？」

「…経済欄で、日本新聞「ウチ」の記者と対談したことがある人でしたよね？」

「三菱電機の代表取締役…もとい、系列にあたる三菱環境プラントの創業を裏で率いたヤツだ。典型的な理系畑、しかも旧・三菱財閥の創業者一門の血統。菱風会の会長にまで上り詰めやがった、苦勞人だ。プラント繋がり…光友電工は、三菱電機グループにとってプラント事業を巡る目下の宿敵ってとこだ」

「菱風会って…三菱グループの企業の社長の会合組織の？」

「ああ。武田が会長になるまでは三菱銀行の、しかも武田一族はそのときは影も形もないほどに目立たせないでいた。今回の記事、武田が一枚かんでいるという状況証拠は十分に成り立つぞ」

では、その武田信伴は横谷とグルだったということか。しかし、それだとできすぎている上に直球すぎやしないか。深江はそんな疑問を清水にぶつける…すると、電話ごしなので深江にはその表情を読み取ることができないのだが、清水の表情は強張っていた。いや、深江の成長に面食らっていたといったところか。

「やっぱ、お前を高知に送り込んで正解だったぜ…桑島に鍛えられたか？じゃ、俺からのヒントはこれまでだな」

そう言っ、清水は受話器をそっと置く。ともかく、談合を巡る

もう1人のキーパーソンなのか、横谷に会う前にもう1度頭内やメモで武田のことで整理していく深江…すると、もう横谷のことなど忘れて市役所本庁舎をあとにして、桑島の事務所へと戻っていった。一方、この日：横谷は最後まで市長室から出ることなく、市議選後の最初の臨時議会の初日は流会も同然になった。まるで、嵐の前の静けさと言わんばかりに拍子抜けした市議たちは次々と市街地に繰り出す結果になった。市議たちが次々と後にしていく様を市長室から眺めつつ、1人もその姿を見なくなったところですからと横谷は席を立ち、市長室を出て市役所本庁舎を後にしていった。市長らからぬ、相も変らぬ孤独の家路である。

翌朝、横谷のアジトでは巽たちが大騒ぎしていた。

「ちよ、ちよつと来てください！」

叩き起こされた中本や横谷が不機嫌なのは言うまでもない。巽たちに誘導されるまま、玄関に出てくると…そこには、いかにも目立つ2つのとぐる巻きの糞が置かれていた。いや、どう言えばよいのだろうか：表現に困る中本と横谷。

「誰だよこれ！」

「わかりません。朝起きたら、ここに…」

「敵の陰謀かもしれない…現状維持だ。カメラで証拠をおさえておきましょう」

慌てることなく、横谷はサクラを構成している女たちに指示してデジタルカメラで写真をおさめて証拠を残しておく。

「ヤツしかいねえな…絶対に赦さん！」

「…北条の手の者が、こんな姑息でベタすぎる手に打って出るとは思えない」

「…北条？桑島だろうが」

息巻く中本が、声をやや荒げて横谷に問い掛ける…北条照実と桑島に、接点があるというのか？

「いや、まさか…ヤツじゃないか？光友電工とか、あとは四菱の連

中の路線も否定できない」

「武田信伴だな？…四菱つてのは、昔っから俺は気に入らねえヤツらでな。シメてやろうと思つてたところだ」

「いや、向こうは貴方はもちろん僕でさえ無視される存在ですよ」

武田は今、四菱環境プラントの創立後10年を記念した技術展示会の計画に奔走している…そもそも中本らとの直接の接点などここにもない。もしあれば、とうに武田は代表取締役社長の座を追われ、名実ともに旧・四菱財閥の創業者一門の風格も何もかもが失われる。ただ、横谷には武田など眼中にもなかった…いや、利用するだけ利用して最後には武田を簡単に奈落に落とせるという自負のほうがついていた。

「僕にかかれば、武田信伴など簡単に捻り潰せる…」

「…あ？」

「いや、なんでも…」

そう言つて、ベランダに戻つていった横谷…意味深だ。光友電工の次は、四菱環境プラント…いや、それどころか四菱電機といったところか。

（僕に言わせれば、農業以外の産業は虚業だ…工業なんてのは、その最たる例だ）

その日の夜、桑島の事務所にはいつもの面々が集結していた…桑島のほかに深江、そして照実・邦憲の“ダブル北条”に毛利の5人である。今日の臨時議会が流会になつたも同然なのを受けて、改めて新莊川流域環境総合センターを巡る談合の真相を含めた横谷の対応などを想定した作戦会議を練る。もちろんカーテンを何重にも張り巡らされ、蟻の這い出る隙すらない…横谷のサクラたちが執拗に桑島を狙うのは想定内である。そこに、チャイムが不意に鳴つた。一気に目を尖らせる邦憲…ただ、さつと桑島が立って受話器を取る。どうやら、桑島の知り合いのようだ…

「知り合いだからといって、容易に部屋に入れるものじゃないだろ

？」

釘を刺す邦憲を無視して、桑島は部屋に入れていった…非常に小柄で、ギターを背負う女が5人の前に現れる。

「桑島、お疲れ！」

「悪かったな、わざわざ東京まで行かせてよ…」

「どういうことだ？…妙に馴れ馴れしい桑島とその女の仲を、邦憲が疑わないわけがない。ただ、照実は気兼ねなしに頼が緩んでいた。

「あ、北条さん！お久しぶりです」

「久しぶりだなオイ、元気してたか？」

「このとおりですよ」

談笑している暇はないと言わんばかりに、3人の様を睨む邦憲…しかし、桑島や照実にはもはやどこ吹く風か？

「あ、ごめん…本題に入らないとね」

そう言つて、さつと桑島の隣に座つたその女の前に、またしても邦憲が迫る。

「わかつているなら、座らずにとつと帰れ。お前の居場所は、ここにはない」

「あるよ。桑島に頼まれてたのがあつてね…命懸けだったんだから命懸けとはどういうことか？…いわば、副業として桑島の情報屋をやっているところだ。本業は、ミュージシャンを目指す普通のどこにもいる女といったところか。桑島とは高知大の同期生で、同じサークルだったらしい。ということは、照実とももちろん接点はある。

「黎明党と、あとは光友電工。それに三菱電機…とりわけ社長の武田信伴と三菱環境プラント！」

深江が一気に目を向ける…三菱電機グループの名が、その女から出るとは想定外だったに違いない。

「三菱が、大手電機メーカーの中でかなり出遅れてるのは知ってるよな？」

「そもそも、“三菱”そのものが武田一門の影響力を排除してから



のほうが不祥事が続いているしな…」

「起死回生、というか環境にうるさい現代だからこそ…そういう機を見るに敏な武田信伴が、他のメーカーにない特色として新しい事業の開拓を目指すのに、なんら不思議はありませんね」

「それと、武田一門の名誉回復のためでもある」

それが系列会社として、三菱環境プラントの設立に由来するのは言うまでもない。武田は、環境の世紀と叫ばれる昨今の風潮をすでに10年前に読んでいたという。

「となると、環境センターの談合に武田信伴は一枚かんでいた…ってことじゃないですか！」

「いや。かむとしたら、武田の立場に立ってみるとわかる。光友電工を追い遣るには、確かに状況証拠はある」

「市場原理を容認するとは、まさにそういうことですね。均衡するまで喰い合わせねば、いびつな状態が続くだけです」

「そこに介入して、自らの政治力を試す気だね…横谷ってヤツ」  
「いや、横谷は経済活動に対する公的介入を極端に拒否している…無政府主義と見間違えるほどにな」

副業情報屋の女も混じって、6人が真剣に事の推移と心理を探りあう…しかし、横谷をはじめ現状の黎明党をめぐる新たな情報を聞いて、桑島たちが青ざめたのは言うまでもない。実態以上に、横谷の独裁政党といえる体制でしか…役員会も単なる横谷への翼賛機関でしかなく、党首はいるが権限も何も無い状態で実質は横谷が黎明党のナンバー1といえる位置にいる。そして、北条一門への怨恨もさることながら世にも恐ろしい思想を露呈している。その具現化が、高尾山系を切り拓いて築いた自らの集団農場である。

「まるで、コルホーズとかじゃねえか…そんなの」

「冗談じゃないんだよ。これ、全部マジ…農業が大事とはいえ、背筋が凍ったね」

そんな言葉をしれっと吐くだけで、邦憲以外には決して堪えられない気分ではないだろう。

「農本主義、か…」

「横谷は、共産主義者にも通じますね…何もしないで富が完全平等に行き渡る社会構造など、現世の論理を大きく逸脱しすぎています」「あと考えられるのは、“派遣切り”に便乗しようということも…」「それでも、正社員やら継続雇用的一端にある団塊世代はのうのうとしつつける」

「世代間格差をあまり、異様な対立を生んで便乗して…横谷のヤツ、自らの農場をもう一つ建てる気だな」

「そのためには、他の産業に従事する人たちは皆が邪魔者…派遣切りは、横谷さんからするとそのための恰好の口実を得ているんですね？」

「光友電工を潰したら、次は三菱電機…武田信伴も、横谷ってヤツを見くびっていると返り討ちに遭うよ。あいつはマジでいつちやってるからね…武田を利用するなんて、屁とも思っっちゃいないだろうね。現に光友電工が邪魔な存在なのは、横谷にも武田にも共通している事柄。農本原理に冒されている点じゃ、中本行弘とも共通する。だから同盟が組めるんだよ、あいつ…」

「ま、どのみち横谷はやっぱり利権談合共産主義者の一味ってことだけは確かなようですね」

桑島は、一連の討議をふまえて一つの結論を推理する。その言葉に思わず、納得づくな目で見る深江や情報屋の女をはじめ、毛利もその中に混じる。ただ、照実と邦憲…“ダブル北条”だけは納得しきれていない。

「中本行弘の場合はそうかもしれないが…中本が本丸とは、そもそも思っていないよな？」

「だとすれば、前提からすでに間違っている」

釘を刺されてはたまらない…中本と横谷を考えると、照実の話によるとどう見ても中本のほうが横谷に操られているはずだというそうだ。中本を攻めれば、確かに牙城なんてものがない以上は簡単に崩壊できる。ただ、それは横谷に都合が良すぎるだけだというもの

…ましてや、新莊川流域環境総合センターを巡る談合問題の再燃は、そんなところで終わる次元ではない。横谷の、プラント関連事業そのものや環境政策、また工業そのものに対する挑戦状を突きつけるに等しい行為だということを自覚しなさいと、いつまで経っても打倒を実現できない。

「俺たち北条一門にも代理戦争を仕掛けられているんだってことも忘れてもらっちゃ困るんだ。そして、今回こそは決着をつけないといけない」

「ま、俺は武田まで助ける気は毛頭ないが…利権の後始末は、三菱にも責任を被つてもらおうとしてだな。談合問題の本質は、確かに横谷と同じく責任が光友電工に及ぶことまでは共有しているという、厄介な事態があるからな。常に最悪のシナリオを想定しつづけないといけない。答弁の際の原稿を編集するべきだな」

邦憲のこの言葉に対し、異議を唱える者は不思議と誰もいなかった…情報屋の女でさえ、邦憲の理路整然とした対応にひたすら呆然とするほかなかった。6人の思いは、一気に共有された…横谷を打倒する、そのために臨時議会で先手を打って談合問題に踏み込むために答弁の文書を懸命に考えた。そして、文章化していつて答弁の天才といわれる毛利の助言も加えて、徹夜も同然に桑島は議会対策のために奔走した。それらが全て終わる頃には、もう外は早暁の様相を見せていた…

朝…ここは東京。品川駅前にそびえるビル群の中に、ひときわ目立つ場所がある。三菱電機の東京本社ビルである…武田が社長に就任してすぐ、このプロジェクトを動かしたのだ。そのビルに入っていく1人の男…そう、清水だ。

「すみません、武田社長にアポイントを取った日本新聞の清水と申します…」

受付はすんなりと対応し、実際にアポイントのあったことを確認してから清水は入構証を受け取って、そのまま社長室へと向かう。

武田との1対1は、実に久々だ：いや、政治部としては初の試みだ。

「失礼します：社長、清水様がお越しになりました」

「うむ、応接の間に案内したまえ。直に参る」

「かしこまりました」

どうやら、本当に清水と1対1での取材に応じてくれるようだ：応接の間、出された緑茶に手をつけようとした矢先に武田が入ってきた。

「いやいや、気にせず：この緑茶、なかなか健康にもよいものだよ。体内環境、とでも言えばよいかな？」

そう言つて、顔をほころばせながら武田はゆっくりと席に座る。すると、目の前にメモ帳とシャープペンを取り出してすぐさま取材の準備に入る清水であった。

「おや、気が早いねえ。経済部の彼女だったか、あときはもう少し私の雑談に…」

「そんな暇はねえんだ、悪いがな。単刀直入に言うぜ、談合問題に深入りして横谷と組んでいったい何を企んでいるんだ？」

「これはまた、政治部の方はイラチのようで」

「イラチとかそんなんじゃないかねえんだ、時間がないんだよ：こっちにや。高知県漁野市つてとこにある、新莊川流域環境総合センターのことを知らないとは言わせねえぞ：武田信伴」

武田は明らかにたじろいでいた：清水はなぜ、そこまで知っているのか？侮つてはいけない相手だという感じで、グツと清水を見入ったまま長く沈黙を続ける。

一方、漁野でも桑島をはじめとして市議たちが市役所本庁舎に集結：中本たちも正門前でいつもの抗議活動を展開する。異様な雰囲気、深江も傍聴席の場所を取って準備を始める。裏側では邦憲が、相手の動きを陣取る：照実と毛利は、依頼のために東京に向かわざるをえない状況にあった。数日は戻ってこられない…

「あいつら、特に照実のためにも結果を出さなければな」

そう決心を固めた邦憲の目の前に、不意に1人の若い女が現れる。

「あなたは、私を…拷問するんですね？」

さすがの邦憲も、この突拍子もない言葉には目が点にならざるをえない。いったい何を言い出すのか、と。しかし、その女もまた桑島たちの命運を大いに握るであろう存在とは、このときは誰も気づかなかつた。

## 怨敵北条（後書き）

第7話から、ブランクが長くまた空いてしまいましたね：仕事内容とも、次の第9話は特にそうですが今後は微妙に深く関わっていくことになるうかと思えます。

環境総合センターと申しますと、それではなかなかイメージが湧かないでしょう。ましてや、プラントという単語を聞くことは早々あることじゃないと思います。いや、関係者であれば敏感なだけで早でなければ想像も難しい分野なので、意外と見逃しがちな盲点が入札時の談合事件というところでしょうか。

いわば、俗に言うゴミ処理工場とでも申しましょうか：今はそう呼ばないらしいそうなので、気をつけねばならないんですがね（汗）。

自治体の規模が小さければ小さいほど、業者による談合もまたリスクが伴うというものです：現に、プラント事業というものはそういうものと無縁ではありません。まずプラントとは、和訳すると大型機械といったところですね：ほかには、発電所とかを想像していただければわかりますが、意外なところで縁の下力持ちと申せば宜しかろうと。今回の新莊川流域環境総合センターとなると、漁野市はあくまでも中心というべきであってほかにも多くの周辺自治体と共同で運営する場所といえは適当かと思えます。

1市単独で運営できるのは、政令市規模でないかね：はたまた、その談合疑惑を今頃になって持ち出す意図はどこにあるのでしょうか？

「横谷の策謀が本格化した」  
と予想されるのが大筋だろうと思えますけどね。さて、一方で中本たちは市議選で不正があったと息巻く：明らかにスケープゴートと

申しますか、こういった方面の知識に全く長けていないので、どういふ目的なのかは自ずとわかると思います。根拠たりえる物証もありません、一般の店を敵憎して襲撃する姿を生で見た場合に滑稽だと思いませんか？…いや、もう陰謀論にまで首を突っ込もうとしている状態ですから、果たしてどうなっていくのでしょうかねえ？…次第に、どんどんおかしい方向に先鋭化していく危険性は感じ取れるかと（汗）。

「カルトを高知から叩き出せー！」

高知じゃなくても、皆様の地元でもかまいません…皆様の家や店・勤める会社で、こんなことをされたり言われたりしてどう思いますか？…そのあたりの想像で、合致するまいようです。

『立憲明政党』は、少なくとも派閥が3つ出来上がっていると思われる。『黎明党』も、党首はいるものの横谷の独裁政党も同然。いや、底辺まで見るとそういう政党って本当にありますからね…利権談合共産主義に抗うのではなく、その構図に新規参入を目論んで利権を享受したいとしか考えられない連中が底辺に巢食うのも無理からぬ理屈ですが、底辺政党に利権を享受するなんて発想は、共産主義と銘打っている以上は想像に難くないですよね？

光友電気工業（以下、光友電工）と三菱電機 & a m p ; 三菱環境プラント…プラント事業を巡る古参と新興の戦、その当事者の1人といえよう三菱電機の代表取締役社長・武田信伴くただけだ・のぶとも>役には伊武雅刀さんをイメージしました。理系畑でもある限り、武田がどれだけ腹黒いやツなのか…そもそも、三菱財閥の創業者一門の血統を引きますからね。かつ、今まで社内で干されてきたとなるとどうなるか…さてさて、第9話がどんどん複雑な展開になりそうだ（汗）。

## 滅工興農（前書き）

不祥事の真相究明は、議会へと齎を投げられた！ 農本原理の推進  
か？それとも工農一体の維持なのか？



## 滅工興農

「あなたは…私を、拷問するんですね？」

不意に、北条邦憲の眼前に映った1人の若い女。恰好そのものも奇抜だ…明らかに一世代前と見間違うばかりのゴスロリといえる風貌、かつそれが絵になっているのだから余計に邦憲には疑義を持たせるに十分なところだ。

「これ以上、怯える姿を曝したくありません…」

女は言葉が続ける。ただ、事態を飲み込めない邦憲にはどうしてよいのかわからないでいた。邦憲の理解をはるかに超越する存在、としか思えないからだ。

「…何を言いたいんだ？俺にはさっぱりわからないんだが」

「止めてください。刃向えば、拷問されるんです…」

誰が拷問されるというのか。止めるべき相手は誰だ、と邦憲はふと考える。

「まさか、桑島庸介のことを言っているんじゃないだろうな？…もう無理だ。新莊川流域環境総合センターのエネルギー回収プラント納入を巡る談合疑惑の再燃は、横谷を追い落とす絶好の機会の1つ。ここを逃したら、横谷の恐怖政治によって漁野市はあちこち篡奪される…それに加担するだけだ。どうしようもないツケを、全国に発信してしまうだけだ」

そのとき、女は全身をわなわなと震えさせ、時に怯えるような表情を見せながら涙する。

「刺激しないでください！」

ありつたけの大声が、市役所本庁周辺をこだまする…思わず邦憲は、女の口を片手でふさいだ。

「何を考えている？…ここに俺以外誰もいないとは思っていないよな？」

「また、拷問される…」

まったく、邦憲とその女との間に会話が成り立っていない。むしろ、横谷の仲間なんじゃないのかと思う邦憲がそこにいる。

「さつきから、いったい何に怯えているんだ？…あと、どうして俺たちの邪魔をする？」

「邪魔などしていません。拷問の恐怖を知らないから、そんなことが言えるんです…」

おおよそ、この時点で邦憲には察しがつき始めていた…おそらく横谷のことだろう。横谷と女には、浅はかならぬ因縁が潜んでいるかもしれない。

「その拷問の恐怖とやらから、俺たちが必ず解き放つてやる」

怯える女をそつと優しく、邦憲は抱擁していた。一方、桑島はすでに議場で淡々とそのときを待っていた。突如として沸いているに等しく、ましてや横谷には専門外といえよう環境プラントを巡る諸問題…切り込めるはずがない、光友電工を追い落としたい三菱電機グループや武田信伴の野望の存在にも気付いているはずがない。その思いは桑島だけではなく、背景を懸命に調べた深江友璃子でさえも傍聴席から真剣な目つきで見っていた。

（あれでいける…絶対に、横谷さんは桑島さんに勝てない！）

ついに緊張の一瞬…横谷が議場に現れたのだ。桑島の顔の剣幕が一気に鋭くなる…すでに心理戦は幕開けていたのだ。そんな強張った桑島をよそに、横谷は一時も表情を変えず微笑を浮かべたまま薄気味悪く市長の指定席に着席した。議員たちは方々で談笑やらを続けたまま…横谷を不信任決議で追い込んだ自信なのだろう。次も出せば必ず可決し、今度こそ横谷は市長の座を追われるからだ。

「いいか。決して、ほかの議員どもに不信任決議を出させるんじゃない」

不信任決議を出させ、疑惑を再び曖昧にすることは何を意味するか？…議員の中に、談合疑惑に絡む者がいるという状況証拠を露呈するだけだ。そして、ほかにも理由はあると邦憲は桑島に釘をさし

ていた…しかし、そこまではまだ説明されていないが選挙には公金が投入されるとあつては桑島には容易に想像がつく。

（わざと破綻に追い遣るためだろうな…やっぱ許せねえよ、あのヤロウ！）

破綻の意味をわからせてやる…夕張のような転落を、骨を埋めると決めた漁野で見たくはない。真の愛郷心を持つのは誰か、それが表面化すると桑島も自信を覗かせている。そこに議長が表れる…臨時議会の開会の言葉が、1日遅れで発せられた。

「まずは市長の…」

「議長！」

高らかと、桑島は声をあげながら挙手する。

「…桑島庸介君」

すつくと桑島が立ち上がる…長く文を綴った原稿を片手に、壇上にあがる。

「市長は、本今朝刊の一面を飾った記事を存じておりますか？」

漁野市ほか高知県中土佐地方の複数の自治体が互いに出資して、ごみ処理工場として建設した新荘川流域環境総合センターに納入するエネルギー回収プラントを巡る入札で談合があつたという疑惑に踏み込んだのだ。しかし、これは岡村前市政のときにも1度疑惑が浮上したが踏み込めずじまい…市職員の1人に過ぎなかつた桑島にも、苦い思い出だ。そこで背景を続々と調べなおすと、確かに光友電工は大きく関わっている。そして、裏にまわれば市職員や岡村前市政の当時の市幹部や助役たちを味方につけようと訪問するのが地元建設会社はもちろん、電機・重工業系の企業まで多く訪れていたという。プラント事業を巡っては、プラントそのものの耐用年数をふまえて今が30～50年周期の終盤に差し掛かる…いわば、古い機械を新しく換えるのと原理は同じことだ。そして、光友電工をはじめとした旧来のプラント事業における勢力図に底辺から急激に台頭してきた企業の存在も明らかにした…いや、その企業はもともとシェアがなかつたのではなく発電所での実績をふまえて、ごく一部

ではあるがエネルギー回収プラントにも自治体で世話になっているところがある。その自治体が漁野市ほか新莊川流域とは別の地域ではあるが、同じ高知県内にある…暗に企業名を伏せたが、三菱電機とその系列たる三菱環境プラントであることは調べれば明々白々だ。それも、武田が社長に就いてから顕著な傾向を見せている…武田にとって光友電工は最も眼中の商売敵であり、その武田との癒着にも一部踏み込んだ内容を、桑島は丁寧にも長い原稿を懸命に読み上げていく。その間、他の議員たちの野次が止まることはなかった。

「野次っておられる議院の皆さん、貴方がたの中に触れられたくないことでもあるんでしょうか？…利権のための赤字は、一刻も早く根を絶たないと市そのものを滅亡に追い遣るんですよ。それとも、意図的に高知市に吸収されたいのでしょうか？」

強烈なカウンタパンチに等しい発言を、桑島は壇上から言っただけのけた…元議長・原幸治ほか中道彩子をはじめ、ほかの議員たちは桑島にとって大敵に等しい利権談合共産主義者の一味であることはこの数年ですでに判明している…いや、市職員の時代からずっとそういう疑義を持ちつづけていたことが確信に変わりつつあるだけだ。「さて、皆が黙り込んだところで…宜しいですか？」

横谷が待つてましたと言わんばかりに、高らかに挙手する。普通は戦慄が走るのだが、至って桑島は自信もあつたせいか冷静だった。（何を言っても無駄だ。まずは門を破つたぞ、お前の巨城のな！）意外といえば無礼だが、横谷は突拍子もないところもあるがそこは冷静に理知を披露しているせいか、彼の中では完璧なまでに理論はでき上がっていた…資本主義を、近代国家を超克した新たな社会構造・政治体制を築ける。桑島に負けず劣らず、いや…桑島よりもはるかに自信に満ち溢れていた横谷がそこにいる。そんな横谷の姿に対し、傍聴席にいた深江は違和感を感じないではいらなかった。そう、サクラたちはいつものとおり陣取っていたのだが黄色い声を出していないのだ。

（いつもなら、ここで出るはずよね…横谷さんの答弁だっていうの

に)

横谷と入れ替わるように、桑島は自らの席に戻っていった。そして、答弁書も何も持たず手ぶらのまま横谷は壇上で声をあげる。

「先ほどから何を的外れな…僕には全てわかっていましたよ」

桑島に負けないカウンターパンチを浴びせた…横谷の心理はまさにそれだ。横谷は、さらに言葉を続ける。

「いいでしょう。徹底的に談合疑惑とやらに踏み込んで、皆さんの羨望であろう不信任決議の再提出は阻止してやります…まあ、不信任決議をもう1度可決して僕を追い遣れると思っただら大間違いですけどね」

そう、1度目で議会解散の選択をした横谷にはもう市長辞職しか手がなかった。短期間で2度という、異常事態を通達されそうなら直し市長選が幕開けることになる。ただ、辞職したから2度と出られないという規定はどこにもない…横谷は何度でも、蘇る可能性があるということだ。

「光友電工は、布石に過ぎません…彼らは大罪をすでに犯しています」

大罪？…光友電工は談合に加担していたと認めるのか？…そのとき、議員たちの野次がまたもあがった。

「黙って聞けよ！」

制止する桑島…堂々と、光友電工の名を出しているぐらいだ。確証を見つけたかもしれない…いや、正確には横谷の発言の意図が全く読めないでいた。

「そもそも、漁野市に光友財閥が進出したことが市の衰退の原点ではないでしょうか？」

“工農一体”を掲げてまちづくりに励んでいた漁野市の黎明期たる、昭和30～40年代…現実に高度経済成長期にも差し掛かり、農作物や海産物をまちの特色にしつつ他の雇用問題の解決にも貢献したいという意図と、固定資産税や従業員らの住人税の大幅増収を目当てに大手企業をはじめとした工場や大型事務所を誘致する運動

が活発に行われていた。漁野市の当時の市政も積極的に参戦し、高知県中土佐地方とはいえ県のほぼ中央部にある地理感をPRし、海面に即した天然の良港を持つと行脚していった。その結果、ついに折れたところがあった。旧・光友財閥の新たな工場を建設したかったと思惑と完全に一致し、光友鉄鋼が漁野港の近くに高知工場を建てた。もともと、旧・光友財閥の中でも鉄鋼と電工は特に密接な関係にある事業が多く、プラント事業もその1つであった。

以後、光友鉄鋼グループの多くの従業員ほか、法人間契約による協力会社の社員はじめ光友電工からの強力なバックアップもあつて、漁野市は和歌山県紀州市とともに人口は約3万人前後と小規模ながら“工農一体”を具現化したモデルとして注目を浴びた。人口も最大で約4・6万人にまで増加した。互いにモデルとして扱われた好からか、紀州市と友好関係を持ちながら互いに切磋琢磨していった。紀州市にある戦国時代の山城として最大規模の遺構・箕嶋城址は、市や県の指定重要文化財のみならずついに国に認められた。一方、歴史的な遺構はほとんどないものの漁野市も光友鉄鋼高知工場の一帯を“土佐光友城”といわれるほどに環境を整備し、公的なバックアップのもとさらなる飛躍の代名詞にもなった。しかし、漁野市も紀州市も現在は中長期的展望の不透明化に等しい乱脈的な公立施設の建設と都市回帰が重なって減収に減収を重ね、多額の累積赤字に苦しんでいるのも共通項だ。

「前にも言っただけです。僕が市長の職務を全うしたときには、きれいさっぱり累積赤字は消えていると。そのための手法も聞かないで、僕を市長から追い遣ろうとするとは笑止千万と言っほかないですな」

「そんなこと、聞いてるんじゃないねえ！」

一斉に野次が飛ぶ。光友鉄鋼の工場を誘致した自負を、大いに傷つける発言への激昂だろう。

「江戸時代の日本は今と違って、理想といえらるとても素晴らしい国づくり・まちづくりではなかったでしょうか？この漁野市のあた

りもそうです。土佐高知藩の藩政において、実に約260年間もの長い平和と至福のときを過ごしていたではありませんか」

確信に変わりつつあるものがあつた。やはり、横谷に愛郷心はない。漁野市を愛しているわけではない、と。悲哀の歴史を全くわかつていない。漁野市をはじめ高知県全域は土佐国とよばれ、その一国・21万石の藩主として君臨したのは山内家。しかし、戦国時代に至るまで土着していた国人衆はじめ、かつて本拠としていた長曾我部氏の旧家臣団はそのままに長曾我部宗家だけは断絶させられたに等しく、特に初期は彼らの抵抗が激しかった。冷遇と弾圧の歴史を、完全に知らないというのか？。漁野市も含む新莊郡一帯でも例外ではなく、藩主宗家たる山内家に怯え、憎みながらも堪え忍ぶ生活を送らねば一家丸ごと弾圧される始末だ。そんな山内家の統治方法を、自らの理想だというのか？

「議長！」

「…桑島庸介君」

再び桑島が立ち上がる。反論を述べる、というところだ。ここまでは全て想定内。横谷が回答した内容は、全て昨晚6人で懸命に想定していったシナリオとほぼ合致している。

「光友鉄鋼の高知工場が完成し、それからが衰退だとすれば論理が全くわかりません。漁業や農業はそのままに、新たに工業でも雇用を創出し、かつ彼らも立地からして漁野市に多く移住してきました。雇用の創出は同時に固定資産税・住人税の増収に無縁ではないでしょう。かつ、市民1人あたりの平均年収にも影響がないわけではなない。飛躍的に、まちづくりにもよい影響を与えているではありませんか。そして、彼らの地道な技術の継承と力をもって漁野市のみならず高知県、いや、全国にブランドを身につけた製品らが出まわっているではありませんか。衰退の意味が本当にわかりません。市長は、光友鉄鋼にどうしろと言うのでしょうか？。光友電工に対して、疑惑の究明に協力しろと本気で仰っているのでしょうか？。新莊川流域環境総合センターの運営参画から、果たして撤退するつもりな

のでしょうか？」

次々と浮かんだ…いや、予め想定していた疑義を横谷にぶつけた。すると、微笑を浮かべたまますくと席を立て横谷は挙手しながら壇上に向かった。桑島は壇上を去り、また元の席に戻る。

「ふふふふ…」

まるで小ばかにしたようにクスクス笑いをとる横谷…桑島の表情が、一瞬にして緊張した。

「これほどとは…いや、僕に逆らうヤツはことごとく程度の低い連中ばかりですが、例外はないようですね」

逆らう？…党内で肅清を繰り返してきたヤツが何を言う？…まずまず、桑島の表情は強張っていた。その事態、若い女を抱きかかえたままの邦憲には飲み込めませんでした…それもそのはず、まだ庁舎外にいたからだ。いや、中本行弘の一派が庁舎周辺から退散するまでは安全を確保できないという事情もある。

「そろそろ、1つ目の門を破る頃合だろうな…横谷の居座る、難攻不落の巨城を陥落させるための第一歩だ」

「お願いですから、やめてください。刺激しないで…」

相変わらず怯えるその女は、必死に邦憲から離れようとしていた。ついに痺れを切らした邦憲は、言葉をあげる。

「いったい何をしに来たんだ？…何に怯えている？…どうせ、横谷だろうな」

横谷の苗字を邦憲から聞くや、女は乱暴に手を解いた…そして、その勢いで邦憲の右頬を平手で叩いた。

「そんなに拷問されたいんですか！」

「…さつきから、拷問拷問とうるさいぞ。俺たちの邪魔をする気なら、横谷の味方とみなさざるをえない」

邦憲はありつたけの心理をぶつける…言動を見るや、極度の恐怖症に陥っているとしか考えられないという判断だ。一方、桑島は横谷の答弁が始まるうとしてた矢先、ふと邦憲の言葉を思い出す。

「政治家の中で、真剣に第二次産業の現実を見ようとしてない連中



が多すぎる」

それは、国政にしても地方行政にしても例外はない…第二次産業建設業の関係者はいるがいずれも重役ばかりで現場経験者の本音が政界に届く事情をふまえていない。製造業に至っては、もはや潰滅に等しいだろう…重役も現場も、それぞれじゃないところも否定できないが、最もサイレントマジョリティーたる存在ではないか。

「ふはははははははははは！…ここまでの愚か者揃いとは、僕も随分となめられたものですね！」

甲高く、議場どころか庁舎内を恐怖に陥れるかのような声をあげて、横谷は高笑いする…そして、横谷は言葉を続ける。

「僕が共産主義者だと思っっているでしょう？…それこそ、世界一のカルト勢力として現在も日本を近代国家という形で冒しつづけている資本主義経済の呪縛にとり付かれてはいる証拠ではありませんか？…断言しましょう、僕は真の愛国者と呼ばれる資格はあっても、共産主義者とか売国奴などと蔑まされるような政策を出した覚えは微塵もないはずですが？」

馬鹿な…横谷は、利権談合共産主義者の一味と見て間違いないはずだ。共産主義者じゃない？…どこがだ。富が何もしない状態で平等に行き渡るなどというのは、現世の論理をふまえて人間の名誉欲をはじめとした四大欲を完全に無視した論理でしかないのは明々白々だ。動揺する桑島…政治的にも、経済的にも横谷と合うところは微塵もない。それなのに…なぜだ？…果たして、今回の談合疑惑をどうする気だというのか？

「前にも言ったはずですが…この談合疑惑は、徹底的に究明すると。桑島くんの思いと、そこは共有しているはずなのですが…そうか。細かい方法が違うんだな…まず僕から結論はこうあるべきだと、予告しておきましょう。光友鉄鋼高知工場はすぐさま閉鎖をすべきですね…そして、新莊川流域環境総合センターのあらゆる運営をはじめとした機能から、漁野市は撤退することが最善の道と考えます。そのうえで、日本全国のどの自治体にもない最高の循環社会という

もののモデルを環境省に見せつけるために率先して私が政策を出してまいりますので、皆様の満場一致の賛同をもって実践に移しましょう。だから、あらゆる入札からも漁野市は参加いたしません…光友電工に対して、市独自の経済制裁とでも申し上げればよいのでしょうか、ともかく入札不参加こそ彼らへの大打撃というものです。今こそ、近代を築きあげていた虚業の真相を晒して、彼らこそ共産主義者であると知らしめるべきです！」

怒号が飛び交うのは至極当然だ…恐怖のシナリオとしか思えない。金融事情がどんどんと揺らいでいるのは、日本新聞の経済部です。に先刻承知の内容であり、労働者政策・経済政策の抜本的な転換を図らねばならないと主張していた。畑が違う深江には、そこまではさすがに及ばないが横谷のシナリオが漁野市をさらなる不況の荒波へと追い遣ることぐらい、想像できないはずがなかった。そして、あれだけ自信に満ちていた桑島が恐怖する姿をまともには見られななくてもいい。もはや、議場内は収拾がつかないほどの怒号の嵐であった…桑島には、その怒号すらどこ吹く風と言わんばかりに突っ立ったまま放心していた。全てのシナリオが無駄になっていく…そんな虚無感に支配されていた。

「静粛に！…休憩といたします！」

元来、ここで休憩を挿む予定はなかったが、議長はたまらず休憩を宣言した…こうなると、論戦は持ち越されたままだ。

一方、市役所庁舎周辺で演説を延々と繰り返しているのは、横谷の盟友というよりは操り人形にすぎないといってもよいだろう。中本行弘や異誠直など、『立憲明政党』中本派の面々を主力とした、いつもの面々であった。

「不正を認め、選挙をやり直せー！」

意味もなく声を出せば全てが通るとは、もちろん常識に溢れている者の発想ではない。所詮は本丸ではない…とはいえ、そこに1人の人影が現れる。

「その姿、自分で滑稽だと気づかないのですか？」

毛利俊就…なぜ？北条照実とともに、東京にいるはずだ。もうすでに用事を済ませていただけではあるが、そのような情報網が中本たちにあるとは思えなかった。

「だからなんだよ…」

「もう少し、賢くまわることを覚えないと自分たちに跳ね返りませよ」

「なんだてめえ、毛利！コラア！」

「なめんじゃないわよ！」

取り巻きたちがあつという間に毛利を囲む…涼しげに、表情を変えることなく毛利は言葉を続ける。

「まだおとなしいほうですね…北条さんだったら、こんな程度じゃ済まさないでしょう？…海外から移民を多く受け入れるべきだと主張していた。そうですね？」

「そんなこと聞いてんじゃねえんだよ！」

「まあ、興奮せず落ち着いてください。僕がどこの党の議員か、わかりますよね？」

「…聞かれなくてもわかるよ。民自党だろ？」

中本派には、民自党を指示して権力を分けてもらおうという魂胆をもつ者たちも少なからずいることを毛利にはすでに先刻承知のことである。それを逆手に、毛利は中本に提案をぶつける。

「気が変わったんです…中本行弘さん、でしたか。貴方の援護射撃を、私はこの場で申し出たい…これまでの情報、自平連の外交政策、なんでも貴方に提供できるものは持っていますよ」

その微笑を浮かべた毛利の姿、まさに民自党の今を憂える右派系の面々の1人でもある毛利の看板にすがりたい面々には、この上もない感謝の申し出と疑われないのだった。しかし、一部の者は未だに疑義を挿んでいる…なぜ、ここにきて毛利は裏切りにも等しい行為に及ぶのか？桑島や北条照実らとつるんでいる、とあって警戒はなされている。

「大丈夫なんですか？毛利は…」

「わかんねえよ。でも、俺たちに有利な情報が垂れこまれるっただけでも話を聞く価値はあるだろ」

「でも…」

「民自党だぞ、自平連じゃねえ。信用できる！…俺が今まで逢ってきた民自党の議員どもは、全員信用できるヤツばっかだったよ」

中本は根拠があるのか、実態はただ単に騙されているだけだとも知らずに、民自党の名を挙げるだけで信じ込んでしまう悪弊が長年染み込まれていった。間違はなく、横谷よりも中本のほうが利権談合共産主義者の一味と転落しているというのが毛利の推理である…いや、毛利だけではなく誰しもがそう考えるところだ。

「やはり、貴方は見どころが他人「ヒト」と違いますね。民自党と自平連には、互いに埋め難い溝と申しますか…我が国が今後目指すべき基本方針に、乖離が生じてきているのです」

自平連を構成している一派の面々が、『立憲明政党』結成当時の主力であることは先刻承知の上ではあるが、中本派は自平連とのパイプを切らしていくように仕向けているに等しい。

「どうします？…乗るんですか？乗らないんですか？」

「コラア！やつぱ信用できねえな！」

「貴方には聞いていない！…私は、中本さんに回答を求めているんです。答えてください！」

ひるむことなく、横槍を入れてきた男を睨みつつ中本をグツと見なおしながら毛利は力強く言う。いったい何を企んでいるのか？…本気で、桑島や照実・邦憲・深江たちと敵対する気にいるのだろうか？

毛利の裏切りにも似た行動はつゆ知らず、庁舎内では邦憲がそれを察して言った。

「どうやら、上手くいったようだな…ふっ、毛利のヤツ。どんな手を使ったか知らないが、中本たちはもうこの近くにはいないようだ。」

よし、門を破った瞬間を見に行つてくるか……」

そういつて、邦憲は女を尻目に議場へと向かつていった。

「やめてください！やめてください！……本当に拷問されちゃう！」

「いい加減にしろ！……俺たちに時間はないんだ！どけ！」

抱きついて話そうとしない女を乱暴に解いて、邦憲は議場へと一直線に走る。休憩が明けていた……いよいよ、談合疑惑は本丸に入つていくようだ。

（全ては俺のシナリオどおり……横谷、談合疑惑に触つた瞬間からお前は負けを覚悟しなければならない）

しかし、それは表面上のことにすぎない……邦憲は、自らの詰めわずかな甘さを突かれることをすぐ痛感することになる。横谷にとつては、“工農一体”のまちづくりから極度の“農本原理”に則つた社会構造へと漁野市を改革するという、現世の論理に大いに抗う構想を実現させるための第一歩として、漁野市内から製造業・建設業ほか工業全般の滅亡を目論んでいた。

横谷の口からこのあとに出るのは、毛利が桑島に指摘した破産に追い込まれた自治体の実例において実施された経済政策と、その裏に潜む倫理観の露呈である。横谷の築いた倫理の巨城は、未だに城門さえ破られていなかったのだ。

## 滅工興農（後書き）

いつにも増して、刺激的な四字熟語風の表題ですみません（汗）。

ちなみに、上記の四字熟語風の表題は滅満興漢という語から派生しております。時は1851年、日本だと嘉永4年にあたる年です。ペリーが浦賀（今の神奈川県三浦市）に黒船数隻を伴って現れる2年前、幕末に差し掛かる頃ですね。場所は支那大陸・最後の王朝たる清で、漢民族による当該王朝史上最大規模の内乱が勃発し、その内乱は皇帝交代後の1864年まで続きました（この年は日本だと元治元年、蛤御門の変などで完全な動乱期に入っている）。太平天国の乱です。ええ、『ライアーゲーム』『ONE OUTS』『ワンナウツ』で有名な甲斐谷忍氏の幻の名作『太平天国演義』の題材でもあります。

談合疑惑の再燃の意味するところ、桑島と横谷ではっきりと体質が分かれましたね。あくまでも工業をそのままに存続させたい桑島かたや工業滅亡を目論む横谷。産業の問題においても、両極端といわれる農業と工業の対立と申しますか、横谷はその域を飛び越えていると思われる方々のほうが多数でしょう。現に感想の中で

「中本ともども、ポル＝ポト並の重症だ」

というのをいただきました。まあ、中本に倫理観など固定されていないのは今回で明らかになっております。民自党だから信じるって、自分が騙されているとも知らず笑止千万です（嘲）。

『立憲明政党』のモデルとなっている政党も、中本派のような連中が主流になっていると思われ、結成初期の面影は微塵もなくなり、ただの利権談合共産主義者の一味に転落したも同然です。いきなり横谷を攻める桑島・ダブル北条連合軍、その傍らで協商関係の程度ではあるが仲間内の毛利を使って中本派を切り崩す。城門破りと兵糧攻めを、同時に行うといったところでしょうか？。毛利の行動は

彼の真意なのか、あくまでも邦憲の差し金なのかという点だけは謎ですけどね。

そして、最大の主眼は農本主義と呼ばれるもの…私はここでぶつちやけますが、むしろ現在だと農本“原理”主義と言わんばかりの内容に転落していると思っております。経済学・財政学にあまりにも無知な人間が、公的介入容認論ともども冒されやすい倫理観の1つと位置付けておりますが、皆様はどうでしょうか?…知っているところで、こんな一文を見ました。

「保守派と称される面々ほど、経済・内政に対して驚くほど我が国では無知なのが多すぎる」

だからこそ、上記の考え方に至ってしまう。産業においても同じ考え…工業が何をもちたらしめた。公害と環境破壊ばかりだろうと…そして敵意が芽生える。はつきり申し上げますが、四字熟語風のタイトルは皮肉こそ真意です…私は農本原理に冒されることがない。農業ほか第一次産業の再興のためなら、他の産業など滅びてもよいというのは間違っています。滅びてしまえば、再興は非常に難しいどころか下手すると二度と無理になってしまいかねない中、横谷は世情を無視して工業に従事する面々に非情の選択を迫っていきます…二者択一ではない、もはや一択なのです。

時期が秋から冬、12月には何がありましたか?…それとも重なつて、労働者市場はいよいよ激しく流動します。漁野市の体力がもつかどうか、前半最大の山場が次回となるでしょう。横谷が経済学・財政学を無視して完全独学で築いた倫理の巨城、その城門は破られるのか?…皆様であれば、どうやって城門を破るでしょうか?

次回のうちに談合疑惑の話は終わります…武田信伴、三菱電機グループ、光友鉄鋼&amp;amp;光友電工、桑島庸介・ダブル北条連合軍、毛利俊就、深江友璃子など前半を彩った人間関係にも一部理解できるところが出てきます。

利権の裏に赤字あり！利権談合共産主義に抗う！…思いの結実していく様に、私自身もこの世界にどっぷり浸かりつつあります（汗）。



## 光友四菱（前書き）

横谷の冷酷非情な政策が、白日のもとに晒された！ いよいよ、プラント談合疑惑は最終局面へと向かっていく…

## 光友四菱

談合疑惑のみならず、そこからさらに人間模様の複雑化の様相をも見せていた。

『立憲明政党』中本行弘の一派に迫ってきた毛利俊就、そして謎の女の“拷問”という単語が頭から離れない北条邦憲、そして議場の壇上近くに座する市長・横谷佳彦と正面から対峙するのは桑島庸介：そんな緊張感の漂う空気をじっと見つつ、記事のためにメモを取る深江友璃子。この状況下、北条照実だけが蚊帳の外と思われがちだが、彼にも東京での役目があることをまだほとんどの者は知らない。

加えて、談合問題を見れば企業の側にも広がっていく：光友電工、そして三菱電機。さらには、高知工場も深く関わった光友鉄鋼。三菱電機の場合は、技術系出身にして創業者一門の血統を引く社長・武田信伴が鍵を握る。新莊川流域環境総合センターのエネルギー回収プラントは耐用年数に近づき、恒例の更新工事が控える。疑惑が晴れないまま、どんどん時が流れていく：そんな複雑な事情、横谷にわかるはずもない。空席だらけなので、容易に議場に入ることができたようだ：庁舎内を駆け上がる邦憲は、あっという間に議場に着いた。

「…北条、さん？」

邦憲の姿を見た深江は、もちろん驚くほかなかった。やや、息があがっている邦憲はすぐさま深江の側の空席にどかっと座った。

「そう呼ぶな。照実と誤解されるだろ…」

「誰も、誤解しないと思いますけどね」

そう深江が答えると、さすがに沈黙するほかなかった。

（…横谷。どんなに難攻不落を謳う城でも、最後には必ず落ちるんだよ！）

尼子氏の本拠・月山富田城も、約3年半にも及ぶ攻防戦の末に永

禄9（1566）年1月に陥落：尼子宗家当主・尼子義久は毛利元就に降伏した。もつと有名なところで言えば、天正18（1590）年1月より勃発した小田原決戦である。当時の小田原城は、一周すると何十キロにも及ぶ広さを誇り、城下町をも堀で囲い込んだ日本史上随一の“城塞都市”とされ、日本一落とせない巨城として名を馳せていた。その城塞都市たる巨城も、何十万人と攻め込んできた豊臣秀吉方の大軍の前に、同年7月に降伏した。それらの故事にもあるとおりだ。邦憲は、ここまで自らのシナリオどおりに進んでいくことの満足感もあるのだろうか、やや表情に緩みもあつた。横谷は、そんな邦憲の姿を見逃すはずがなかつた：ついに、重い口を開けるかのように自らの市政ビジョンを語りだしていった。

「どうやら、根本的なところからもう1度教えないとわからないのが議員をやっているようですので…」

再び壇上に現れた横谷は、淡々とした表情を浮かべながら不気味な発言を残した。

「なまじ経済学だの財政学だの、害としか言いようのない学問をかじっている輩どもには一生かかっても僕の高尚な理想に辿り着くことはできないでしょうね…」

さらに反感を買う発言を言い放ち、議場はさらに荒れる：怒号とも野次とも言うべきものが、議員側から次々と矢や鉄砲のように浴びせられており、横谷の発言を中止して聞き取るうとする邦憲や深江にとっては迷惑この上なきものだった。その思いは、桑島とて同じことだった。

（うるせえな…野次しか能がねえのかよ！）

野次ばかりでは横谷の思う壺だ：いや、裏を返せば横谷の罠かもしれない。ああやって、敵対しつつも相手に援護射撃を与えているに等しい行為を何度も目の当たりにしている桑島には、おおよそ考えつくだけの状況証拠が揃いつつある。

「どこかおかしいと思わないか？」

「…何がですか？」

野次の飛び交う中でも、懸命に会話を成り立たせようと耳を立てているのは邦憲も深江も同じことだった。桑島が気付きつつある違和感は、すでに邦憲も察していた。

「さすがに北条家の血統が騒ぐ、と…」

「そんなものじゃない。桑島のヤツ、気付くのが若干遅かった。ズルズルといくと、俺たちの攻勢の手立てはほとんど縮まるだけだ。なんとかしなければならぬ。下手すると、桑島を除く市議全員が横谷に寵略されているかもしれない。その途中だと信じたいが、手を打たなければ自分たち以外で桑島の味方は誰もいなくなってしまう。そして、横谷から海外のある経済学者の名を聞いたとき、邦憲の耳に戦慄が走った。

「北条さん、ゲッペルスって確か…？」

素の表情で、深江は邦憲に尋ねる。半ば切れそうな心理に至った邦憲、表情はもう想像にかたくないだろう。

「こんなところだとぼけている場合か？ゲッペルスじゃナチスになるだろ。ゲゼルだよ。シルビオ。ゲゼルだ」

「…聞いたことありません」

「当たり前だろ。経済学はもちろん、財政学でも経営学でもなんでもいい。ありとあらゆる学問から抹殺された、悪魔に魂を売り渡す経済倫理の発信者だったからな」

「もしかして、昨日の夜。毛利さんが話してたのって？」

「そのとおりだ。おそらく、毛利はその経済倫理の真相に迫りつつあるのだろうな」

実態は成功ではない。むしろ、バランスを崩壊させてしまった。うにもならず破綻を通り越した破産という形で、子々孫々にまで及ぶツケを遺したと毛利は言及していたと、深江に伝える邦憲。

「横谷さんは、やっぱり戦国時代から続く北条家への恨みを晴らすために…」

「その可能性は、もう否定できないほど高くなっている。だが…」  
「だが？」

「いや、まだ憶測にもいかなから言えないな」

そう言ってまた沈黙する邦憲。いったい、何を言いたかったのだろう？…深江はずっと首をかしげたままだ。

（憶測？…ゲゼルという経済学者の名前も初めて聞いたし、いったいなんなんだろう？）

そして、横谷は沈黙を保ったと思いきや、さらに言葉を続けた。

「悪魔に魂を売り渡したのは、ゲゼルや僕ではありません。資本主義を信奉する、全ての愚か者たちだ」

一方、ここは東京・品川…駅の東、新幹線ホームのすぐ向かいにそびえる大きなテナントビル。所有は三菱電機…本社があり、その系列会社の本社機能も一部入っている。いわば、旧・三菱財閥の現代型会社組織の象徴である。新興の全国新聞社“日本新聞”政治部デスク・清水耕輔は、この主でもある三菱電機の代表取締役社長・武田信伴と1対1で取材をしていた。清水と武田を阻む壁も何もない…清水が得意とする、取材対象への1対1での取材である。そこで本心を聞き出そうとしていた…清水には、大方ながら武田の考えている戦略が読めなくはない。

「新莊川流域環境総合センター？…さて、ね」

「しらばつくれるな。さっき言ったはずだぞ」

「知らない、とは言わせない。ふふ、そうだったねえ…」

武田にも、清水の意図は手にとるようにわかっていった。どうにかして、会社の機密を暴露させたい…エンジニアとして関わり、そのような情報の秘匿方法にも長けている武田に対して、そのような戦術で挑む男を見るのは実に久しぶりだ。

「ずいぶんと余裕だな。後ろめたいものはなにもない、とでも言いたいのかよ？…だったら、俺の前でも言えるはずだろ？」

「機密に関わることもあるんでね」

プラントに関する技術や運用システムに関しては、武田の言うとおり企業の機密に大きく関わっていることだ。しかし、技術ではな

く経済上の問題だとして清水には当然ながら取り付く島がない。

「その台詞は聞き飽きたよ。いい加減さ、あんたも腹割ってくれよな」

「ふふ。発電所に飽き足らず、環境プラントにも我が社が手を出そうとしているとでも？」

「この話はよ、もう何年前になるかな？…漁野市の前の市政のときに1度疑惑として挙がって、結局は闇に葬られたんだ。それをいまさら、また掘り起こす意図が謎でね。環境プラントの開発と市場参入にも興味をもっているあんたには、光友を陥れてそのおこぼれで環境プラントにも進出するための足がかりをつかみたい。そのため足枷…ってところだろ、武田信伴さんよ」

「やはり、政治部の方はイラチと見てよいね…なぜ結果を焦る？エンジニアの世界に長く身を置いてきた私には、全く理解に苦しむ所業だよ」

「だから、イラチとかそんなんじゃないよ！あんた、とんでもねえヤマに首突っ込んでんだぞ！」

次第に清水のほうで、本性を表すかのように武田にすごんできた。それでも、武田は表情を一切変えないまま緑茶をまた一口つけていた。

「よく呑気に茶が飲めるもんだな…今の漁野市長は、あんたが思っているほどたやすいヤロウじゃねえんだよ」

「ご心配ありがとう。でも、私に限ってへまをやらかすことはないよ…エンジニアの世界でそれをやれば、命にも関わる怪我につながるかなないからね。境界線を、誰よりも身をもって知っているんだよ」

「だったらはっきり言っせ。今すぐ、野望を捨てても環境プラントへの参戦は別のところに鞍替えすることを提言する。利権だけじゃない…このままじゃ、あんたもろとも三菱電機も光友電工やらと同じ運命を辿るだけだぞ」

「…漁野市長と何か関係があるとしてもいうのかね？彼はプラントに

関して素人だ。疑惑に踏み込む気はないだろう。なにをそこまで恐れていると言うのかね？」

武田の口調は一向に平静なままだ。いや、平静さの中にも焦りの心理が垣間見えるのを清水は見逃していなかった。横谷のことになると、一瞬だが眉が吊り上がるかのような顔つきをしていた。

「光友を追い払って、三菱電機が利権のおこぼれをそのまま拾って我が物にする… けっ、利権談合共産主義者の手練手管そのままだな見損なつたぜ、武田信伴…」

「何を笑止なことを… 利権なんて興味はない。違法行為に及ぶことなく、我が社が正当に評価されるときだというだけでしかない。放つておいても光友なんぞに負けているとは思っていないが、時が少々早かつたというだけさ」

頬を緩めた武田：やはり、横谷とは関係が仮にあるにせよ自ら吐露するに等しいような言動は取らないということか。

「漁野市長・横谷佳彦は、あんたが思っているほど味方とは扱っていないぞ…」

押し殺すように、本音に近い感じで清水は武田に言つてのける… またしても、武田は顔の表情を強張らせた。

「市場の流れを見て自社の機を読み取るには敏だが、人の心を読み取るのは鈍いようだな」

横谷のことを事前に調べ上げたのだろうか… 清水に対し、武田は明らかに心中では狼狽していた。隠そうと必死だが、もはや清水には隠しきれないようだ。

「プラント市場もるとも、工業を滅ぼす気であるんだよ… 横谷は。あんた、従業員を何万人。いや、何十万人と路頭に迷わせて、横谷にいいようにボロ雑巾みてえな働かせ方させられて、その現場を黙って見てられるのかよ！」

もはや清水の義憤である… 保守を自認しながら、自分の身内や仲間たちを容易に守りきれないヤツらに何が保守だと。今あるものの何を保守しようというのかと問いながら仕事に取り組んでいただけ

だが、それが一気に武田を前に出たということだ。

「わかった。以後のことは社内で検討しておく……」

そう言つて、窓越しに品川駅を筆頭とした社外の景色を眺める武田。横谷に対する恐怖と葛藤しているのだ。はめられた。名家・武田の血統を危うく汚すところだった。

三菱電機グループをはじめ、旧・三菱財閥系の企業の統一シンボルにして武田一門の家紋が刻まれた旗が、風にあおられてハタハタと音を立てる。その音の余韻に浸ることなく、ビルを急ぎ足で出たのはいうまでもなく清水だ。

横谷と武田に果たして繋がりがあつたかは最後までわからなかつた。いや、つかめなかつた。これも結局、うやむやなまま真相は闇に葬られてしまう。清水は思わず、帰り道で目立つように舌打ちをした。

再び、舞台は漁野市役所本庁。議場では、横谷の発言に対して怒号が飛び交っていた。

「静かにしたまえ！」

横谷が一喝すると、すぐさま怒号も野次も全てが止んだ。その姿に違和感を感じたのは、他ならぬ桑島である。

(…おかしい。普通なら、ありえないよな)

まるで、横谷ともう繋がっている議員がいるかのような異様な空気を感ぜずにはいられなかつた。その空気は、邦憲にも容易に読み取れていた。

「…僕の経済倫理に則れば、公的介入もなくなれば税というものも消え去ります。無税国家ならぬ、漁野市は世界に先駆けて無税自治体にもなりますよ。そんなめでたい話はないでしょう？…ただ、金がほしいだけでしょう？…だったら金をやります。家もほしいでしょう？…だったら家もやります。働いた文だけ生活が潤う。全ての欲を殺すのではなく、満たすのが僕の政策です。世界一の自治体にする、僕は言ったじゃないですか？」



「議長！」

「…桑島庸介君」

そう呼ばれて、桑島は壇上に向かう。不敵な笑みを浮かべて市長席に戻る横谷が、いかにも憎らしい。

「今、究明すべきことは新莊川流域環境総合センターの新しい環境プラントの建設を巡る談合疑惑に決着をつけることです。無税自治体とかなにより、無税になるということは環境への配慮になるのでしょうか？」

ついに本丸に切り込んだ…いよいよ、談合疑惑は佳境を迎える。解決するか、闇に葬られるか。このあと、壇上では2人の質疑同士の応酬があった。

「…ふはははは、相変わらず君の無知には笑いそうになります。自然の摂理に習えば、あんな環境プラントなどという発想は笑止千万のものになります。工業もろとも、害を産むだけで過去の遺物になるだけです。企業の私利私欲は消え去るのみですよ…」

「…すると何か？光友鉄鋼も光友電工も、しいては三菱電機もということでしょうか？」

「そんなものに境目があるはずもないでしょう？…光友とか三菱とか、どちらもということですよ」

「そうやって、逃げてんじゃねえかよ！…そうだよな、専門じゃねえもんね」

「何を負け惜しみを…全ては裁判所が明らかにしてくれる」

そのとき、横谷は不敵な笑みを浮かべていた。まるで、社会制裁という形で自分には向かう者を合法的に始末しようという不気味なオーラを否定していないように。

（三菱の名を挙げてもびくともしねえ…武田信伴とつながりがあるんじゃねえのか？）

情報屋の話では、状況証拠のみの推理でしかないが横谷と武田のつながりは否定しきれない様子だった…2人には、光友電工を追い遣る目的があるからだ。そこに切り込んでもびくともしない…やは

り、物証をつかませないようだ。どこまでいっても千日手になる…  
桑島は、底知れぬ恐怖を感じた。

（やっぱりこいつはダメだ…このままじゃ、漁野市は破綻しちゃう  
！）

わかつていても、横谷の経済倫理はもはや月山富田「とだ」城に  
攻め込むかのような状態といつてよいだろう。うやむやなまま、結  
局は疑惑の核心に踏み込めないまま、この話はこのち永遠の闇に  
葬られることになっていく。

議場からの帰り道、桑島は恐怖と敗北感に苛まれていた…とても、  
その姿をまともに見ていられる者はいなかった。肩を落としていた  
ところ、深江が寄ってくる。

「仕方ありません。あれではもう…」

自らの不徳もあつただろう、深江も責任を痛感していた。直前に、  
横谷に勝てるのとたきつけたのだからなおさらだ。人知れず、桑島は  
大いに泣いていた。邦憲も、怒りの真理を剥き出しにしていた…傍  
らに、例の女がいるにも関わらず。

「拷問されたんですね？」

「…うるさい！」

「だから言つたはずです。生半可な気持ちで…」

「うぁーーーーー！黙れ黙れ黙れ黙れ黙れーーーーっ！」

頭を抱えて邦憲は落ち込んでしまった…それを傍らで、じっと見  
ることしかできない女がそこにいた。

もはや邦憲は持ち味でもある冷静でクールな性格とは、程遠いも  
のになっていた。城門を破れる…そう思っていたが、結果は違う。  
むしろ、城門さえ破れない状態だった。果敢に攻め込むも、惜しい  
ところで敗れたというものでもない…むしろ、横谷にペースをつか  
まされたままの大惨敗といえる内容だった。

その日の夜、再び桑島たちは集結していた。

「…残念な結果です」

「残念なんてものじゃない。惨敗だよ…大惨敗だ」

毛利に対し、照実が口を開く。仔細を邦憲から聞いていた照実だ…毛利よりも焦燥感に満ちているのは言うまでもない。

「まるで月山富田城ですね…例えるなら」

毛利は思わず口を開いた。深江は意味がわからず、ふと毛利に質問を投げかえす。

「…月山富田城？」

毛利はうなづく。それでも、深江には意味が通じていない。

「難攻不落、ってことだよ」

「不落…それって、勝てないってことじゃないですか！」

意味が違う。それは、確かに正面後方で力攻めをしても落とせないといっているだけのことだ。

「絶対に勝てないというわけではないんですね？」

深江なりに懸命なのかもしれないが、焦燥しきっている桑島や邦憲にはなんら効果のない言葉だった。

（なぜだ…）

ずっと、この言葉ばかり頭の中で堂々巡りを繰り返していた。

（負けたのか…）

ずっと勝ちつづけてきた人生でもないが、横谷が予想以上の大敵だということでもある。

「…その記者さんの言うとおりだぜ」

扉から、聞き覚えのある声が響いた…そこには、逢沢大介がいた。「また知らないヤツが…」

焦燥しきっている邦憲には、追い討ちともいうべきか。しかし逢沢はさつと手を出す。

「俺を疑うなんて、ちょっとは人ができているみたいだな」

「…からかっているのか？」

「そうじゃない。桑島の話は、前から知っているんだ」

「…ついさっきのことだろ？」

「あ、悪いな。でも、手を貸せるところは貸すからさ…俺も、横谷

をこのまま放っておくのが危険だと思っている1人なんだ」

さすがに欧州や米国にかぶれて政治倫理を取り締まるということもあつてか、公安の正義に目覚めているだけ…ただ、それだけのこととしか5人には考えられなかった。

「ちよつとは戦法を考えろよ。あの手のは、ちよつと考えを捻ればいちころだろ？」

「…貴方には、KYという言葉を私から献上します」

逢沢は、猪突猛進なところに空気を読めないというのがネックになつており、それが刑事部など他の部署や所轄署を短期間で転々としている理由でもある。毛利にズバツと言ひ渡され、少し逢沢はたじろいだ。

「前総理の中泉さんや、瀧本幹事長と変わりませんね」

前首相・中泉純三や、現・民自党幹事長にして中泉内閣では外相を歴任した瀧本太郎の名がすぐ挙がるとは…ふと、毛利の顔を見て逢沢は即答した。

「噂は聞いているぜ…毛利俊就、だな？本拠は広島のはずだろ、お前さん。時を越え、“東の北条”と“西の毛利”の謀將たちが手を結ぶほどの大敵つてことなのか？」

「当たり前だろ。もうそれは、この2人が実証済みだ…」

「すぐさま、照実が横槍を入れる。むくれた顔で深江がすぐさま反論する。」

「2人じゃありません。3人です！」

「悪い、あんた若いから数えてなかった…」

「やはり貴方には、KYという言葉を私から献上します」

「いい加減にしろ。ぐだぐだとくだらん話ばかりに時間を割いている余裕はない」

邦憲はすっかり、一連のやり取りのうちに気力を復活させたようだ。一方、桑島だけは焦燥感から脱出できていない…その中でも、横谷に対する次回の策を練って戦いを挑まないとジリ貧になるだけだ。

「さて、今回の反省点だが…」

6人に増えた部屋の中で、まず深江から議場での仔細が報告される。…もはや、いち政治記者というよりは情報屋に近い。

「というわけだ。ありとあらゆる回答を想定して、万全の体制で挑んだが結局はこうなった」

「うーん…それでは、城門すら1つも破ることもできずに敗走したと」

「お前の想像どおりと言っても、俺は否定しない」

実際にそのとおりだから、なにも反論できない。門は全く破られていない…横谷の態度を思い出すだけでも、怒りの表情が邦憲には隠しきれなかった。

「ただそのとき、横谷さんがゲツペルスの名を…」

「だから、ゲゼルだと言っただろ？」

ゲゼルという名が邦憲から出た瞬間、一挙に照実・毛利・逢沢の3人が顔をしかめた。

「やはり横谷は…」

「どうやら毛利は気づいたらしい。照実、お前もつすつすは感じていただろ？」

「…あれの改造版、つてえとこだな。邦憲」

「改造版？」

「ああ。ゲゼルの経済倫理を表している最も有名な著書に『自然的経済秩序』つてのがあるんだけどな…」

その著書の中には、横谷が主張している地域通貨のことまでは容認していないということが主張されている。

「日本では、なぜか地域通貨の根拠としてマニアどもの注目を浴びているがな」

逢沢が言葉を続ける。なぜ、ゲゼルのことをここまで詳しく知っているのか？…邦憲には、政治倫理に首を突っ込む公安のヤツには思えないオーラを逢沢からすでに感じ取っていた。

「実際はそんなところですよ。北条さんの言っとおりですね」

毛利が思わず唸る。さすがに東の謀将、といったところか。

「ゲゼルもそうだが…」

言いかけていた逢沢。思わず、沈黙を再び護っている。

「だが？」

「言わせようとしているだろ？…機密だからな。トップシークレッ  
ト」

「わざわざ英語で言うな。横谷についてだろ？…早く言えよ」

「ま、幸いにも俺以外のヤツは横谷を恐れてないようだ。でも、この横谷こそが恐ろしいヤツなんだよ…お前も知らない、横谷のバツクの実態だよ」

逢沢の口から出たのは、聞いたこともないようないかにも新宗教と見られかねない名の団体名だった。

「ヤツは宗教家なのかよ…」

「ふん。新興宗教のトップなんてのは、俺からしたら宗教家じゃないね。ただの欲まみれのクソツタレだ」

「宗教…」

思わず、桑島はうつむきながらもポツリと言葉を漏らした。

「全く聞く耳もたねえヤロウだったよ…」

「当たり前だ。ああいうのは、変な方向に考えが凝り固まっている」

「外部からの情報から隔絶されている、とあります」

「そこでさ、お前たち…カルトって言葉、聞いたことあるだろ？…俺が今から定義と、見分けるための成立要件を説明しておく。参考にしてくれ…横谷にも必ず通じる話だ」

逢沢による即興の講義が始まった。カルトとは、現代では俗に反社会的にであったり、長年かけて築いてきた我らが郷・国を一挙に破壊してしまうような倫理観を持ち合わせる宗教集団のことを指すという。しかし逢沢は、そのみならず政党にも派生しかねない現状があると続けた。カルトを見分けるためには、条件が多く揃っていないといけない…たった1つでは、完全にそれとはいえない。

横谷は、和平神教という宗教団体の中央幹部だという…それを知

らないでいたため、大惨敗もやむをえないとフォローする。和平神教内でも、横谷に対して反感を抱いていた一派を次々と肅清してクーデターも同然に教団内の権勢を全て掌握しており、平和を司る天界のさらに上に存在する宙天界の神々の意思を唯一聞き取れる選ばれし者として、自らが存在していると説き、数々の摩訶不思議な体験ともどもで信者数を激増させているという。逢沢の講義を受けたあと、5人は言いようのない沈黙に身を置いていた。そして、逢沢は最後にこう締めくくった。

「カルトと呼ばれるタイプの宗教団体には、信仰も結社も何もかも自由なんて与えたらいけない。こういうヤツらを滅ぼすのは、合法でもあり合憲なんだ…例外として世界で認められている。そうでない、郷や国そのものが崩されかねない…」

「今の漁野が、まさにそうなってきたいるんだな…」

桑島は、ふと口を漏らした。最も落ち込みがひどかった…しかし、落ち込んでばかりいられないと逢沢は説く。さらに、照実が続く。

「横谷は、やはり俺たち北条家への復讐も…」

「北条を超えるものが必要だ、ということでもあるだろうな…俺たち6人は、相当な覚悟で挑まないといけない。公権力が俺以外、全く宛にならないことが不安要素の1つだ」

「あんななんか、はじめから宛にしちやいねえよ…」

そう言って、桑島はのっそりと席を立って部屋を出た…もう、時間は深夜になっていた。

「まさに、月山富田城の攻防戦のように…長期戦も辞さず、ですね」  
夜更けの街、ぼつんと薄暗い明かりがついている部屋で5人は各々の決意を固めていた。

その日の朝…都内のある大学病院。豪勢な個室病棟に1人の女が入ってきた…中浜貴子だ。

「…貴子、か？」

「失礼します。党首、緊急に面会を申し出られた方が…」

「面会だと？…こんな自分に、いったい誰が？…いぶしがっている一人の男、名は長谷川佑次。黎明党党首…とはいえ、権限はもはや横谷によって篡奪されており、もはや傀儡である。」

「あんたが、長谷川佑次だな？」

「…誰だ？俺にいつたい、何の用だ？」

現れたのは清水…長谷川の目は、とても病気で身も心も痩せ細つたようには見えない。黎明党の謎に、清水は辿り着きたかつた…そして、解剖したかつた。それこそが、深江への手助けになると…そして、自らの責任でもあると。



## 新富田城（前書き）

前編終幕：“桑島・北条・毛利”三連合軍、狼煙の時。真に我らが郷・国をよみがえらせるため、いざ泥沼の決戦へ…

## 新富田城

(これが、政党の党首と言える姿なのか…?)

清水耕輔は、ベットに横たわる長谷川佑次を見て思わず絶句した。もはや、末期癌にでも冒されて余命いくばくもないというふうにか見えないほど、長谷川佑次の体は病人の典型のように痩せ細っていた。鼻のチューブが実に痛々しい。

「どうした…この姿が怖いのか？」

横たわる長谷川の姿に、清水はただただ沈黙するほかなかった。

「いつから、そうなったんだ？」

重い口を、清水はようやく開ける。しかし、その言葉は何か物がつかえたかのような細さだった。

「…1年も前の話だ。よくもっているなど、医者から呆れられるほどだ」

若いうちに末期癌を患うと、進行はとても速い…長谷川ぐらいの年齢だと、いつ死に直面してもよいような状況になってもおかしくはないのだという。

「横谷に実権を奪われてからすぐ、か…」

「ふっ、そういうことだな…」

長谷川はただ頷くほかなかった。

「まるで、戦国時代だと俺は毒で殺されているような人間だからといわんばかりだな」

視線を鋭く察した長谷川…清水は、ただひるむほかない。

(なんて目つきしてやがる…死人目のヤロウの目じゃねえ!)

長谷川の眼光は、まだ眩しく光っていた。少なくとも清水にはそう見える。

「何のために、俺は黎明党を発起したのか…」

うわごとのように、突然言葉を発する長谷川。

「あのような愚か者を信じた俺が、所詮は馬鹿だったということか

…」

横谷のことだろう…愚か者、とはやはり何かがあるに違いない。清水はそう直感した。

「あいつは何を言われようとも折れない…いや、無敵の男といったところか」

「無敵なんて存在しねえよ。神様じゃあるまいし…」

「あいつは自身を神だと思っている。いや、正確には神の代弁者…だな」

「何を言っただ？…神の言葉がどうか、頭がおかしいんじゃないのか？」

横谷に宗教家の側面があったとは…ただの政治活動家ではないのは、数々の取材や深江友璃子から得る情報でおおよそ感じていた。さらに長谷川が言葉を続ける。

「ただ、立憲明政党…それも、中本行弘と交渉して同盟を結ぶとはな。世も末だ…」

黎明党と立憲明政党は、公式サイトを見る限りには政治的にも経済的にも互いに逆方向を向いているとしか言えない。いや、黎明党はインターネット上では少なくとも良い評判など何も聞こえない。むしろ、立憲明政党をも凌駕する怪電波「デムパ」を放っていることさえいわれているほどだ。

「お前さんがどう思っているか知らんが、少なくとも中本などという男は信用に全く値しない」

…言い過ぎではないのか？中本を取材したことのある清水には、さすがに長谷川のこの発言には顔を曇らせていた。

「認めたくないだろうが、中本に確固たる倫理なんてものを求めるほうが笑止千万…」

「中本さんに逢ったことがないから、そんな暴言を恥も外聞もなく吐けるんだ」

「お前さんは、新人記者のような純朴さだな。だから、あんな下衆な中本に騙されるんだよ…あいつは、政治家には向かないね。詐欺

師だ…それも、B級以下のC級のな」

これはいわば、よほどの大馬鹿か精神を患ってでもいなければ騙されることはありえない、という長谷川なりの皮肉の言葉である。しかし、清水はそんな長谷川の発言の真意など知る由もなく、ますます目つきを強張らせて半ば長谷川を今すぐにでも殺したいほど憎いという表情を見せていた。

「じゃあ、なぜ立憲明政党と同盟が組めたんだ？」

「知ったことじゃない。もうその頃には、俺は党首としては傀儡も同然だ…何も知らない。ただ、俺が党首ならそんなシナリオは微塵も考えてはいない。そもそも、中本は自分の身を守るためなら簡単に他人を裏切つて、培った倫理観をもいとも簡単になぐり捨てる卑怯者だ。そんなヤツが政治家だと？…ふん、笑止千万。そんなヤツに日本を変える力なんてない」

もはや押し問答…いや、やはり長谷川は只者ではないのか。すでに気圧されているのか、清水はじつと長谷川を見るほかなかった。ただ、中本行弘に関する発言はかつて自らも1対1で取材した相手であるがゆえ、鼻屑目に見ている心理が働いているのだろう…とても長谷川の発言を受け入れられるような状態ではない。

「だが、これだけは言っておこう…横谷をもつて黎明党を語るな。

あれが我々の姿だとすれば、甚だ遺憾だ」

「現実にはそうなつちやいねえよ。あんたもまとめて、カルト宗教集団の一味つてことだ」

「それは民自党も自平連も、同じことではないのか？…その楔のために結成したようなものだ。だれかが何とかしないと、横谷による売国と内部破壊の道は永遠に続く…そして、ぺんぺん草さえ生えない地獄絵図が待っていることだろう」

長谷川の目つきは終始厳しかった…清水は、この男がいつたい何を望んでいるのか。まるで横谷を倒してほしいと懇願しているのか、それとも…いまだに真意をつかめないまま、いたずらに時間は過ぎ去っていく。

一方、同じ東京都内の別の場所では全国47人の都道府県知事が一挙に集結して会合をもつ“全国知事会”が催されていた。もちろん、高知県知事も出席するために東京にいた。休憩室の傍ら、県知事は1人くつろいでいた。

「すみません、ちょっと時間…宜しいですか？」

馬鹿みたく丁寧にあいさつし、ひょうきんな顔つきを隠していない1人の男が県知事に近付いてきた。巷で有名な宮崎県知事である。「これはこれは…」

「就任のあいさつにと思ひまして…」

丁寧なところは、初々しい姿と言えよう…宮崎・高知の両県知事が1対1で相對する。かたや新県政の担い手として、かたや今期限りで県政を退くと宣言した男。差は歴然としていた…宮崎県知事のその輝かしき目つきは、かつての自分のように映って県知事には他人事でいらなかった。

「さ、どうぞ」

「いやいやいや、それでは…」

宮崎県知事の手招きに乗るように、県知事はソファ―に腰掛ける。ごたいそう丁寧な、茶まで用意されていた…宮崎県知事がソファ―に腰掛けると、県知事は思わず会釈で返礼した。

「しかし、無駄に会議つてのは長いものなんですなえ〜！」

宮崎県知事にとつては、全国知事会は初出席になる…毎度のことだと言わんばかりに、県知事はさらつと流す。

「とはいえ、そちらは変な市長に悩まされているとか？」

そちらとは、当然ながら高知県のことなので横谷のことだ…あつという間に、西土佐地方を経て宮崎まで噂が流れついたのでだろうか…いや、今はインターネットも一般に広まっているので別に不思議ではないのだが、県知事にとつて横谷のことはこの場では蒸し返されたくないタブーであったのは言うまでもない。

「…何を奇遇な。そんなことはないよ」

必死に平静を繕うも、宮崎県知事はさらに言葉を続ける。

「…そうやって、逃げ通してどげんかなるとでも？」

急に表情が険しくなる…その目つきは、誰よりも真剣だった。

「あんなヤツは、宮崎では絶対に台頭させませんよ。私の目の黒い  
うちはね…」

急に野太く、かつ力強く宮崎県知事は言葉を続けた。県知事は次第に、そんな宮崎県知事の姿に気圧され始めてきた。

「貴方は、無事に平穩に県政が終わればと思つてこのまま逃げ通す  
気ではありませんか？」

宮崎県知事のこの言葉は正確だった…もはや任期は間近で切れる。

それまではもちこたえたい…一瞬の気の緩みだ。

「そんな気の緩みを、ヤツは読んでいたかもしれませぬ。私がヤ  
ツの立場でも、漁野市は恰好の標的にしている…」

もはやマシンガントークという以前に、宮崎県知事が豪速球を次  
々と繰り出すかのような話の進み具合だ。

「失礼…」

そう言つて、すつくと県知事はソファーから立ちあがつてその場  
を去ろうとする。そのとき、宮崎県知事もすつと立つて県知事の後  
ろ姿に向かつてこう言い放つ。

「今の漁野市長のようなヤツを野放しにしたら、貴方の今までの輝  
かしき県政の実績に最後の最後で泥をつけられるだけです！…それ  
を懸命に阻止したいのか、彼らの愛郷心かは知らないが、漁野市議  
や国会議員の中にはヤツに敢然と抗う男たちがいる！…彼らを見殺  
しにする気ですか！…宮崎をどけんかせんにやらん、なんとかせ  
んにやらん、生まれ変わらんにやらん！…私は県議会の議場で  
所信表明演説でこう言いました！…そう言わねばならないのは高知  
も同じことではありませんか！…放つておけば、あの市は滅亡しま  
すよ！そうなつてからでは手遅れなんですよ！」

宮崎県知事の絶叫は、休憩室の外にまで響いていた…その後、メ  
ディアが2人に向かつていったのは言うまでもない。

同じく、ここは京都：現在は東京・日本橋に総本部が移ったものの、かつて総本部が置かれていた政党があった。そう、立憲明政党だ：中本のおかげで完全に株を貶められ、風前の灯かと言われるほど転落している立憲明政党である。

「中本のヤロウ、ふざけてんじゃねえぞ…」

ここは、中本派とは別の派閥の会合らしい：やや強面と言えよう面々も一部にいる。

「静かにしろ」

口を漏らした1人の男を、強烈な目線ですごむ男がいた：名は赤井直稔くあかい・なおとし、兵庫県ひかみ市の出身。地元の公立高校から、関西の名門私立大学を経ている。新右翼系の学生運動にも従事していたため、関西ではカリスマ的な存在でもあった。学生時代を終えてからも仕事の暇を見つけては活動を続けていた：その結果として、有力政党の牙城である日本の政治の現状に憤りを覚え、立憲明政党の結成に至ったのだ。赤井はその初代党首：結成以来、15年もの長きにわたって君臨している。

「しかし、党首：もう黙ってられませんか！」

「止めたつて無駄つすよ！」

15年もの長期体制とは裏腹に、年を追うごとに赤井の持つ権限は縮小され、次第に党首の存在は傀儡も同然になり下がっていった。まるで鎌倉幕府での北条高時や北条（赤橋）守時、ほかにも室町幕府の足利將軍家の末期と似たようなものだ。“中本派”に対して、言うなればこの派閥は確かに“赤井派”だろう：そして、赤井派は立憲明政党の中では他を圧倒する最大の人数を誇る勢力であり、党内ではずっと本流であった。

「筑紫派も許せねえけどよ、あいつらは…」

「ああ。誰が勝手に高知に行けつて指示したんだよ！」

勢い余つて、1人の男が柱を蹴る。巷の情報では、赤井派と中本派の仲は比較的良好であったはず：まあ、筑紫派とは九州での新た

な派閥結成の動きでもあり、そちらは何年も前からの話なので赤井派とはそのころから対立関係にある。まして、微妙な点しかずれておらず大枠ではほぼ同一の倫理観の持ち主同士であるため、その対立は年を追うごとに深刻化していた。

「こうなってしまったことは、後の祭りだ」

「だから今こそ…このままでは、党そのものが滅亡してしまいますよ！」

「必死になって俺たちの人脈で支持を広げてきたのに…」

中には涙ぐむ男たちもいた…中本が憎い。そういう心理に至るのも、当然のことだ…あれ以後、急速に支持層は変わってしまったている。古参の支持層は総逃げにも等しい状態になってしまっている。

「あんな同盟、俺たちは認めねえ！」

「そうだ！」

「中本を追い出せ！」

「あいつら、声明をなんだと思つてやがる！」

「党首、今こそ絶好の機会です！」

しかし、赤井は全く動こうとしない。公式声明を何度も踏みにじつてきた中本たちの行動に対して、もはや赤井派の面々の我慢は限界に達しているというのだ。

「いったん仲間として受け入れた者を、安直に処分することをお前は恥と思わんのか？…日本を売るなど言っている口や手で、お前は仲間を外に向かつて売り渡すと言っているのと同じなんだぞ！」

処分ありき、追放ありきではなく中本派との和解こそが党再生の道…党として結束はできる。変なところだけは“性善説”の持ち主、それが今の赤井だ。

「研修なんかでどうにかなるとでも思っているのですか！」

「何度でも言います！今のままではダメです。黎明党との同盟は、

一刻も早く破棄することが第一です！」

「あんなヤツらと同盟なんて、頭が狂っているとしか思えない！…選挙でのマイナスイメージは必至です！」



「そうだ！なんで俺たちがあんな極左と…」

「それに、なにが集団ストーカーだ。なにが電磁波攻撃だ…そんなヤツらばっか拾い上げてつたら、せつかくの支持基盤が崩れることぐらいわからないのかよ！」

「黎明党と絶縁し、中本派も1人残らず党から追放してやる！…あいつらの罪は大きい！」

もはや赤井の制止も無意味なほど、ブレーンをはじめとして赤井派の面々は血気が盛んだった。中には高知入りを目指す者らもいる…さらなるカオスの世界へと、漁野市を導くだけでしかないというのにその深慮さえ浮かばないほど、怒りが込みあがっている状態だった。そんな中、誰もいなくなった部屋では赤井が1人だけじっと座ったまま動かないでいた。自らが傀儡も同然に、党員らの暴走をもう止められないほどにまで権威を貶めてしまった…ここに来て初めて、赤井は自らの限界を悟った。

（もう、党首など務まらない…これが俺の限界なんだろうな）

赤井は党首として、もちろん参院選に参戦歴がある…中本と共同して立候補した時のほかにもう1回、それでも前回は中本より個人得票を獲れなかった。中本派の統制がとれなくなり、筑紫派との対立激化に拍車をかけた原因でもあるという。もはや立憲明政党は、中本派・赤井派・筑紫派と大きく3つの派閥に分かれたといつてよいだろう。赤井体制が長く続き、党首権限の傀儡化が進むにつれて赤井派と筑紫派の確執があったのだが、そこに全く異質の“利権談合共産主義者”の一味が加わって、結成当初の理念などもはやどこ吹く風の状態になってしまっていた。

場所はまた戻って、桑島の事務所…桑島のほか、北条照実と北条邦憲、毛利俊就、深江友璃子は当然集まっていた。

「おお、お疲れ〜」

そう言っに入ってきたのは、こないだの非常に小柄でギターを背負う女である。

「いったい何の真似だ？」

傍らにいた邦憲が、すかさず桑島に小声で話しかける。

「どうもこうもねえよ」

「こんな場に呼ぶべきヤツじゃないだろう？」

「心配するな。余計なことは言わせないから」

それでも、邦憲らしからぬ不機嫌な表情を消さないまま、邦憲は桑島から視線をそらした。何度も言うが、他の誰よりも“反・横谷市政”を掲げている桑島だからこそ、横谷の配下の者らが桑島を私刑も同然に監視しかねない。いや、独裁志向の横谷にとってそんなことは朝飯前。まして、邦憲のほか照実と分家とはいえ北条家の血統を引く者らが桑島の味方についているとすれば、なおさらのことだ。

そして、今回はそれだけではない。桑島のほうから反撃として、いよいよ漁野市の累積赤字の圧縮と解消に向けて、かつ赤字財政の慢性化を食い止める方策を練るための集まりでもある。面々が集結し終えたようだ。ついに会合が始まる。カーテンも鍵も、すべてかけられて厳重警戒する中で始まった。どこに横谷の放ったスパイが潜んでいるか。邦憲が不安に思ったのは、横谷方の工作員がすでに情報を察知して、情報屋を籠略している可能性もあるからだ。

「でも、横谷にその責任がほとんどないのは確かだな」

「そうですね。その点で横谷に責任をぶつけても、簡単にかわされるだけです」

横谷市政どころか、岡村前市政。いや、漁野市の50年もの市史をたどらなければならぬほど途方なものだろう。過去の詮索は日本人の美德に反する。むしろ、結果として生まれた巨額の累積赤字に潜むものがどこなのかを探り、的確に突いて解決することが至上命題だ。

「光友鉄鋼に外国人労働者が増えたことには？」

素朴にギター持ちの女が質問をぶつける。光友鉄鋼は、中国やASEAN諸国などから優秀な技術者を来日させ、プラントの現場た

る高知工場などで勤務させている。

「…お前はなにをいきなり、中本みたいなことを言い出すんだ？」

「いや、雇用にも直結するじゃない？」

「…日本人の雇用を奪っている？」

「もつともなようで、全く的外れですね」

「彼らをすべて追放したところで、日本人にだけ雇用状況が改善するなんてありえません」

「雇用なにより、ほら…漁野市って、物価が東京とか大阪より低いじゃない。だからかな、失職手当とか生活保護とか…」

「一般に、特定の外国人にだけ有利な条件で生活保護がもらえるなどというデマがはやってるようですね」

「聞いたけど、漁野市じゃ絶対にありえねえってさ」

1つの意見から、たとえ忌避に値する内容でも討議に発展していく…確かに雇用問題からすれば笑止千万のことでも、他の目線に向ければ問題が徐々に垣間見えることもあるからだ。照実や邦憲、そして毛利…桑島も交じって、こういうことが勉強になると深江もメモを逐一とる。

「前に生活保護の全廃を漁野市で先行するとか言ってたヤツがいたな…」

「なにそれ。ありえない…」

「ああ、もちろん落ちちまったけどな」

「当然です」

「救われる者さえ救わず、飢饉も同然に餓死者を出すことが是と言える時代では、ますますなくなっているのにな」

「でも、議員だとか役所でも課長だ部長だ局長だとか、そのあたりが絡んでくるとややこしいんだよな…」

「生活保護だけじゃねえよ。もつと深刻なのがある」

桑島がさらに釘をさす。すぐさま、反応したのは毛利だ。

「…国民健康保険ですね？」

「大当たり。あっちのほうがもつと深刻だぜ…企業で勤める会社員

まで、裏抜けでまわして想定外の事態だからもう…」

「ちよつと待て。どういうことだよそれ！」

「知らないんですか？…中小企業で政府管掌だとか、それが当たり前だとも？」

照実はそれを知らなかったようだ。労働法に違反していると指摘されても、何らおかしくないはずだ。

「北条さん。個人事業主だとか、雇用形態を巧みに騙して採用する中小・零細企業も少なくありません」

「ふつ、毛利の口からそんな証言が出るとは意外だ。民自党の連中は、総じて労働者を使い捨ててるのかと思ったがな」

「労働者と使役者、果たしてどちらが多いと思っっているのですか？…多数派を敵にまわすほど、私は阿呆ではありません」

「国保の話に戻ってくれ。で、あとは地域間格差が激しくなってるんだよな？」

「漁野市の負担は四国でも指折りだよ…年間だと軽く7万、いや。8万近くだったかなあ？」

「年金を踏まえたら、お年寄りには厳しすぎますね…」

「厳しいなんてものじゃない。放っておけば確実に破綻する…なにせ、利用する主力は高齢者。医療費を最も要する…齢を重ねることに体や心に限界をきたしてくるから、その負担も計り知れない。誰もそのメスを入れようとしながな…高齢化時代の真つただ中なのによ」

邦憲が厳しい目を毛利に向けながら、暗に国会での民自党の取り組みを批判しているかのようによに答えた。

「黎明党は、年金もろとも国保も廃止するとか…公約にそう書いてやがったな」

「立憲明政党も承認とまではいかねえが、中本派の連中は全く同じことを言っていたぜ」

「それはひどい。平均寿命を人為的に下げよう仕向けるなど、北条家の慈愛とは逆を行く愚かな方策ですね」

「おじいちゃんやおばあちゃんは、働けなくなったり病気にかかったら死ねって?…冗談じゃないよ!」

女たち2人、深江とギター持ちの女が憤慨する。義憤とはいいえ  
ている。そこで、さらに邦憲が毛利を挑発する。

「民自党も、民間による福祉とか言って経費を削減していった内閣  
があつたくせに何を言うか」

「中泉前総理のときですね。新自由主義そのものの理念は、私は間  
違っているとは思えません」

「間違っているね。中泉のもとに利権を集中させるための手段だ:  
社会主義・共産主義の枠内から脱け出していない」

「オイ邦憲、落ちつけよ!」

「黙っている照実。お前がやらなきゃいけないことを、俺が代わり  
にやっているだけだ:民自党も、中泉内閣のみならず福沢内閣でも  
何も本質は変わっちゃいない。“改革”の呪縛から逃れられなくな  
っているんだよ:医療費を抑える?そんなのは売国の徒だ:医療は  
勤労の対価だよ」

中泉内閣:当時の中泉純三首相は、昭和38(1963)年の衆  
院総選挙で民自党が勝利して政権を掌握した日から数えて丸45年  
の歴史の中でも無類の長期政権。平成時代では最長にあたる、あり  
とあらゆるインパクトをふりまきつつ進んでいった内閣だ。

「毛利さんを糾弾してえただけだろ?…話を戻せよ、国保に」

桑島が、どすの利いた声で邦憲をにらみながら言い放つ。国保の  
話から途切れて、邦憲からの毛利への口撃が始まるうとしていたか  
らだ。

「分母を減らすって選択肢もあるんだよね?」

「公的介入で人口を減らす、ってことだろ?…人道に外れてる選択  
肢だけだね」

「立憲明政党の中には、言いかねないのも何人もいますけどね」

「民自党のほうが、数としては多いのだがな…」

日本の人口がそもそも多すぎるから、人為的に人口減少を引き起

こすべきだという、冗談とも取られかねない政策を採用しかねないところもある。漁野市の場合、5・7万人の人口で高知県内では第2位とはいえ、その人口が適正かを討議対象にする連中も本当にいる。

「みんな、とりあえずこのビデオを見てほしいんだけど」

ギター持ちの女がそう言って、miniDVテープを片手にビデオカメラをテレビにつないで、そのテープを差し込んで再生させた。そのテープの中身は、桑島はもちろんのこと、部屋の中にいた全員が背筋を凍らせたり、または怒りに震えるものも少なくなかった。

「完全に、彼らは支持層を開拓する場所を間違えましたね」

さり気に毛利が答える。さも知っているかのように聞こえて、邦憲は一瞬ながら毛利を見た。

「そうっすね。なんだよ、電磁波攻撃とかさ…」

「本当なら、俺たちもとつくに被害が出てるはずだぜ」

桑島、そして照実も毛利に相槌を打つ。

「言うこと言うこと、政治家どころか人間失格っすよ！」

「完全に、教育の失敗作ですね。その見本市と化してしまった」

とある宗教団体から集団でストーキング行為をされており、またその一環で毎日のように電磁波を照射されているのだという。そんな主張を流す者らが、中本や巽の周囲を取り囲んでいた。そして、彼らの受けた被害の全容究明に立憲明政党は次回選挙の公約として公費を大量につき込んででも解決を図るといふものだ。そして、外国人の排斥も同時に果たして雇用環境を大幅に改善できるといふ…これは先ほど、照実や毛利らに一蹴されたことなのでしれつと流すほかなかった。それ以外、経済・内政に踏み込んだ具体的政策内容は何もなかった。

「湯水のごとく、金がジャブジャブ湧くもんだと思ってねえか？」

「資金源を深く掘り下げたいよね。たぶん、すごいのが出ると思う…警察も黙っていないかもね」

逢沢あたりの仕事だとして、邦憲は言葉を続けようとする…する

と、インターホンが鳴る。いったい、こんな夜遅くに誰が？…いぶしがる邦憲は、ドア越しに小さな穴を覗く。すると、邦憲の目線の前に現れたのは見覚えのあるロリータファッションの女が手を組んで立っていたのだった。

「あなたがたの幸せと健康、そして…勝利をお祈りさせてください。お願いします…」

「…仕方がない。入れよ」

そういつて、女を部屋に入れた…その渋々な顔つきは、ありありと皆に分かるものだった。実に邦憲らしからぬ態度だ。

女は、桑島たちを横一列に並べ、1人ずつに自らの右手を桑島たちの額にかざしていく。いったい何の真似だ？…神秘の力が宿り、何者にも負けぬものをもたらすのだという。横谷を打ち破ってほしい、ということか？

「私は、横谷に拷問を受けていました。あらゆる意味で…」

手かざしは、横谷の教義には含まれていない。ゆえに、横谷から迫害された…そう考えるのが筋だろう。漁野市の財政赤字の根もとを突き、かつ抜本的な立て直し策を提示して実現に至る。同時に横谷を追い払わねばならない…桑島たちの果てなき戦いは、まだ序章に過ぎないのだ。

その後も部屋に戻り、彼らは夜通し、今後の作戦を練っていくのだった。全ては、漁野市を再生させるために…そして、横谷の矛盾を撃破するために。

「向こうに先手を打たれる前に、こちらも動かないといけない」

一方、横谷のアジト…取り巻きの女たちに漏らす。横谷も、桑島たちの反攻をすでに想定していた…あくまでも自分に逆らうのならば、徹底的に叩き潰す。その研がれた牙を、剥きだすときは近づいている。横谷の方針で、臨時議会の開催はもうなくなった。

時は流れ、翌年の3月。定例議会が迫る。横谷と桑島、2人が再び対決するときが来た。来年度予算も絡んだ大事な議会…そこでい

かに攻め、そして守るか。果てなき、月山富田城攻防戦にも似た長期戦の幕が本格的に開いた。数ある財政赤字の根もとに斬りこんでいく、途方もない戦でもある。



## 主要な登場人物（前書き）

前半（第1～11話）が終わり、次の第12話から後半に入ります。それに先立ちまして、後半の鍵を握ったり：また、主だって活躍していくだろう登場人物の中でも、特によく登場している（今後もしていく）人物の設定をここに載せておきます。

## 主要な登場人物

【桑島 庸介<クワジマ・ヨウスケ>】

大阪府大阪市出身。

地元の公立小・中・高を経て、国立高知大農学部に入学。4年後に卒業を果たし、漁野市役所に入庁して6年間の勤務を経て、農協銀行高知西支店の嘱託職員に転職。のち漁野市議選に無所属・新人として出馬、当選者18人中7位で初当選。現在、漁野市議の1期目であり、全18人の議員のうち最年少。党派はもちろん、会派にも所属していない一匹狼。

性格は、普段は温厚だが理不尽や非のないときに癪に障らせると大暴走しやすい。役所時代は、理由を付けて研修をさぼっていた。手間を嫌い、市議らの理不尽さに憤慨したことで漁野市は財政赤字対策を必要とするがために

「宿命的に立候補した」

と周囲には名言している。他の誰よりも、漁野市への愛情を感じるのは市役所入庁への恩返しというところか。

信念がとても強く、他どの漁野市議よりも先に横谷市政への反旗を宣言し、1人だけになろうとも横谷と徹底的に戦う決意を固めている。

作者本人の地方行政に対するスタンスを凝縮させている。

【横谷 佳彦<ヨコヤ・ヨシヒコ>】

東京都出身。

警視庁公安部がカルト団体の1つとしてマークしている謎の宗教団体・和平神教と密接な関わりをもつとされているとも、その隠れ蓑的な存在とも政治部門の位置付けともされている政党『黎明党』

政調会長。

東京都と神奈川・山梨両県の3都県境にひろがる高尾山系某地に独自の農場を開き、成功を収めているというのが実態は一切不明。突如として“出直し”漁野市長選に出馬、当選したことから漁野市は動乱へと巻き込まれる…至って冷静沈着だが、それは

「仮の姿に過ぎない」

とも言われており、本当の彼の素性を知る者は少ないという。

異常なまでに支配欲に冒され、独裁志向もまた強烈だという専らの噂で、政策も農本主義に原理的に冒されているなど、かなり苛烈でエキセントリックな様相を放っているにもかかわらず、なぜ彼は漁野市長にまで上り詰められたのか？

祖先は上野（こうずけ、今の群馬県全域）のいち国人だったが、北条氏の進出に伴って弾圧されている。

『ライアーゲーム』の横谷憲彦がモデルの最有力、という見解が趨勢だが…

【深江 友璃子<フカエ・ユリコ>】

徳島県海浜市出身。

新規参入したばかりの全国新聞『日本新聞』東京本社政治部所属の新米記者。大学で選考していたのは社会学だったため、社会部への転属を望んでいた矢先の異動で、開設されたばかりの高知支局にきたものの、彼女1人だけの支局と知ってさらに愕然とする。

高知支局への異動を前に漁野市の一連の騒動を知り、記者魂をさっそく見せて取材に奔走する中で桑島と出会う。彼女もまた、横谷新市政がもたらす騒動の目撃者として重要なキーパーソンとなる。至って普通だが、仕事への情熱は自らなりたかった職であるから並々ならぬものがある。だが、普段は相当抜けている部分が多い。

『ライアーゲーム』の神崎直がモデルではないか、という声が多い。苗字の由来は、大阪市東成区に実在する住居地名・小学校名および地下鉄千日前線『新深江』駅や同中央線『深江橋』駅。

【清水 耕輔<シミズ・コウスケ>】

神奈川県横浜市出身。

『日本新聞』共同発起人の1人にして、東京本社政治部の若きデスク。将来は社主の後継と目されている、社内期待のホープ。

真正保守の政治倫理を見せており、米国やロシアに対する論評は中国や韓国・北朝鮮の比ではない辛らつなものが多く、若き政治ジャーナリストとして国内や海外から注目を浴びている。

希望から外れて、いやいやながら配属されてきた深江の直属の上司にあたり、同時に理解者でもある。彼女の高知支局への異動話にも、社主に彼自ら進言したと噂されているが、その真意は未だもって不明である…

苗字の由来は、静岡市清水区とも言われているが、大阪市旭区に実在する住居地名・小学校名および地下鉄今里筋線『清水』駅（筆者は、前述の清水と区別をつけるために“摂津清水”と呼ぶことが多い）とする説も挙がっている。

【北条 照実<ホウジヨウ・テルザネ>】

東京都高尾郡高尾町出身。戸籍上は“北条照實（読みは同じ）”。戦国大名・小田原北条氏の分家である、甲斐と国境を接する武蔵・高尾山系を本拠地とした北条氏康の三男・氏照を開祖とする高尾北条家の御曹司。“高尾山の悲劇”で有名な八王子城址に近い地であり、戦死した北条方の慰霊のために建立された八王子神社の神主である父・照允に、母のほか妹・瑞子がいる。

桑島とは高知大の討論サークルにおける先輩と後輩の関係で、彼の理解者でもある。大学卒業後は、東京に戻ってサラリーマン生活をいそしんでいたが、国政の現状を憂うあまり民主自由党（民自党）の衆院選公募に応じ、選考に生き残って高知1区から出馬：当選を果たす。

現在は衆議院議員の1期目だが、現在は最大野党・自由主義平和連合（自平連）に転籍：過度の新自由主義による、彼なりの米国式社会の模倣へ向かうことへの反旗でもある。

作者本人の、国政に対する倫理観の凝縮されたキャラクターの1人である。“照”の字は、高尾北条家の開祖たる北条氏照に由来。高尾北条家では、男子には共通して“照”の字を用いることが義務づけられている設定。

【北条 邦憲<ホウジヨウ・クニノリ>】

石川県金沢市出身。

小田原北条氏の分家である、北武蔵の鉢形城（今の埼玉県寄居町）を本拠とした国人・藤田氏の名跡を継いだ北条氏康の四男・氏邦を開祖とする加賀北条家の御曹司。両親と姉がいる。金沢大附高を経て大阪法学部卒。司法試験は1度も受験していない。

照実よりも政治的なベクトルの向きは右に振り切れており、そもそも民自党にも自平連にも失望の色を隠していないと公言している。正確は冷静沈着で表情の変化も鈍いのだが、その言葉の節々で相手を怒らせること多数。

照実と毛利の2人を軸にした新党結成の構想を信じ（もちろん報道はされていない）、その新党の名をもって自らも石川1区から出馬するつもりでいるらしい。もし結成が間に合わなかったり頓挫した場合でも、すでに無所属での単騎出陣は両親をはじめとして周囲には伝達しているそうだ。

照実と同じく、作者本人の国政に対する倫理観の凝縮されたキャラクターの1人である。しかし、一部には『라이어ゲーム』の秋山深一のような雰囲気も醸し出しているという。“邦”の字は、加賀北条家の開祖たる北条氏邦に由来。加賀北条家では、男子には共通して“邦”の字を用いることが義務づけられている設定。

【毛利 俊就くモウリ・トシナリ】

山口県防府市出身。

長州藩宗家・毛利氏の某分家の末裔と語り継がれている家系にて育つ。県内の有名県立高から、中国ブロック最高難度の国立広島大を経て広島市内にて就職。のち民自党の衆院選公募に応じ、広島3区より出馬…当選を果たす。照実とは議員としては同期にあたるが、年齢は照実より下である。

「安芸の毛利、土佐の北条」

と戦国ファンや政治評論家らに称されるほど、ともに東西にて謀將と恐れられた北条氏康や毛利元就に例えられるか如く、照実とはよき宿敵関係にあたる。

今では2人は別々の政党に党籍をもっているが、同じ超党派議連に積極参加するなど、新進気鋭の若手として照実とともに注目されている。政治信条は政治右派と言えど、照実とはやや方向が違う。

照実が自平連の幹部に怒っているのに同じく、決して彼も民自党の幹部の対応に快く思っているわけではない。

北条氏が東の謀將といわれるように、ならば西の謀將といえる存在を…ということ、最も知名度としても勝る毛利氏を出そうという筆者の願望が生んだキャラである。一説には元就の権謀術数を知り尽くしているため、内閣総理大臣への野望をもっているとささや

かかれているが…

【中本 行弘くナカモト・ユキヒロく】  
青森県出身。

元・右翼活動家、インターネット上にブログを置いて日夜記事をアップする、熱心なブロガーでもある。夏の参院選に向けて、政治的な主張を次々と並べ立てて右派政治団体『立憲明政党』を支持する旨を表明し、読者らの反響を生む。自らも同党に入党し、積極的な広報活動ほか

「インターネットこそ、日本の政治を変える原動力になる！」

などと言った強烈な発言が波紋を呼び、さらなるネット上での人気に拍車をかけて急速に党内で台頭するも、ネット上とは異なったりアルの知名度の壁にやられて、想定外の大惨敗を喫する。

リアルでは、とりわけ右翼活動家仲間から蛇笏の如く嫌われている。取材を受ける活動家たちは、彼をこう評している…

「己が野望を実現するため、思想・信条を簡単にながり捨てる卑怯者だ」

「『そんなヤツが政治家を目指すなどと笑止千万！』と斬り捨てる者あり」

また、党の建て直しのため新体制にて党首補佐に就任。また参院選前、横谷との会談で『黎明党』と同盟関係を締結したことも、彼の信頼に大きな影を落としているようだ。

参院選や統一地方選に参戦歴のある政治右派系底辺政党『維新政党・新風』の副党首、かつ同党の支援団体『新しい風を求めてNE T連合（新風連）』主宰・瀬戸弘幸氏を、そのままモデルとして移しているとする説が圧倒的多数である。苗字の由来は、大阪市東成区に実在する住居地名および小学校名。

【長谷川 佑次くハセガワ・ユウジく】

東京都出身。

『黎明党』発起人にして、初代党首（“総裁”と称していた）。もとい、民自党などに党籍を置いていた元・都議会議員：若い頃に1期務めていたのだが、2期連続当選を阻まれてからは流浪の身になる。

共産党を除く有力政党全てに呆気なく見放された怒りや、もともとからあつた基本方針の乖離もあつて、自ら政党の発起を決意した…それが『黎明党』である。しかし、党勢の拡大や横谷らの台頭に伴つて突然の権限剥奪を受ける（党内クーデターによる）。そのうち、横谷ほか彼の支持派・取り巻きにより自宅軟禁に追い込まれ、末期癌を患つてしまい入院：今日に至る。

実質、現状の黎明党は長谷川派と横谷派に分裂したといつてよい…彼の取り巻きは、密かに横谷らの失脚を策謀している。しかし、彼はそれに決して快く思っているわけではないのだ…

名前の由来は、ドラマ『라이어ゲーム シーズン1』最終話に北大路欣也さんが特別出演にて演じられたゲームの首領・ハセガワと、『라이어ゲーム』メインキャラのフクナガユウジである。

【逢沢 大介くアイザワ・ダイスケく】

高知県高知市出身。

高知県警本部警備部公安課の刑事。キャリア組出身に課内を押される中、唯一のたたき上げで出世してきた。地元の大学を卒業後、高知県警に入庁して各警察署や部課を転々として現職に。相当な熱血漢で、課内でのトラブルが原因で異動を命じられること多数。

高知県内はもちろん、各地に情報屋を放つて情報収集に躍起になつており、イデオロギーやカルト宗教団体についての研究は特に熱



心である。

横谷が漁野市長選に立候補してから、彼のエキセントリックな政策の数々のルーツを極秘裏に調べてのち、和平神教の存在と彼らのおぞましきカルト性を知ること、 “反・横谷市政” をただ1人真正面から掲げている桑島らと積極的に関わってくることになる。

こういふ展開には、公安警察の陰も入れておいたほうがよいのではないか…という、これもまた作者の願望が生んだキャラである。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6784m/>

---

Governor's O&D Season 1 ~ “さと”とは、“くに”とは~  
2011年1月5日21時10分発行